

曜日和

リヨ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り曜ちゃんヒロイン。

目次

1 2話	1 1話	1 0話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
65	59	55	51	47	42	36	26	21	16	7	1

2 5話	2 4話	2 3話	2 2話	2 1話	2 0話	1 9話	1 8話	1 7話	1 6話	1 5話	1 4話	1 3話
154	148	142	138	132	126	118	106	98	92	84	78	73

3 4 話	3 3 話	3 2 話	3 1 話	3 0 話	2 9 話		番外編	2 8 話	2 7 話	A I N	番外編	2 6 話
							一日遅れのハッピーハロウィン				H A P P Y P A R T Y T R	
215	211	205	201	196	191	186	イン	175	171	165	R	160

4 4 話	番外編	4 3 話	4 2 話	4 1 話	4 0 話	3 9 話	3 8 話	3 7 話	3 6 話	番外編	番外編	3 5 話
	プロポーズ									愛してる	ただただ、甘い1日	
283	277	271	266	258	253	247	243	238	234	229	225	220

4
5
話

4
6
話

映画特別編
誰なんだ!?

4
7
話

287

291

296

306

1話

浦の星学院に入学してから2ヶ月ほど経った。この学校は元女子校。俺が普段なら絶対こんな所は選ばないが、ここは女子校だったのだ。つまり、女子ばかり。共学になったのは去年からなので男子なんてほとんどいない。そう、ほぼ確実にぼっちライフが過ごせる。わざわざ男子に話しかけるやつなんてその男子がイケメンでもない限りいないだろう。

「比企谷くん！一緒に昼食だよ！」

…と、思っていた頃が昔がありました。

「…お前はなんで毎度毎度俺のところに来るんだ、渡辺」

渡辺曜。同じ中学だった。同じクラスに一度なった。ただそれだけ。なのにこいつはやたら俺に絡んでくる。

「一緒に食べたいから？」

「お前いつも一緒にいるやつと食べればいいだろ。あれ、たかなんとかさん」

「千歌ちゃん？普段一緒にいるしお昼くらい比企谷くんと食べてもいいと思って。というか千歌ちゃんとも同じ中学なのに覚えてないんだね…」

「俺がどんな存在だったか知ってるだろ。わざわざ人の名前覚える必要が無い」

「でも私の名前は覚えてくれたね!」

「…お前があまりにもしつこいからだ」

こいつのせいで俺のぼっちライフは崩壊状態だ。ここはバシツと言った方がいいな。

「…渡辺、はつきり言うぞ。俺がぼっちだからとか同情の気持ちで関わってるならやめろ。迷惑だ。不愉快だ」

「…そういうつもりじゃないんだけど…迷惑だったらごめんね? 無神経だったよね。もう誘わないから! じゃ、じゃあ私教室戻るね!」

「…」

去っていく渡辺をふと見ると、目から涙が見えた。

「それじゃあ気をつけて帰れよ」

「今日は立ち読みしてくか…」

「比企谷くん!!」

「ん?…なんだ?」

「ち、千歌ちゃん!」

声をかけてきたのは、た…たか…忘れた。

「ちよつとこつち来て！」

「お、おい！」

「…で、なんだよ」

「どうして曜ちゃんを泣かせたの！」

「…なんで俺が犯人みたいになつてるんだ」

「だって曜ちゃんが比企谷の所から戻ってきたら泣いてたんだもん！」

「…別に俺はただ何回も飯を誘つてきて迷惑だつて言っただけだ」

「どうしてそんな事言うの」

「迷惑だからだ。俺は1人がいいの。ぼっちライフを望んでるから」

「……………そうは見えないけどな」

「なに？」

「確かに1人の方がいい時もあるよ？でも教室での比企谷くん、時々羨ましそうにグループとか見てるよ？」

「…んなわけないだろ。大体なんでそんなこと分かるんだよ」

「だって曜ちゃんが仲良くしたいって思ってる人だもん。私だつてできたら仲良くなり
たいし、比企谷くんのこと時々見るもん。…………比企谷くんか人をあんまり好きじゃな

いのはわかるよ？私も同じ中学だったし……でも、曜ちゃんは違うって分かるでしょ？あの時だって比企谷くんが一人になっても曜ちゃんは変わらず話してた。それに、今日の涙で分かったでしょ！曜ちゃんがどれだけ比企谷くと仲良くなりたいか！」

「……じゃあ逆に聞くが、何故そこまでして俺と仲良くなりたがる。さすがにしつこすぎる所はあったぞ」

「……それは、言えない」

今まで口をつむんでいた渡辺がふとしゃべりだす。

「でも……比企谷くと仲良くなりたいてって思ってるのはホントだよ？諦めなければいいかは比企谷くと仲良くなれると思っただけ……ごめんね？あんなに嫌がってたなんて思わなくて……も、もう話しかけたりしないから」

渡辺は感情が昂ったのかまた涙目になる。

「……はあ、頼むから泣くのはやめてくれ。渡辺みたいな可愛いやつに泣かれると罪悪感やばいから」

「へっ？か、可愛い？」

「……なに、俺なにかおかしなこと言ったか？」

「う、ううん！ご、ごめんね。もう泣かないから！」

「……………たまになら」

「…え？」

「…たまになら、いいぞ。毎日はずすがにきついから。時々なら一緒に食べても…いい」
「……………ほ、ほんとに？」

「ああ」

「良かったね！曜ちゃん！」

「あ、ありがとう！比企谷くん！」

「1年に1回な」

「それ時々じゃないよ!?!…もう…じゃあこれからたまに一緒に食べようね！」

「じゃあじゃあ！私も！」

「お前は無理」

「えー!?なんで!？」

「うるさそうだもん」

「直球!?!静かにするからー！お願い！はちくん！」

「おい待てなんだその呼び方」

「え？だつて本名比企谷八幡でしょ？八幡からはちくん！」

「そういうことを聞いてるんじゃないえ」

「あだ名の方が仲良くなれそうだもんね！曜ちゃんも名前で呼べばもつと仲良くなれる

よー！」

「え!?わ、私は…さ、さすがに恥ずかしいかな」

良かった。渡辺は普通の女子だ。

「じゃあ改めてよろしくね!はちくん!行こつ曜ちゃん!」

「え、う、うん!」

「あいつ1番関係ないのに1番うるさかったな…」

「比企谷くん!」

「ん?」

「ヨーソロー!」

…確か船乗りのことばだったっけ?

「……ああ」

さすがにヨーソローという勇氣はない。

続く

2話

「今日のお弁当ね、自分で作ったんだよ！」

「なあ……」

「最近料理の勉強してるんだ！そろそろ料理の一つや二つ作れた方がいいと思って」

「おい……」

「そしたら思ったより楽しいんだ！だからもう今では家にいたらいつも台所にいるよ
」

「待て待て待て待て」

「どうしたの？」

「俺が言ったこと覚えてるか？」

「……なんだっけ？」

「たまになら一緒に食べてもいいって言ったぞ？2日に1回食べてる気がするんだけど。なに、たまになってこんな頻繁なの？」

「細かいことは気にしない気にしない！」

「はぐらかしやがった……」

「…本気で迷惑だった？それなら来る回数減らすから…」

「…はあ。別にいい。もう慣れた」

なんか渡辺の悲しい顔を見ると下手に言えないな。

「そ、そっか。…あ！この卵焼き！自信作なんだ！食べてみてよ！」

「遠慮する。俺には愛妻弁当があるからな。正確には…ん？どうした？箸落ちたぞ」

「……………あ、愛妻弁当？だ、ダメだよ！妄想に入りこんじゃ！」

「…何言ってるんだか。妹だよ妹」

「い、妹を妻だと思ってるの！？目を覚まして比企谷くん！」

「違うわ。妹に弁当作ってもらってるだけだ。つまり愛妻弁当ではなく愛妹弁当。人の

話は最後まで聞け」

「そ、そういうことか。比企谷くんは妹さんのことが大好きなんだね！」

「まあ家族だしな」

「いいよね！私一人っ子だからなく。妹か弟が欲しかったな。あ、でもお兄ちゃんとか

もいいかも！」

「まあ一人っ子はそういうのに憧れるな。逆に俺は一人っ子とか羨ましく思う時もある

けどな。まあ妹第一だけど」

「やつぱりそういうものなのかな。あ！もうすぐ授業始まつちゃう！ほら！早く戻ろ

「！」

「おい！…あいつ弁当置いて一人で戻りやがって…」

授業後

「比企谷くん、この作文はなに？」

授業が終わり、さっさと帰ろうとした時、先生に呼び出された。
「どうやら前に提出した宿題の作文が原因のようだ。」

「作文のテーマを言ってみなさい」

「現在の高校生活…でしたっけ？」

「うん。それでこの文章は何？」「中学と変わらずぼっちライフを満喫しています。以上」って。1行くくらいしか書いてないじゃない。舐めてるの？」

「い、いや、だつて書くことないんですもん」

「大体、比企谷くんはボツチじゃないじゃない」

「…先生、目大丈夫ですか？」

「至つて正常よ。お昼とかいつも渡辺さんと食べてるじゃない」

「なんで知ってるんすか…」

「あの場所ね、職員室から丸見えよ。職員室の間じゃ有名よ？比企谷くんと渡辺さんカップル」

「別に付き合ってますん」

「そうなの？まあそれは置いて…とにかく、この作文は書き直し。あと罰も与えま
す」

「…なんでプール掃除なんか…大体一人でできるかよ…」

「…あれ？比企谷くん？」

「ん？…渡辺」

「ヨーソーロー！どうしたの？今水泳部練習中だけど…」

「そうだったのか。邪魔したな。先生にプール掃除頼まれたんだ。練習終わったら呼んでくれ。じゃ」

「あー！！その人が噂の彼氏!？」

「うおっ!？」

突然目の前に女子が現れた。そいつの声で周りは全員こちらを見る。

「ち、違うよ！比企谷くんは友達!」

「またまたく！噂になってるよ！お昼一緒にお弁当食べさせ合ってるとか!」

「帰りは一緒に帰ってそのまま彼氏さんの家へ……とか!」

「「きゃ〜!!!」」

そんな噂流れてたのかよ。尾ひれ付きまくってるぞ。

「そ、そんなことしてないよ!」

「彼氏さん! 曜ちゃんって彼氏さんの前ではどんな感じ!? 甘えてきたりする!?!」

「キスとかしたの!?!」

「ちよ、ちよつとみんな! 違うんだってば〜!」

とりあえずスク水の女子に囲まれてメンタルもたないから解放して早く…

「比企谷くん〜! 練習終わったよ!」

「ん、おう。わかった」

「…一人で掃除するの?」

「ああ」

「さすがに大変だし私も手伝うよ! 今日のお詫びも兼ねて!」

「いや、練習で疲れてるだろ。俺だけでやるからかえって休め」

「いいのいいの! それに私掃除好きだから! モップ貸して!」

「お、おい……まあ、サンキユな」

「うんっ！さ！早く終わらせ！」

「…というかその格好でやるの？」

「え？うん。水着なら汚れたりしても大丈夫だし」

競泳用なものもあつて目のやり場に困るんですが…渡辺って結構あるよな。何がとは言わないけど。

「…わかった。じゃあ渡辺はここからやつてくれ。俺は奥からやつてくから」

「こんな広いプールでお互い角からやつてたら一人でやつてるようなものだよ？一緒にやろうよ！その方が話しながらできるし！」

なるべく見ないようにするために離れようとしたのに。

「はあ…わかった」

「ふう〜！終わったね〜！」

「ああ…つかれた」

「でも綺麗にすると気持ちもスツキリするよ！」

「まあそうだな。ここってシャワーあるのか？汗かいたから体流したいんだが」

「あるよ！じゃあ一緒に行こっか」

「…おい、ここ女子専用だよ」

「でも今はもう誰もいないし大丈夫だよ！」

「いや、お前がいるじゃん。渡辺もシャワー浴びるだろ？先にいいぞ。終わったら呼んでくれ」

「覗いちやダメだよ？」

「俺はそんな変態じゃない」

それにしてもあの鬼畜教師め…渡辺に手伝わってもらったからまだ良かったものの、一人でやってたら次の日筋肉痛だったわ。

「きゃあああああ!!」

「っ!?どうした!？」

俺はドアを開けて状況を確認…しようとしたが踏みとどまる。これはあれじゃないのか。ラッキースケベでそのまま吹っ飛ばされて気絶パターン。いやだがほんとにピンチかもしれん。どうすれば…

「比企谷くんっ!!!虫く!!!」

「どわっ!?!」

試行錯誤していると、ドアが思い切り開き、渡辺が突っ込んできた。

「いって…お、おいどうした」

「む、虫が!虫!」

「虫?…でつかいバツタだな…ほらもう外に逃がしたから…」

「う、うん…どうしたの? 目見開いて」

「…俺は見えてないからな」

「え?」

途中まで驚いて気づかなかったが、渡辺はまだ下着姿だった。

「……っつ!!?」

渡辺もやつと気づいたのか猛ダツシユで更衣室に飛び込む。

「…み、見た?」

「…忘れるから」

「……エツチ」

「俺が覗いたわけじゃないから。無実。冤罪だ」

「言い訳は見苦しいよ!」

「事実だ」

「もうっ…じゃあお願い一つ聞いてくれたら許してあげる」

「だからわざとじゃないって…」

「先生に比企谷くんが女子更衣室に侵入したって言おうかな」

「全力でお願いを叶えさせていただきます」

続く

3話

「比企谷くんヨーソロー!」

渡辺の策略にはまり、今日は一日買い物の荷物持ちをさせられることになった。

「おう…いくか」

歩きだそうとすると、後ろからつつかれる。

「…なんだ?」

「……………ばか」

「なんで罵倒されたの俺」

「バカだからだよっ!」

「なんでそんなキレてんの…」

俺なにかおかしいなと言ったか? おう…いくか。と…なんだ? しか発言してないんだけど。

「…あー…」

分かってしまった。つまりあれだな。女子はお洒落をしてくる。

その感想を聞きたいのだ。

「…その服、悪くないな。」

「…言うのが遅いつ！」

「気づいたんだからいいだろ…」

「今回は許してあげる…えへへ」

俺なんかに褒められて何が嬉しいのやら。

「よしっ行こう！全速前進、ヨーソロー！」

「で、なにこころ」

「実は比企谷くんに来てもらったのはこれのためなのです！」

「カップル限定スイーツ…」

「食べてみたかったんだあ！しかも！船とスイーツがコラボしたストラップももらえる

んだ！」

「なるほどね…まあいいや、さっさと行こうぜ」

「あれ…断ると思つたのに」

「どうせ行くことになるからな。それなら無駄な抵抗はしない」

「あはは…よし、じゃいこう！すみませーん！」

「はい！いらつしやいませ！もしかしてカップル限定スイーツでしょうか？」

「はいそうです！」

「でしたらカップルの証明となるものはありますか？」

「証明？」

「はい。例えばプリクラなど……」

「も、持っていないです……」

「でしたら、今ここで彼女さんか彼氏さんが頬にキスをして頂ければ証明となります」
「帰ります」

「す、ストツプ比企谷くん！」

「俺は帰るぞ。絶対にだ！」

「待って待って！お願い！どうしても食べたいの！」

「無理。ほかの男子に頼め。他のやつなら喜んでついでくるぞ」

「さつき無駄な抵抗はしないって言ったじゃん！」

「それとこれとは話が別だ。なに？俺を恥ずか死にさせたいの？」

「一瞬！一瞬だけ！」

「……お前嫌じゃねえの？」

「え？………う、い、嫌だよ！嫌だけどスイーツのためだよ！」

なんかそんなストレートに言われると傷つく。

「なら諦めよう。うん」

「もうっ！えいっ！」

「おいっ、引っ張るな！」

「…っ」

「はい！証明されました！少々お待ちくださいね！」

「………よ、ヨーソロー」

「なんでもヨーソローで解決できると思うな」

「う、ううう！だってすごい恥ずかしいもん！」

「そんなの俺もだ。いきなりしやがって…」

「………今の比企谷くん、顔真っ赤だよ」

「…お前もな」

「お待たせしましたー！カップル限定スイーツです！」

「…食べるか」

「…うん」

「いやー、美味でした！」

「確かに美味かったな」

「来てよかったでしょ？」

「…まあな」

「はい！ストラップ！」

「別に俺はいらないんだが…」

「二つあるからもらって！今日のお礼！」

「…じゃあもらつとくわ」

「うんっ！えへへ…おそろいだね！」

「…あざとい」

「えー？どこがー？」

「…帰るぞ」

「あ、待ってよー！」

続く

4話

「えへへー♪」

「曜ちゃんどうしたの？」

「じゃーん！見て！ストラップ！」

「あ！それ前欲しいって言ってたやつだよ？ゲット出来たんだ！」

「うん！」

「あれ？でもそれカップル限定なんじゃ…」

「比企谷くんについてきてもらったんだ！いや〜楽しかったよ！」

「…ふうん？」

「ど、どうしたの千歌ちゃん、ニヤニヤしてるよ？」

「え？いや〜、曜ちゃんもすっかり恋する乙女だなくって」

「え!?そ、そんなことないよ！」

「みんなもそう思うよね？」

「うん」

「なにそのクラス一体感…」

「クラスじゃはちくんと曜ちゃんはいっつき合うのか!? つて話題で持ちきりだもん!」
「そ、そんな付き合うなんて…!」

「…」

「曜ちゃんは告白とかしないの?」

「こ、こここ告白!? わ、私まだ比企谷くんのこと好きなんて言っていないよ!」

「とぼけてもダメだよ。曜ちゃん、はちくんと話す時、とつても楽しそうだもん!」

「そ、それは…確かに楽しいけど」

「曜ちゃん! そろそろ自分の気持ちを認めようよ! 曜ちゃんは比企谷くんのが好き
!?! 嫌い!」

「……す、好きです」

「裁判長! 曜ちゃんがついに白状しました!」

「しっかり録音したよ!」

「えっ!? ま、待って消して!」

「ダメっ! 千歌、パス!」

「…」

「はいよ! 曜ちゃん! 私は応援するからね!」

「それより録音消して〜!」

「…」

なんで俺教室にいるのにそんな話してんの？なに、イヤホンしてるから聞こえてないと思われてるの？バツチリ聞こえてるんですけど。これから渡辺とどう接すればいいのでしょうか。

「比企谷くんっ！帰ろ！」

「……ああ」

渡辺は聞かれてないと思ってるからか平常運転だが、俺はそうもいかない。

「そういえばもうすぐ夏休みだね」

「そうだな」

「夏休みどこか一緒に遊びに行こうよ！」

「…2人でか？」

「そう！」

「…断る」

「えー？どうしてー？もしかして暑いから外出たくないとか？」

「その通り」

「じゃあ海行こうよ！海なら涼しいし楽しいし！」

「それはもつとダメだ」

それはつまり渡辺の水着姿を見るところだ。

渡辺は制服からでもスタイルがいいのが伝わってくる。

体育の時とか特に。

メンタル的に死ぬ。

以上。

「…私と行くの、いや？」

「嫌ではないが……」

「私は…比企谷くんと行きたい、な」

「……よくそういう恥ずかしいこと言えるよな」

「ええっ!?……だ、だってそうでもしないと比企谷くん来てくれないし……」

「……ほかの男子も連れてきていいならいいぞ」

「っ!うん!それでもいいよ!なら私は千歌ちゃん連れてくるね!」

俺に友達なんているのかって?ふっ、俺には女神がついているのさ。

「じゃあ…これ、連絡先教えてもらってもいい?」

「ああ。ほら」

「わ、私が打つの?」

「俺やり方知らんし」

「わ、わかつたよ。……………はい！それじゃあまた連絡するね！また明日！比企谷くん！」

「ああ」

「ヨースロー！」

「……………」

ヨースローというのはまだ恥ずかしかったので、周りに人がいないのを確認し、敬礼だけした。

「っ！えへへ！」

渡辺はそれを見て満面の笑みを浮かべて帰っていった。

続く

5話

そして、ついにやって来ました夏休み。

やっぱり家にいるのが一番。エアコン涼しい。

「お兄ちゃん、そんなダラダラしてないで運動してきたらー？」

「小町よ、そんなダラダラしながら言っても説得力ないぞ」

「えへへ」

「…ん？メール…」

どうせメーラーダイモンさんだな。うん。俺なんかこの人にメール送られまくってもう親友になっちやっただまである。

「…」

メーラーダイモンからのメールが鳴り止まない。

こんなの初めてだな。

「…電話？」

もしかしてメーラーダイモンさんじゃなかったのか。それは悪い事をした。誰だ？

「…もしもし」

「あ！やっとなた！」

「…渡辺か？」

「うんっ！比企谷くんヨースロー！」

「…おう」

「ノリが悪いぞー？前は敬礼してくれたのにー」

「あれは忘れる。ただの気まぐれだ。それより、用があつたんだろ？」

「そうそう！この前いつてた海の話！今週の日曜とかどうかな!？」

「まあ俺は空いてるぞ」

「じゃあお友達さんにも空いてるか聞いて！こっちは2人ともオーケーだから！」

「了解」

「それじゃあね！ヨースロー！」

「あいつヨースロー言いきすぎじゃね？……さて」

俺はある人物に電話する。

「…もしもし」

「比企谷くーん！お待ちせ！」

「おう」

「はちくんおっす！」

「高海、その挨拶は古い」

「えー？ そうかな？」

「比企谷くんのお友達は？」

「もうすぐ来るらしいぞ」

「はちまーん！」

「おう、来たな」

「八幡おはよう！」

「うっす……戸塚」

「あ、もしかして、渡辺さん、と高海さん、だよな？ 僕戸塚彩加って言います！ よろしく
ね！」

「……………比企谷くん」

「どうした？」

「…女の子のお友達いたの!!？」

「し、しかもすごい可愛いよ曜ちゃん…」

「何言ってるんだお前ら」

「え？」

「えつと…僕、男の子、です」

「……………え?！」

「まあ初めはわからんのは無理ない。俺もわからなかったし。戸塚は正真正銘男の娘だ」

「は、八幡?なんか字が違うよ?」

「メタ発言だぞ。戸塚」

「お、男の子…」

「嘘…」

なんか渡辺達がうなだれている。まあ仕方ないな。戸塚は天使だし。

「そ、それじゃあ気を取り直して!着替えてこよつか!行こつ千歌ちゃん!」

「うん!はちくん、楽しみにしててね!」

「はいはい」

「…八幡つて女の子の友達いたんだね」

「まあ一応はな」

「どっちかが彼女なの?」

「なわけないだろ」

「そうなの？2人とも可愛いよねー」

「戸塚も可愛いぞ」

「そ、それは喜んでいいの…かな？」

「とりあえず俺達も着替えるか」

「くっ…」

戸塚の着替えが見られると思ったのに…なせ男子、女子、戸塚に分かれてるんだ！く
そう！

「八幡、大丈夫？」

「ああ…」

「はちくーん！」

「わあ！高海さんすっごく可愛いね！」

「えへへ、ありがとう！」

「スク水か？」

「んー、一応違うけどスク水でもあるかも」

「なんだそれ…」

「あれ？渡辺さんは？」

「え？…あれ？さつき後ろにいたのに…？曜ちゃん！」

「ち、千歌ちゃん！」

「曜ちゃん何恥ずかしがってるのー？大丈夫だよ！すつごく可愛いから！」

「ほ、ほんとに…？」

「ほんとほんと！ほら早くっ！」

「わわっ！…あ…ひ、比企谷くん」

「お、おう」

渡辺は水色のフリルのついたビキニだった。

「ね！はちくんもそう思うよね！」

「あ、ああ…いいんじゃないか」

「よ、ヨーソー…」

だめだこの子。顔真っ赤にしてショートしてる。

「よし！じゃあみんなで遊ぼう！」

「曜ちゃん早いよー！」

「えへへっ！一番っ！」

「さ、さすが水泳部だね…」

「お、俺もうギブ…」

「大丈夫？休む？」

「ちよつと休んでくる…」

「はちくんそのまま帰っちゃダメだよー?」

「んなことしねえよ…」

なるほどその手があつたか。

「ちよつと休憩…」

それにしても海に来たのいつぶりだろう。いつの間にか行かなくなつてたからな。体力も落ちてるし、さすがに運動した方がいいか…

「ひーきがやくんっ」

「冷っ!?!…渡辺か」

「大丈夫? 熱中症とか?」

「いや、ただ体力ないだけだ…」

「運動も大事だよ?」

「ああ…」

「よいしょつと」

「…なんで隣座るの」

「え? 私も休憩しようと思つて」

「…」

「……なんで離れるの？」

「いや、近い」

「……むー……」

「お、おい、近づいてくるな」

「また離れた……えいつ！」

「お、おいやめっ……ろ！」

「ほれほれ〜！」

渡辺は俺が離れたことが気に食わなかったのか、俺の腹をくすぐってくる。

「ま、まじでっ……うおっ！」

「へ？わっ！」

俺達は耐性を崩し、倒れる。

渡辺は俺に覆いかぶさるように倒れてきた。

「あ……」

「…………は、早くどけ」

「っー(ぎ)っ(ぎ)めん！」

「ああ……」

「……」

やばい、柔らかいのがダイレクトに当たってやばかった。あんなに柔らかいのか。女子のアレは。

「曜ちゃん！…あれ？どしたの2人とも顔赤くして」

「な、なんでもないよ？ね？」

「お、おう何でもないぞ」

「ふーん？」

そしてその後、スイカ割りやら色々と定番を楽しんだ。

「いやー楽しかったね！」

「うんっ！僕久しぶりにあんなにはしゃいだよ！」

「…ねえねえ比企谷くん」

「なんだ？」

「比企谷くんは楽しかった？」

「まあ、悪くはなかったぞ」

「そっか。良かった。…そ、それでね？その…きよ、今日ね？夜にお祭りがあるんだ」

「そーいやなんかあったな。チラシそこらじゅうに貼ってあったし」

「それなんだけど…良かったら一緒に行かない？」

「…まあいぞ」

「や、やっぱり嫌だよね……つてええ!?!いい、いいの!?!」

「なにそんな驚いてるんだ」

「ひ、比企谷くんのことだから「そんなメンドクサイの行くわけないだろ」とか言うと思つたのに」

「……なら行かない」

「あー! 待つて待つて! 嘘! 嘘だから! 一緒に行こ!」

「……そのままいくのか?」

「え? うんとね、準備とかしたいから……また7時に集まらない? ここで」

「わかった」

「……戸塚くん戸塚くん」

「どうしたの? 高海さん」

「あれ、どう思います?」

「2人ともとつても仲良しだよね!」

「おお、なんだか戸塚くんが眩しいよ……!」

6話

「お兄ちゃんおかえりー」

「おう。悪いけどこの後また出かけるから」

「そうなの？どこ行くの？こんな時間から」

「…祭り」

「あーそういえばあったね。…ん？……お兄ちゃん、今、祭りって言った？」

「ああ」

「だ、誰と行くの!?まさか1人じゃないよね!？」

「…友達だよ」

「お兄ちゃんに友達なんているわけないでしょ!もしかして女の子と!？」

「……まあ一応そうだが」

「ひやつほーう!お兄ちゃんにも春が訪れたー!」

「今は夏だぞ小町」

「お兄ちゃん!これはチャンスだよ!告白だよ!」

「待てなんで俺が恋心を抱いてる前提なの?」

「え？違うの？」

「なわけないだろ。ただのクラスメートだ」

「ふーん……？誘ったのどっち？」

「俺が誘うと思うか？」

「ふむふむなるほど……お兄ちゃんもやる時はやるね！」

「俺は前からやる時はやる男だぞ」

「まあ普段がやる気無さすぎだからねー」

「もしかしてその格好で行くの？ダメだよ！小町がこーでねーとしてあげる！」

「それを言うならコーデイナーだな」

「比企谷くーん！はあつ、はあつ……ふう。ごめんね、待った？」

「別に対して待ってないから気にするな」

渡辺は普段と違い、後ろで髪を結んでいる。格好も青の浴衣だ。

「……これ、どうかな？今日のために選んだんだけど……」

「……可愛いと思うぞ」

「っ！そつか！えへへ！ありがとう！行こつか！」

「お、おい、なんで手つなぐの」

「えー？だめ？じゃあ腕！」

「やめなさい」

「ぶー…もうっ、早く行こっ」

「なんで不機嫌になるんだ…」

「比企谷くんがヘタレだからだよ！」

「今頃知ったのか」

「ええー…まさかそんな反応されるとは思わなかったよ」

「ほら、早く行くぞ」

「あ、待ってよ！」

「りんご飴美味しいー！」

「花火は見るのか？」

「もちろんだよ！でも場所空いてるかな？」

「さあな…」

俺達はどこか空いてる場所を探したが、どこにも見当たらなかった。

「そのボーイ&ガール！」

そこに突如現れた金髪美少女。俺たちと同じくらいの年っばい。

「な、なんですか？」

「もしかして花火見る場所探してるのかしら？」

「ええ、まあ」

「じゃあ私の取っておきの場所を教えてあげるわ！カモン！」

「…どうする？」

「行つてみよ。もしかしたら穴場の場所かも」

「わあ！ここなら綺麗に見れそう！」

「でしょ？」

「どうして俺たちに？」

「そうね…懐かしかったから、かしら！」

「懐かしかった？どこかで会ったことありました？」

「あつたかもしれないしなかったかもしれないわね♪」

「どっちですか…」

「今はそんなことより、デートを楽しみなさい！チャオ〜！」

「デートじゃありません…っついていない」

「比企谷くんもこつちきてごらんよ！すごい景色！」

「はいはい。…おお、結構すごいな」

「ね！あの人に感謝しなきゃ！」

そして、少し待つと花火が打ち上がり始めた。

「わあー!すごい綺麗!」

「写真撮るか」

「…ねえ、比企谷くん」

「なんだ?」

「来年もこうして、私達是一緒にいるかな?」

「唐突だな。そんなのクラス変われば分からんだろ。まあ二クラスしかないが」

「…来年もまた夏祭り行きたいね。2人で」

「……………まあ、行けたらな」

「うん。次は比企谷くんから誘ってよ!」

「えー……」

「あからさまに嫌な顔したね……待ってるからね!」

「……………善処する」

「比企谷くん!」

「今度はなんだ?」

「ヨーソーロー!」

「……」

「…」

これはやり返せということだろうか。

…まあ人いないしいいか。

「…ヨースロー」

「…ぷっ！あはは！比企谷くん似合わないね！」

「…もうおうち帰る」

せっかく勇氣だしてやったのに。

「ご、ごめんごめん！…私、決めた！」

「なにを？」

「比企谷くんを倒します！」

「え、何怖い」

「覚悟しててね！」

「…よく分からんが、御手柔らかかに頼む」

「ヨースロー！」

7話

夏休みが明けた。昨日徹夜で宿題終わらせたから眠い。

渡辺に倒す宣言された日から、変わったことがある。

メールと電話がすごい。1日に1回はかかってくる。まあちゃんと出るんだけどね。俺超優しい。

「お兄ちゃん！レッツツゴー！」

「はいよ。ちゃんと捕まれよ」

小町を自転車の後ろに乗せて学校へ向かう。

「そいえばお兄ちゃん、あの夏祭りからどうなの？」

「どうもなにも、何も無いぞ」

「えー、つまんないー！」

「あ！はちくん！」

「ん？高海か。うっす」

「おっす！久しぶりだね！元気だった？」

「まあボチボチだな。お前は元気そうだな」

「うんっ！毎日元氣全開だよ！元氣全開daydayだよ！」

「なんじゃそりゃ」

「お、お兄ちゃんお兄ちゃん」

「ん？」

「も、もしかして、その人が夏祭りの!?!」

「いや、夏祭りのやつの友達だ」

「もしかして、妹さん？可愛いね！高海千歌です！」

「妹の比企谷小町です！愚兄がお世話になってます！」

「愚兄……」

「お兄ちゃんにまだ女の子の友達がいたなんて……小町寂しいけど嬉しい！」

「どっちだよそれ。というか友達じゃ」

「えー!?友達じゃないの!?!」

「……友達とクラスメートの間だな」

「すみませんこんな兄で……」

「ううん！はちくんは照れ屋さんだから仕方ないよ！」

「おい」

「じゃあ小町ここでいいや！千歌さん！メアド交換しましょ！」

「うん！」

「…よし！ありがとうございます！それじゃあお兄ちゃんをよろしくお願いします！お兄ちゃん！迷惑かけないようにね！」

「お前は親か」

「小町ちゃん、しつかりしてるねー」

「まあお前よりはな」

「ちよつとそれどういう意味!?千歌だつてしつかりしてるもん！」

「へー」

「こいつがしつかりしてたら全世界のやつがしつかりしてる事になるな。」

「あー！信じてないでしょ！いいもん！曜ちゃんに言いつけてやる！」

「なんで渡辺なんだよ」

「だつてはちくん曜ちゃんには弱いもんね！」

「俺がいつそんな場面を見せた」

「いいから！ほらいくよ！」

「と言いながら後ろに乗るな抱きつくな柔らかい匂い恥ずかしい。というかあいつここに来るじゃないのか？」

「あ、そうだった。曜ちゃんを待とう！」

「千歌ちゃん！ヨーソロー！あれ比企谷くん!?」

「うっす」

「たまたま会ったんだ!」

「そうなんだ!」

「それでね!はちくん酷いんだよ!千歌のことバカにしてくるの!」

「馬鹿に馬鹿と言って何が悪い」

「バカっていう方がバカなんだよ!」

「っっていう時点でバカだな」

「ばか!」

「…むー」

「曜ちゃん?」

「…なんか千歌ちゃんと比企谷くん仲いいね」

「どこをどう見たらそうなるんだ。罵りあつてただけだぞ」

「なんか雰囲気か…」

「曜ちゃん嫉妬してるー!」

「なっ!?し、してない!」

「してるー!はちくん取られて嫉妬してるんだー!」

「ああー!!聞こえない聞こえない!」

「お前から近所迷惑だぞ」

「冷静なふりしてるはちくんも顔赤い!」

「ひ、比企谷くんも対抗してよ!」

「俺学校いく」

「あ、逃げた!」

「ひ、比企谷くん待ってよー!」

「曜ちゃんも待ってよー!」

続く

8話

日にちも経ち、あの季節がやってきた。

「そう！それは文化祭!!」

「はちくん急に騒いでどうしたの？」

「リア充共がイチャイチャするためだけのクソイベント!」

「ひねくれすぎだよ比企谷くん…」

「そこ、静かに。文化祭ということで劇をやるんだけど、案がある人いる？」

うちの学校では1年生は劇。2年生はなにか調べ物をして展示と決まっているのだ。

3年は知らん。

「だれも案はないの？なら私が決めちゃうわよ？そうね……ロミオとジュリエット！なんてどうかしら」

「でも女子高ですよ？男子なんて…」

「いるじゃない、そ…こ…に♪」

「……」

なんだかすごい視線を感じるぞ。絶対に誰とも目を合わせてはいけない。絶対にだ。

「ひーきーがーやーくーん？」

「……」

寝た振りだ。うん。ほら、身の危険を感じた時は死んだフリが一番だろ？

「返事しないと成績落とすわよ？」

「それはせこくないですかね……」

「はいじゃあ決定！大丈夫！比企谷くんは目以外はイケてるから！目以外は」

大事なことなので二回言いました。そんなことより、俺がロミオなんてやってみる、気絶するヤツ続出するぞ。キモすぎて。

さらにそもそもジユリエットをやるやつがいるのかが問題だ。

中学のキャンプファイヤー、男女2人1組で踊るのに相手いなくて1人でエアダンスやったのはなかなか辛かった……

「ジユリエット役は……そうね、やっぱり渡辺さん！」

「わ、私!？」

「だってあなた達仲いいしいい演技が出来ると思うわ！うん！決定！」

「え、ちよっ」

「曜ちゃんジユリエットやるのー!?主役なんていいなー！千歌と変わってよ！」

「そ、それはダメっ！」

「やっぱりはちくんとやりたいんだね〜?」

「そ、そういうことじゃ……なくもないけど」

真隣でそういう会話しないでいただけろ?この前と言いこの子達わざとでしょ。

「やっぱりドレスとかも着るんでしょ?羨ましいなー!」

「ど、ドレス……!」

渡辺も何やら妄想モードに入ったみたいだ。なんかニヤニヤし始めた。

「はちくんはタキシード?かな?……なんか微妙だね」

「おい」

「大丈夫!私が立派なロミオにするから!」

「なんだ立派なロミオって」

「あれ?曜ちゃん急にすごいやる気だね?」

「決まっちゃったことだしやるからには全力だよっ!」

「あれだ、多分文化祭の日は台風が来るな。うん。俺の勘はほぼ当たるんだ」

「そんな嘘くさい予知してもやるよ!?!ほらさっそくお話を読んで勉強しよっ!」

「おいどこ行くんだよ!?!」

「もちろん図書室だよ!全速前進ヨーソロー!!」

続く

9 話

劇の配役も決まり、練習開始から1週間。

普通のロミジュリではただのパクリなので現代風にしようと言うことになった。セリフを少しずつ変えたりするくらいなのでそこまで難ではなかった。

順調に進んでいたかと思われていたが…

「ジュリエット、俺と結婚してくれ」

「…え、えつと、あ、あの…！」

「かーつと！ 曜ちゃん！」

「(ズ、ズ)めん！」

途中のロミオの告白シーン。ここで止まってしまっている。

最初は俺が恥ずかしくてなかなか言えなかったが、そこまで時間はかからなかった。問題は渡辺だ。

俺がやつと言えたと思ったら今度は俺がセリフを言う度に渡辺が赤面し、先へ進まないのだ。

「曜ちゃんがこんなふうだったとは…」

「だ、だってこ、告白なんてされたことないし……！」

「いや、演技だから」

「まあはちくんの告白なんてこういう時しか聞けないもんね。ちゃんと動画に収めてあげるよー！」

「おいまてお前今なんて言った」

「痛い痛い！チョップは痛いよはちくん！」

「ほらほら二人とも。曜ちゃんもそろそろ……」

「ご、ごめん！今度はちゃんとするから……すう……はあ……よしっ！比企谷くん！準備OKだよー！」

「……ジュリエット、俺と結婚してくれ」

「は、はい……！ロミオ……おやつは無理ー!!」

「あ、曜ちゃん！はちくん！追って！」

「はいはい……！」

「はあ……みんなに迷惑かけてばかり……私こんなに免疫ないなんて……」

「おい渡辺」

「比企谷くん……ごめんね。私のせいで……」

「別に気にするな。俺だって最初は言えなかったしな。……まあまさか渡辺がここまでできかないのは意外だったけどな」

「だって……私告白なんてもちろん、男子ともほとんど話したことなかったくらいだよ？」

「そうなのか？ お前ならクラスを中心とかでワイワイやってそうだけだな」

「普段いつも千歌ちゃんといたから……比企谷くんは告白されたことある？」

「あると思うか？……まあ自分から告白して爆死したことならあるけどな……」

「え、告白したことあるの!? その人どんな人!？」

「ち、近い」

「え?……(ぎょぎょ)めん!」

「いや……俺の告白した相手な、別にそのへんにいるような女子だったぞ。ただ誰にでも話しかけるようなやつで俺にも話しかけてくれてな。それを勝手に勘違いして振られただけだ」

「そっか……羨ましいなあその人」

「……」

今のは聞かなかったことにしよう。意味を考えるなんて野暮なことはいらない。

「どうしたらうまく出来るかな……?」

「……まあ慣れるしかないな。……学校終わったあと時間あるか? 自主練という手もあ

る」

「え？私は大丈夫だけど…比企谷くんも手伝ってくれるの？」

「そりやそうだろ」

「で、でも悪いよ」

「…こういうのはお互い助け合うもんだろ？こういう時今までなかったから知らんけど」

「…：…そうだね！それじゃあ比企谷くんが困った時は私が助けるよ！絶対に！約束！」

「…おう、頼むわ」

「えへへ！頑張ろうー！全速前進ヨーソロー！」

続く

10話

「ち、千歌くすぐったいよお！」

「ほらほら曜ちゃん動かないの！」

現在、俺は必死に耐えている。

理由は今女子たちは衣装合わせをしているのだが、カーテンの先から聞こえてくる内容が普通の男子だったら一発KOしそうなものばかりなのだ。

「やっぱり曜ちゃんお肌すべすべ〜！」

「千歌ちゃんだつて綺麗だよ？」

「はちくんもきつと曜ちゃんにメロメロだよ！」

「ちよ、ちよつと千歌ちゃん!?比企谷くんすぐそこにいるんだから！」

「大丈夫大丈夫!多分聞こえてないって！」

うん。聞こえてないよ。決して。ほんとほんと。

「よしつでできた!曜ちゃんすつごく似合ってるよ！」

「ほ、ほんと…?」

「うんっ!さつそくはちくんに見せよう!ほらほら!」

「こ、心の準備がっ…」

「はちくーん！」

「終わったの…か」

高海に呼ばれたので振り向くと、そこには青、というよりは水色を基調としたドレスを着た渡辺の姿があった。

「どうどう!!? 曜ちゃんすつごく綺麗だよね！」

「……」

「おーい? はちくーん? はちくーん！」

「え? あ、お、おう。……いいと思うぞ」

「あ、ありがとう……」

「良かったね! 曜ちゃん！」

「う、うん……!」

いかんいかん、ほんとに見惚れてしまった。まあ普通に渡辺は可愛いの種類に入るしな。

「じゃあ次ははちくん! こっち来て！」

「いや俺は1人で……」

「ほらほら！」

「お、おいつ！」

「お、おいお前どこ触ってんだ!？」

「じつとして！」

「お、おいバカ…ひっ！」

「な、何してるんだろう…?」

「できた!じゃじゃーん！」

「わあ!比企谷くん似合ってるじゃない！」

「ほんとだ!メガネかけてるほうがかっこいいよ！」

「疲れた…」

「どうどう?曜ちゃん！」

「……」

「おーい?曜ちゃん?曜ちゃん！」

「え?あ、う、うん!か、かっこいいよ！」

「もー、はちくんと同じような反応するんだからー」

もうなんか精神的に疲れた帰りたい。帰らせて。帰る

「…比企谷くん」ボソッ

「ん？」

「…私はメガネかけてない比企谷くんもカツコイイと思うよ」

「お、おう…：渡辺も良かったなそんな豪華な衣装着れて」

「うんっ！みんなのおかげだよ！…ほんとに似合ってるかな？」

「ああ、似合ってると思うぞ。客観的に見ても主観的に見ても」

「そ、そっか。ありがとっ！…えへへ！」

「さあ！練習もラストスパートだよ！みんな気合入れていこう！」

「おー！！！」

「ほらはちくんも！」

「…おー」

「元気がないぞ！ヨーソロー！」

「それはもうやらない」

そして、文化祭がやってきた。

1 1 話

劇はなんとか無事に終わった。

しかし、問題はその後だった。

「あ、あのー！」

「ん？何か用か？」

劇が終わり、クラスの出し物の手伝いをしていると、ネクタイからして1年生から声をかけられる。

「え、えつと…：しや、写真撮ってください！」

「ああ。じゃあカメラ貸してくれ」

「い、いえ！そうではなくて…：一緒に写真撮ってください！」

「…俺と？」

「はい！」

「はあ…：まあ別に構わんが…：おい高海！写真撮ってください！」

「え？うんいいよー」

「ありがとうございます！」

「おう」

「君！」

今度は3年生から声をかけられる。

「はい？なにが？」

「一緒に写真撮ろ！」

「べ、べつにいいですけど……高海また頼む」

「はいはい。いくよー」

「これいつ終わるの……」

最初の1年生が来てから、何故か俺と写真を撮ろうとするやつが絶えなくなり、ずっと写真撮りっぱなしになっている。

「いやー、はちくん人気者だね」

「そりゃあ比企谷くんは眼鏡かければただのイケメンだからねー」

「……」

「よ、曜ちゃん……？」

「なあに？千歌ちゃん」

「な、なんか怒ってない？」

「んー？別に怒ってないよ？……でも比企谷くんはお仕置きが必要かな」

「ひっ…！よ、曜ちゃんのこんな黒いところ初めて見た…！」

「ありがとうございます！」

「おう…」

もうこれほんとと全校生徒分やる勢いじゃない？なんか高海達はニヤニヤしてるし渡辺からは殺気がすごいし…

「…比企谷くん！」

「うおっ！びっくりした…なんだよ渡辺」

「ちよつと鼻の下伸ばしすぎ！」

「いたいたい！鼻引っ張るな！伸ばしてないから！」

「伸ばしてた！女の子に囲まれてニヤニヤしてたもん！」

いやだってこんな囲まれたことないんだから仕方ないじゃん。

俺だつてただの男子高校生ですから？

「だ、だからつてなんでお前に怒られなきゃいけないんだよ」

「そ、それは…私が嫌なの！」

「なんだそれ…」

「ほら！比企谷くんにもやってもらおうこといっばいあるんだから！」

「ひ、引っ張るな！」

「もうホント疲れた…」

「あはは…お疲れはちくん」

あの後めちやくちや渡辺にこき使われた。明日筋肉痛になりそう。

「比企谷くん一緒に帰ろ」

ここで渡辺登場。さつきよりかは殺気はないが、まだ怒っているようだ。

「いや、高海と帰れば…」

「か・え・ろ？」

「…はい」

もう怖い。ほんと怖い。

「…」

「…」

「…あ、あの…渡辺？」

「…なに」

「いつまで怒ってるんだよ」

「怒ってないもん」

「そろそろ機嫌なおせよ…」

「もともと悪くない」

なんだこの浮気した彼氏が彼女に機嫌直してもらおうと必死感は…

「…とかかべつに誰と写真撮っても渡辺には関係なくないか？恋人でもあるまいし」

「あ、あるもん…わかってるくせに」

「さあな………はあ、どうしたら許してくれるんだ」

「…じゃあ写真一緒にとつてくれたら許してあげる」

「いや、写真ならクラスのヤツらで撮っただろ？」

「比企谷くんと2人ではまだ撮ったことないもん」

「…わかつたよ。それで許してくれるなら」

「よし！じゃあ撮ろう！ほらこっち来て！」

「はいはい。つておい腕になんでひつつく」

「気にしない気にしない！いくよー！はいチーズっ！」

「離せ…」

「はいおっけ！写真後で比企谷くんにも送ってあげるね！じゃあまた明日！ヨーソロー

！」

機嫌が直ったのかいつもの口癖を残してスキップしながら渡辺は帰っていった。

翌日、渡辺のスマホの待受が俺と撮ったツーショット写真だったらしく、クラス中からからかわれた。

12話

「今日も暑いな…」

夏も終盤かと思いきや、今日はかなり気温が高い。

こんな暑い日は家にいるに限るが、そうもいられない。

俺の欲しい本の発売日なのだ。しかもかなり人気の作品で発表日に行っておかないと売り切れになっている時がある。

「帰りにアイスでも買うか。小町も暑いって言ってたし」

「あれ？はちくん？」

「ん？高海」

「これはめんどくさそうな奴にあつたな。適当に話して退散しよう。」

「奇遇だね！こんな暑い日なのに、はちくん外出るなんてめずらしいね？あんなに普段インドア派を主張してたのに」

「欲しい本があるんだよ。高海こそ一人で何してんだ？」

「そうなの！おつかい頼まれちゃってさー。私ぼっかりこき使うの！ひどいと思わないっ。」

「俺も小町によくこき使われるから一緒だな」

「そういえば小町ちゃん元気？今度また会いたいな！」

「おー、言つとくわ。それじゃ」

「ちよおつと待つたー！」

「ぐえつ！…首を引つ張るな首を」

「こんな偶然会えたのにちよつと話して終わりなんてもつたないよ！」

「たまたまあつただけで勿体ないも何もないだろ」

「とにかく！遊ぼ！」

「お前それが目的だろ」

「えー？いいじゃん！本買うだけでしょ？本買ったあと暇でしょ!?暇だよね！」

「お前は一体俺のなにを知つとるんだ」

「ほらほらレッツゴー！」

「おーい、人の話聞け」

「わあー…」

「…あつたあつた。あと3冊しかねえ。危ない危ない」

「らいとのべる？…はちくん、これ小説なの？」

「ああ。まあ軽い感じの小説だな」

「へえ……うわあ!？」

「どうした？」

「……」

突然高海は顔を真っ赤にしてある本を指さす。

「……あー」

高海が指さしていたのは、まあちよつと刺激の強いイラストがあるラノベだった。いきなりこれ見たら高海みたいなやつはびっくりするな。

「……まあ気にするな」

「……はちくん家にもこういうのいっぱいあるの？」

「そんなにない」

「少しはあるんだ……」

「……」

……しまった。

「……変態」

「いや、イラストがあれなだけであつて面白いから。よく言うだろ？ 外見じゃない、中身だつて」

「でもイラストもいいいでしょ？」

「そりゃあもう…あ」

「…」

「…」

そして俺達は謎の空気のまま店をあとにした。

「よし！ゲームセンターに行こう！」

「と見せかけて帰」

「らないよ！ほら早く！」

「引つ張らないで」

「やったー！」

「高海なんかに負けるなんて…」

「ふっふーん！」

ドヤ顔うぜえ。

「あ！はちくんプリクラ撮ろうよ！」

「さよなら」

「ほら早く！」

「襟を引つ張るな！」

なんでこいつ毎回提案してくるくせにこつちの意見無視するの？ねえ？

「プリクラ男の子ととの初めてだから緊張するね！」

「お前ほんとに緊張してんのか」

めっちゃ楽しそうにニコニコしてるぞ。緊張というものが欠片も感じられない。

「はいはちくんポーズ！」

「はい！」

「おう」

なんだこれ…俺の目が輝いてる。

「いやー！楽しかった！」

「そりゃ良かったですね」

「はちくんは楽しかった？」

「…まあ悪くはなかったんじゃないか」

「…そっか！」

夕日も落ちてきたので高海と帰っていると、突然雨が降り出した。

「雨!?!傘持ってきてないよー！」

「今日夕方から降るかもって言ってたな」

「あ！はちくん傘あるの!?!入れて入れて！」

「お、おい」

「はちくん持っててくれて助かったよー!」

「…近い」

「えー?仕方ないじゃん。傘に2人入ってるんだもん。照れてるのー?」

「…そういうお前も顔赤いぞ」

「…あ、あはは、やっぱりちよつと恥ずかしい」

まさか女子と相合傘する日が来るとは…

この恥ずかしさをどう収めようか考えていると、雨はどんどんひどくなり、大きな雷が落ちた。

「今の結構大きかった…な」

「……」フルフル

その時俺には二つの驚きがあった。雷が落ちたのと…それと同時に高海が抱きついてきたのだ。

「お、おいいきなり何を」

「こ、怖いよ…」

「…雷苦手なのか?」

「う、うん…」

雷は収まる様子もなく、ゴロゴロとなっている。つまり俺はずっと高海に抱きつか

れっぱなしなのだ。

「とりあえず進めないから離れる」

「もうちよつとだけ…、お願い」

「はあ…」

俺結構理性が削られていくんですよ。今も進行形で。

高海だつて年頃の女の子。体だつて成長してるわけで。

このままでは理性が持つかわからないので、俺はある行動に出る。

「……は、はちくん？」 ナデナデ

「…小町も雷苦手だな。頭撫でてやると怖さが和らぐつて言つてたからやつてみたんだ

が…意味無いか？」

「…うん。なんか落ち着く。お兄ちゃんパワーかな？」

「なんだそれ…」

「はちくんみたいなお兄ちゃんがいたら良かったな」

「俺はお前みたいなお兄ちゃんがいれば良かったな。小町だけで十分だ」

「えー？」

「どうかそろそろ離れ」

俺が離れると言おうとした時、近くで物が落ちる音がした。

「……渡辺?」

「あ、曜ちゃん!」

「……」

近くにいたのは渡辺だった。しかし、様子がおかしい。動揺しているような顔だ。そしてその顔はどんどん悲しい顔に変わっていく。

俺はそれを見た瞬間、原因に気づいた。

「お、おい高海離れろ」

「え、あ、うん」

「渡辺、お前何か勘違い」

「か、勘違い? 私なにも言っていないよ? ち、千歌ちゃんと比企谷くん、そ、そんなに仲良くなつてたんだね。わ、私早く帰らなきゃ行けないから! ま、また学校でね!」

「お、おい渡辺! 高海! 傘は明日返してくれ!」

「あ、はちくん!」

俺は走る渡辺を追いかけるが、距離はどんどん遠ざかっていく。

「あいつ走るの速すぎ……」

ついに渡辺の姿は見えなくなり、俺は土砂降りの中、立ち尽くすしかなかった。

13話

「はあ…どうしたもんか」

「はちくん、大丈夫？」

「大丈夫そうに見えるか…？」

あれから、渡辺とはまともに話せていない。

珍しく俺から話しかけても用事があるからとかで、めちやくちや避けられる。

「私とは普通に話してくれるんだけど…昨日のこと話そうとすると話題変えようとしちゃって…」

勘違いというのは怖いものだな。

「ごめんね、私のはちくんを抱きついたりしたりしたから…」

「いや、誰にでも苦手なものはあるから気にするな。それに渡辺が勘違いしてるだけだしな」

もうこれは帰りに賭けるしかないな。

授業も終わり、部活に入っていない俺はいつもならすぐ帰宅直行だが、今日は違う。校門の前で2時間くらい時間を潰さなければならぬ。

「たまたま本持ってきてきて良かったな…さて…」

「…あ…ひ、比企谷くん…」

そしてついに目的の人物が現れた。

「よう…渡辺」

「だ、誰か待つてるの？あ、もしかして千歌ちゃん？千歌ちゃん部活入ってないし、何か用事でもあったのかな？」

「お前を待ってたんだよ」

「ど、どうして？何か用事？それなら明日でも…」

「今ここで言いたいんだよ。………前の雨の日のやつだが」

「そ、その話は聞きたくない…な」

「はあ…だから、勘違いだつてば」

「ご、ごまかさなくてもいいよ？おめでたい事だもん。私は全然気にしてなんか…」

その時の感情が蘇ったのか、渡辺の目から涙がこぼれる。

「だからあれは勘違いだ！高海は雷が苦手で、その時鳴ったのが大きくておどろいて、そ

の拍子に俺にもたれかかっただけだ」

「……………え？」

「…だからべつに高海とはそういう関係とかじゃない。大体俺じゃ釣り合わないしな」

「……………じゃ、じゃあ私の勘違い？」

「だからそう言ってるだろ」

「……………ううっ」

「お、おい待てなんでまた泣くんだよ。ほんと待って俺が犯罪者みたいになるから」

「だ、だってえ…」

「はあ…ちよつと落ち着け」

俺は渡辺の気を落ち着かせるために、そつと頭を撫でる。

「……………スウ」

「…あれ？ おい、渡辺？」

「…スウ…」

「え、待って、まさか寝た？ この状況で寝たの？」

「…はち…まん…」

普段言わない呼び名を口にするあたり、確実に寝てますねこれは。

「まあ部活あとだったしな……………とりあえずどうしよう」

俺は近くの公園まで運び、渡辺をベンチに寝かせる。

そして俺は膝枕。

「これ普通状況逆だよな……」

「んう………ひきがや……くん？」

「おお、起きたか」

「………っ!? あ、あれ!? 私……!?」

「いきなり眠り始めたからビビったわ」

「ご、ごめん………」

「まあ部活で疲れてたんだろ……とりあえず起き上がってくれ」

「あ……! ご、ごめんね! 足借りちゃって!」

「気にするな」

「………」

「………」

「……じゃあ俺帰るな」

「………ちよつと待って!」

「なんだ？」

「確かにあれが勘違いなのは分かったけど………比企谷くん、千歌ちゃんに抱きつかれた時鼻伸ばしてたよね？」

「………そんなことは」

「ないとは言わせないよ？」

え、なに急に。あの話は終わったんじゃないの？

というか男なら誰でも喜ぶでしょ。美少女に抱きつかれたら。

「それはちよつとお仕置きが必要な……！」

「え、まって、落ち着け、な？」

眠って体力回復したのか、渡辺からすごいエネルギーを感じる。

怖い。

「……ヨースロー……」

その後俺がどうなったかは、言うまでもない。

14話

「おにいちちゃんっ！」

「どした小町」

「はいこれあげる！」

「…デイスティニールランドペアチケット？」

「お母さんがくれたんだけど、私前行ったからあげる！」

「いや、お前ココ最近ずっと家に…」

「いいから！お兄ちゃんは曜さんを誘って行くの！」

「…なんで」

「お兄ちゃんは、いつも曜さんから自分から遊びに誘ったことないでしょ？」

「俺がそんなことできたらボツチなんてやってないからな」

「まあお兄ちゃんはぼつちじゃないと思うけど…それより！もうすぐクリスマスだし曜さん誘ってクリスマスデートしてきなよ！」

「いや、それまるで俺があいつに好意持つてるみたいじゃねえか」

「え、そうでしょ？」

「…俺そんなこと言った覚えはないんだけど」

「直接はね。でもお兄ちゃん、最近曜さんの話ばかりするし仲が進展してるのかと…」

「そんなに話してたか？」

「うん。気持ち悪い笑顔しながら」

「…小町ちゃん、辛辣よ」

「普段のお兄ちゃん見てたら絶対曜さんに惚れてると思うよ？」

「……そうか？」

「しかも曜さんの気持ちも気づいてるでしょ？」

「…まあ、それは」

「だったら！誘うしかないよ！お兄ちゃん…素直になるんだ！」

「……………」

「ああ！お兄ちゃんがモジモジしてもキモイだけだよ！お兄ちゃん、想像してみてください！曜さんが知らないイケメンの男子と話してる！」

「ああ…」

「そして、手を繋ぎ出して…」

「あ、ああ…」

「いい雰囲気になってきたと思ったら…2人は抱きしめ合い…」

「あ、ああ……！」

「そして2人の唇が……」

「……つてうちの学校女子ばっかだし男子もイケメンなんていないぞ」

「もしもだよ……で、お兄ちゃん、今どう思った？」

「……まあいい気はしなかったな」

「それは恋だよお兄ちゃん。お兄ちゃんだって気づいてるけど気づかないふりしてるだけでしょ？」

「……」

「言い方悪いかもしれないけど、曜さんの気持ち知ってるなら、後は告白するだけなんだよ？」

「……俺じゃあいつとは釣り合わねえよ」

確かにあいつといるとつまらなくはない。居心地も……まあ良い。

でも周りの目を気にすると俺なんかそばに居たら渡辺のイメージを下げってしまう。

「まあたそういうこと……お兄ちゃん、それは曜さんが決めることだよ？お兄ちゃんは曜さんが好きなんですよ？なら気持ちを伝えるべきだよ。その後のことは曜さんが決めてくれる」

「……まあそれはそうかもだが」

「それに、もしなんかあっても、お兄ちゃんの数多い黒歴史がひとつ増えるだけでしょ？
軽い軽い！」

「俺そんなに黒歴史あったのか……まあでもそうだな。……とりあえず、誘ってみるわ」

「うん！頑張って！お兄ちゃん！」

「ああ」

そして運命の日が来た。誘うだけだけど。

「……なあ渡辺」

「どうしたの？」

「……今日一緒に帰らないか」

「……え？」

その時、クラスが凍りついた。なぜなら普段は渡辺ばかりで俺からこんな行動をする
ことはなかったからだ。

「う、うん。今日は部活もないし大丈夫だけど……ひ、比企谷くん、熱でもあるの？」

「……いや、一歩進もうと思ったただけだ」

「……？」

時間は過ぎ、約束通り渡辺と帰路についている。

「……」

「……め、めずらしいね！比企谷くんから帰り誘ってくれるなんて！」

「……まあたまにはな」

「……」

「……渡辺」

「は、はいっ！」

「…………く、クリスマスの日とか……あ、空いてるか」

「…………へ？」

「…………どうだ？」

「う、うん。あいてる……けど」

「そ、そうか。………な、ならその日……俺とデイスティニーランド行かないか？」

「……そ、それって………で、デートのお誘いってこと？」

「……まあそうなるな」

「そ、そっか……」

「べ、別に嫌ならいい。俺なんかといつてもつまらないしな」

「…ううん。行くよ。比企谷くんといえるの楽しいもん」

「そ、そうか…じゃあまた待ち合わせとかは連絡する」

「う、うん」

俺達は謎の空気のまま、別れた。

15話

「お、お待たせ…」

「お、おう…」

本日は性夜…ごほん。聖夜の夜、クリスマス。昨年までなら家に引きこもってリア充爆発共に呪いの念を送っていたところだが、今回は運命の日だ。これでおれの高校生活が決まると言っても過言ではない。

まさか俺が女子とクリスマスにディステイニールランドに来る日が来るとは思いも「ど、どう…かな? 頑張つて選んでみたんだけど…」

「うっ…:…に、似合つてると思うぞ」

おれの地の文を長くして煩惱を消し去る作戦失敗。

メタ発言? 知るか。そんなこと言つてられん。

正直直視できないんですけど。いや、露出高いとかそういうことではないが。スカ―トはめっちゃ短いけど。寒くないのかな。

「あ、ありがとう。…えへへ!」

え、なにこの可愛い生き物。これは戸塚にも劣らないサンシャインだめだ! 戸塚と比

べるなんて！そうだ、戸塚のこと考えよう。

…あー、癒される。

「じゃあ…いこつ？」ギユツ

「お、おい手…」

「で、デートだし…ダメかな？」

「…まあデートだしな」

だめだ、戸塚考えても今の状況打破できない。

「見て比企谷くん！パンさんあるよ！」

「お前パンさん好きなのか…」

「可愛いじゃん！…あ！これ良いなー！」

「ほ、ほう…」

渡辺が手にしていたのは…戦闘服を着ているパンさんだった。

いや怖いわ。物騒だな。なんか銃持ってるし。

なに、あなたのハートを撃ち抜くぞお！とかいうの？

「…それ欲しいのか？」

「んー、でも高いからこつちの小さいのにする」

「…待ってろ」

「ほら」

俺は買ってきた商品を渡辺に渡す。

「こ、これ…」

「欲しかったんだろ？」

「で、でもこんな高いもの…」

「安心しろ。今俺の財布は潤ってるからそれぐらい大したことない。

……それにデートだしな。こういうのは男が奢るもんだろ？知らんけど」

最近は割り勘が普通らしいしな。まあ初デートだしいいだろう。

「…ありがとう。大事にするっ」

「…ああ」

「次どこ行こっか！」

俺達はその後も色んなアトラクションに乗ったりした。

柄にもなく今日は良く笑っている気がする。

「えへへ！お揃いだね！」

だが今は帰りたい。理由は俺の頭だ。俺と渡辺の頭には某ネズミキャラクターのカ

チューシャがある。

ほんとにリア充みたいじゃないですか。恥ずか死ぬ。

「…そろそろか」

まあしかしこれで帰ってしまったては目的は果たせない。

いよいよ決戦だ。

「渡辺、もうすぐイルミネーション始まるけど見に行くか？」

「そうなのっ？行こー！」

心臓の音が激しくなってる。今から俺は告白するのだ。告白するのなんて中学以来だな。あの時は割とすぐ言えた。

でも今回はそうもいかなそうだ。

きつと今まで本気で人を好きになったことはなかったんだろう。

でも今のこの気持ちは本物であると確信できる。

身体中の震えは止まらないし、手汗もすごいし、心臓もバクバクだ。

「わあ……！綺麗！」

「……あー、渡辺」

「なにー？」

渡辺はイルミネーションに夢中でこっちも向こうとはしない。

これで言つて聞こえなかったとか言われたら死ぬぞ俺。

「……………好きだ」

「うん！私もイルミネーション好きだよ！」

「あーいや、そうじゃなくて……………渡辺のことが好きなんだ」

「そうそう、渡辺のことが……………へ？」

「だ、だから……………嫌でなければ恋人になつてほしい」

言つた。言つてしまった。もう今頭の中は真つ白だ。周りの声も聞こえない。

「……………」

俺は静かに相手の答えを待つ。結果がどうであれ、後悔はない。

「……………」

しかし、いつまで経つても返事は来ない。まさかの無視？聞こえてないの？

「あー、渡辺？」

「は、はいっ!？」

「うおー！」

「ど、どどどどうして!？」

「どうしてつて……………好きになつたんだから仕方ないだろ」

というかクリスマスの日にいきなり俺がデートなんか誘つたら勘づかれてると

思ってたんだが…案外渡辺は鈍感なのかもな。

「……………ずるいよ」

「は？」

「こ、こんないきなり！心の準備ができてないよ！」

「いや、この状況だったら多少分らないか？」

「分からないよ！…こういう経験ないもん」

「それは俺もないが…まあ渡辺は鈍感なんだな」

「それ前千歌ちゃんにも言われたけどそういう事だったんだね…」

「……………そ、それで、返事聞いてもいいか？」

「……………わ、私も比企谷くんが好き！大好きだよ！」

「お、おう…」

「え、えつとだから…その…ふ、ふつつか者ですがよろしく願います」

「こ、こちらこそ……………俺達、付き合うってことでもいいんだよな？」

「う、うん」

「そうか。……………あ、あとこれ」

俺はポケットから小さい箱を取り出す。

「開けてもいい？」

「ああ」

「……………ここ、こここれって、け、け結婚指輪!？」

「ぶっ!? それはさすがに飛躍しすぎだ。…ピンキーリング? ってやつだ」

「ピンキーリング? ……もしかして比企谷くんも?」

「あ、ああ。お揃いがいいって聞いたからな」

「…つけてくれる?」

「ああ…」

「……………わあ! ……似合う?」

「似合ってると思うぞ」

「えへへ! ありがとうっ! 今日は今までで一番素敵な日だよ!」

「…俺もだ」

「でも…比企谷くんにはばっかりしてもらって悪いな」

「別にそんなことないだろ」

「そうなのっ。……………じゃあ……………っ」

一瞬、唇に柔らかいものが触れる。

「っ!?!……………お前」

「えへへ、しちやった。……………さ、さあ! イルミネーション楽しもう! ね!」

渡辺は今のをなかつたことにしようとしてるのか、恥ずかしいのか、話題を変えようとする。

「……そうだ渡辺」

「なに？……っ！」

俺はお返しと言わんばかりに一瞬唇を重ねる。

「っ……お返しだ」

「う、うう……こ、こんなの比企谷くんじゃない……」

「……まあ、今日くらいは、な」

「……これからよろしくね？」

「……ああ。こちらこそ」

「えへへ！ヨースロー！」

今日は俺たちにとって最高の思い出となった。

16話

クリスマスから日にちは経ち、今日は元旦。

渡辺と高海で初詣に行くことになった。

「はちくーん！」

「うっす」

「あけおめ！」

「あけましておめでどう。…渡辺も」

「あ、あけましておめでどう…比企谷くん」

「ん？どうしたの二人共。喧嘩？」

「あー…高海、実はな俺達付き合うことになった」

「…です」

「……ええっ!?!ほ、ほんと!?!」

「ああ。クリスマスの日にな。2人で直接言いたかったから遅くなったが」

「わあー！おめでどう！曜ちゃん良かったね！」

「うんっ！」

「じゃあ私お邪魔だったんじゃない？」

「いや、気にしなくていい。ほら、さっさと行こうぜ」
「よーし！ いっぱいお願いするぞ！」

「いやあ、三つもお願いがとしちやっただよー！」

「お前も欲張りだな」

「えへへー！ ねえねえ！ 次はおみくじしよ！」

「俺前もその前も凶だったんだよな……」

「大丈夫だよ！ 曜ちゃんとの恋人パワーがあるもん！」

「なんだそれ……おつ、吉だ。前よりはいいな」

「あー！ 私末吉！ 曜ちゃんは？」

「……じゃじゃーん！ 大吉！」

「わあ！ すごい曜ちゃん！」

「良かったな」

「うんっ！……ここ、恋人パワーのおかげ、かな？」

「……さあな」

待って何この気持ち。恥ずかしすぎるわ渡辺は可愛すぎるわよく分からなくなって

きた。

「……うわあああ！2人ともイチヤイチャしないでよ！千歌もいるんだから！」

「し、してない（してねえ）よ!!」

「…そうだ、比企谷くん、私もう1人伝えたい人いるんだ」

「…親とかはちよつとまだ無理だぞ？」

「あはは、違うよ」

「あ！千歌分かった！そういえばまだはちくん紹介してなかったね！」

「今ならきつと家にいるから今から行かない？」

「誰のことだ？」

俺の知らないやつなら分かるわけないか。

「かーなーんーちやーん！」

かなん？名前からして女性だろうか。渡辺のおばさんとか？

「はーい……あ、千歌に曜。あけましておめでどう」

「おめでどうでありますっ！」

「あけおめー！」

「えつとそちらの人は…？」

「えつとね、今日はそれが目的なんだけど。比企谷八幡くん。……私の恋人です」
「……ども」

「へえ、恋人かあ。……恋人!？」

「あはは! 果南ちゃんやっぱりビックリしてる!」

「こ、恋人……曜にそんな仲のいい男の子いたんだ」

「えへへ……やっぱり果南ちゃんも家族みたいなものだから伝えたくて。比企谷くん、

この人は松浦果南ちゃん。幼馴染みなんだ」

「よろしくね。比企谷くん」

「……よろしく」

……ひとつ言わせて欲しい。……この人めっちゃスタイルいい。

ボツキュツボンって感じた。……いかんいかん。俺は煩惱を消し去ったはず……って鐘

鳴らして無いわ。

それにしても……素晴らしい。

「いつて……なんだよ」

「……今果南ちゃんのことエッチな目で見てたでしょ」

「……見てない」

「比企谷くん、女の子ってそういうの結構鋭いんだよ? ね、果南ちゃん」

「んー、まあ男の子だしそういう気持ちがあるのは仕方ないけど…見すぎはちよつとね」

「はちくん！曜ちゃん怒ると怖いから気をつけた方がいいよ！」

「……………申し訳ありませんでした」

その後も小一時間説教を受けた。

「そういえばさ」

「どうしたの？」

「比企谷くんと曜って苗字で呼びあつてるんだね？恋人同士って名前で呼びあつたりするんじゃないの？」

「…よし、帰るか」

「はちくんストおっぷー！」

「ぐえっ」

いきなり首つかむな…

「い、今まで苗字だったし…変えるの恥ずかしいな」

「曜ちゃん！そんなことないよ！ほら！私なんて名前にさらに工夫を加えてるぐらいだもん！」

「千歌はそういう性格だからね…」

こいつのノーテンキさは少し取り入れたいものだ。

「じゃあ今呼びあつてみたら？」

「ナイスアイデアだよ！ 曜ちゃん！ はちくん！」

「うっ……………よ、曜」

「っ……………は、ははち……………ま……………ううっ！ やっぱり恥ずかしいよー！」

「あ、曜ちゃん!? 待ってよー！」

渡辺は恥ずかしさに耐えきれなくなったのか、その場を逃げ出した。

そして取り残された俺と松浦。

「……………あ、私のことも果南って呼んでいいからね？」

「あんたSだろ」

今女子を名前で呼ぶのに苦勞してたのに名前呼びを要求するとか絶対S。

17話

とある休日。インターホンが突然なった。注文した覚えがないぞ。

「小町ー!」

「はいはい。おつ、来た来た!今開けます!」

まあ小町が頼んだのなんて頭悪そうなものだろうな。

「どうぞどうぞ!上がってください!」

ん?誰かと話してるのか?友達か何かか。

「おつにいちやーん!愛しの彼女が来ましたよ!」

「は?何を言ってる?」

「……よ、ヨーソロー」

「……」

幻覚だろうか。目の前に渡辺がいる。目をこすつてもいる。

頬をつねつてもいるぞ。つまり夢ではないな。

あれか、そっくりさん。きつとそうだな。うん。もしくは姉妹とか。

「なに固まってんのお兄ちゃん」

「…なんでいるの?」

「それは小町が招待したからです! お兄ちゃん、いつまで経っても報告してくれないしよ」。まあ曜さんから聞いたから知ってたんだけどね」

「い、嫌だったかな?」

「別にそういう意味じゃない。…」

「お兄ちゃんは彼女さんが家に来るなんて初めて、というか女子を招き入れるの初めてだから緊張してるんですよ! お兄ちゃん、今のうちにエッチな本は隠しておいた方がいいよー!」

「ぶっ!?!」

「…比企谷くん?」

「も、持っていない持っていないから。小町も適当言うな」

「てへへろ☆」

ほんとに持っていないぞ。うん。…パソコンにはあるけど。

「曜さん、本はないけどパソコンにはありますから!」

「うおい!」

なんでこの子知ってるの? 俺のプライバシーはどこへ行った?

「…小町ちゃん、ちよつと比企谷くんと話したいことがあるから」

「ごゆっくり〜！」

「え、ちよ、待て渡辺。話を」

「話は比企谷くんの部屋で聞くから。ね？」

「あ、はい」

「水着の写真ばっかり…」

現在俺は彼女に自分の性癖を晒すという黒歴史まっしぐらな羞恥ぷれいにあつてい
る。

「胸の大きいこぼっかり…」

やめてー！それ以上見ないで！

「…比企谷くん」

「なんででしょうか…」

「お、男の子だからそういうのに興味があるのは仕方ないと思うけど…やつぱり嫉妬す
るな」

「はあ…」

「そ、その…わ、私じゃダメ？」

「……は？」

「だ、だからっ！彼女の私がいるんだから、私だけ見てっこと！」

渡辺は顔を真っ赤にしてヤケクソ気味にしゃべる。

「み、水着が見たいなら……わ、私が」

「お、落ち着け。さつきからいつものお前じゃなくなってるぞ」

「私の水着なんて見たくないよね……この写真の子たちの方が可愛いし……うう」

「え、待つて泣くな。お願い泣かないで。消すから！ほら！写真全部消すから！」

今日の渡辺情緒不安定すぎる。

「渡辺の水着は……あ、あれだ。正直直視できないから……か、可愛すぎて」

「か、かわっ……！」

「まあだからなんだ……とりあえず俺はお前のことが好きなことに変わりはない」

「そ、そっか……わ、私もだよ？」

「お、おう」

「…」

「…」

「お兄ちゃん、飲み物持ってきたよー。……なにこの甘い雰囲気。小町砂糖吐きそう

だよ」

「こ、小町さんきゅ。帰っていいぞ」

「イチヤイチャするのはいいけど、聞こえないようにしてよー？小町隣の部屋にいるんだから」

「いきなりそんなことするか！」

「あ、あわわわ……！」

「つたく……どうする？今から」

「んー、実は何も決めずに来たんだよね」

「そりやそうか……じゃあゲームでもするか？」

「あっ！いいね！やろ！」

「ス○ブラでもやるか。俺は強いぞ？」

「私だって！あ！なら賭けしようよ！勝った方が相手に言うことを聞かせられる！」

「ほう……その勝負のつた。後悔するなよ？」

「それはこっちのセリフだよっ！」

「さて……どんなお願いをしてやろうか……」

「わーい！」

結果、俺の惨敗。最初の方なんか秒殺レベル。

仕方ないじゃん！小町としかやったことないもん！

「はあ…負けたものは仕方が無い。なにすればいいんだ？なるべく高いものとかやめてくれよ」

「うーん……………じゃ、じゃあ…き、キス、して？」

「…………お前熱でもあるのか？」

「ないよ！…………い、いいじゃん！恋人同士なんだし！」

「…渡辺ってムツツリだろ」

「ムツ!?ち、違うもん！比企谷くんの方がエツチなくせに！」

「男子高校生はみんなあんなもんだ。だから俺は普通」

「…い、嫌？」

「嫌というか…恥ずかしいだろ」

「ふ、2人だしいいじゃん！」

「…そんなにしたいの？」

「べ、べべ別にそんなことないもん！するの!?しないの!？」

なんで食い気味なんだよ…

「…じゃあ目つぶれ」

「う、うん……」

「……」

俺はゆっくり渡辺と唇を重ねる。

前の時より長い。

「……………ぶはっ。……これでいいだろ……っ!？」

俺が離れると、渡辺は強引に俺の唇を奪ってきた。

「ンツ………チュツ……ンハア……チュツ……」

「ンツ……つはあーちよ、ちよつと渡辺タイム……っ!」

渡辺は俺の制止も聞かず、また唇を重ねてくる。

「ンツ……レロオ……チュツ……プハツ……はあ……はあ……」

「ハアツ……ハアツ……ま、待て渡辺これ以上はマジでまずい」

主に俺の理性が。もう今でも半分頭真っ白だ。

しかも舌まで入れてきたし。

「ぐ、ぐめん……」

「……やっぱりムツツリだよな」

「ち、違うもん!……だ、だってやっと付き合えたから……欲求が爆発しかかったというか

……」

「……まあ俺も嫌じゃない、から。……こういうのはたまにな」

「……ここ、今度は比企谷くんからしてよ？」

「……今度な」

今日はどうやら眠れそうもない。

18話

「〜♪」

「なあ渡辺さんや」

「どうしたの？」

「……………なんでうちのキッチンで料理してるわけ？」

あの濃厚な1日から1週間ほど過ぎた。

朝起きるとキッチンで渡辺が料理してるから驚いたわ。

「そのテーブルのメモに全部書いてあるよ！」

メモ……あ、これか。どれどれ……

お兄ちゃんへ☆

小町はお友達の家遊びに行ってます！あ、泊まりだから！

でもお兄ちゃんのこと心配だから、曜さんにお兄ちゃんのお世話を頼みました！

二人きりだからってイチャイチャしすぎないようにね！

それでは行ってきます（・ω・）

……………なにこれ。

「比企谷くん朝ごはんできたよ〜！」

「…え、マジでこれ？」

「うん！頼まれたからにはしつかりやるよ！」

「…いや、渡辺に悪いしいいよ」

「もう来ちゃったし気にしないで！予定もなかったし！…嫌だった？」

「嫌とかじゃなくてだな…はあ。わかったよ。というかお世話って何するんだよ？」

「んー、ご飯作ったり…洗濯物したり…」

「…俺の下着とかは自分でやるからな？」

「う、うんっ！それくらいわかってるよ！」

「まあならいいけど…とりあえず食うか」

「召し上がれ！」

「いただきます…っ！…めちやくちや美味い」

「ほんと？良かったあ！」

「渡辺料理もできるんだな…」

「花嫁修業してるから！」

「ぶっ！…そ、そうか」

誰の花嫁?とか無粋なことは考えないぞ。

「そういえば、どう?このエプロン!新しく買ったんだ!」

「…似合ってるぞ」

「ありがとっ!…あ、裸エプロンとかの方が良かった?」

あー、もうこの顔。からかおうとしているのが丸わかり。

やり返すか。

「…そうだな。裸エプロンの方が見たい」

「っ!?ご、ゴホッ!な、ななな!」

顔真っ赤ですね。まあ俺がこんなこと言うなんて有り得ないしな。

「……じょうだ」

「……………」

俺が冗談だと言おうとすると、渡辺はおもむろにエプロンをとり、服を脱ぎ始め…

「お、おい!」

「は、恥ずかしいけど…比企谷くんが見たいなら…」

「す、ストップ!冗談!冗談だから!」

もう渡辺の下着がチラチラ見えてる。

「…冗談?」

「…渡辺がからかってきたからやり返そうと思っただけだ」

「…バカっ！」

渡辺は拗ねてリビングを出て行ってしまった。

「…ちよつとやりすぎたか」

「おーい、渡辺さーん」

俺は渡辺の機嫌を直すために俺の部屋まできた。というかなんで俺の部屋にいるんだよ。鍵もかけてあるし。

「…」

返事はない。ただの屍のようだ。

「あー…すまん、やりすぎた」

「…」

返事はない。ただの屍のようだ。

「…出てきてくれないか？」

「…」

返事はない。ただのしかば（ry

「…デートでも行くか？」

「……………行く」

ゆつくりと扉が開き、渡辺の小さな可愛らしい顔だけがちよこんと出てきた。

「…じゃあ用意しろ」

「…」

「…まだ拗ねてるのか？」

外に出たはいいものの、渡辺はいつものテンションじゃない。

「…たまには映画でも見るか」

「…」

返事はな (ry

「…ん？なあ、あれ…」

視線の先に迷子らしき女の子がいた。ママー！と叫んでいる。

「あ、おい」

渡辺も気づいたのか、その子の近くまで向かう。

「どうしたの？迷子？」

「ううっ…ママとはぐれちゃった…」

「大丈夫！お姉ちゃんがママのところに連れてってあげる！」

「…ほんと？」

「うん！ほら！悲しい時はこうするんだよ！ヨーソロー！」
渡辺、それはお前だけだ。

「ヨーソロー…？」

「そう！元気が出るおまじないだよ！ヨーソロー！」

「ヨーソロー…ヨーソロー！えへへ！」

どうやら女の子は元気が出たみたいだ。

「じゃあ、探しに行くか」

「…」

「ねえねえお姉ちゃん！お姉ちゃんはどうしてあそこにいたの？」

「ん？そのひねくれたお兄ちゃんどデートしてたんだよ」

「デートっ！じゃあ2人は結婚してるの!？」

「け、結婚はちよつと早いかな…」

そこでチラチラこつち見ないで。

とうにかさつき拗ねてたが、もう直つたのか？

「でもどうやって探そうか？」

「確かそのシヨツピングモールに迷子センターあつたら」

「そっか。じゃあそこにいこっか！」

「それじゃあお願いします」

「はい」

俺たちは迷子センターに行き、迷子の女の子を預けて別れようとするが…

「お姉ちゃんいつちやうの…？」

「……比企谷くん」

「…別に俺は構わんど。子供も好きだし」

「わかった！よし！じゃあお姉ちゃん達とお母さん来るまでお話しよっか！」

「うんっ！」

「お姉ちゃんはお兄ちゃんのどこを好きになったのー？」

俺だけ帰ればよかった。何の話が始まるかと思っただら恋愛話。

なんだこの羞恥ぶれい。

「えー？んー、昔と変わらさずひねくれてるけど優しいところ…かな？」

「一言余計な気が…：ん？昔と変わらさず？」

「あはは、やっぱり覚えてないよね。私と比企谷くん、昔会ったことあるんだよ？」

「…え、うそ、まじで？」

「マジマジのマジだよ。あれは…まだ4歳とかだったかな？私旅行でデイスティニーランドに行ったんだよ。で、そこで迷子になったの。」

周りの人はチラチラ見たりはするけど助けてくれなくて…そこに比企谷くんが現れた」

「全然覚えてないぞ…」

「まあ小さい頃だし仕方ないよ。…それでね。比企谷くん、どうしたの？つて話しかけてくれて…」

~~~~~

「どうした？」

「ひつく…迷子になっちゃったの…」

「…泣くな。俺がお母さんのところまで連れてつてあげるから」

「ううっ…ほんとに？」

「ほんと。…ほら」

「…？」

「手…繋ぐと安心する。…つて妹が言った」

顔真っ赤にして可愛かったなあ。比企谷くん。

「…うんっ！」ギョッ

それで比企谷くんはゆっくり手を引つ張つてくれて…

「…名前」

「え？」

「名前なんていうの」

「…わたなべよう」

「わたなべ…よう…覚えた。俺ひきがやはちまん」

「ひきぎやや？」

「ひきがや」

「ひきぎや…はちまん！」

「…まあそれでもいいけど」

「はちまんも迷子なの？」

「俺そんなにドジじゃない」

「私がドジみたいじゃん！」

「…俺も母さんとか妹とかと来たけど…向こうが迷子になった」

「…はちまんじゃなくて？」

「…俺じゃない」

その時は信じたけど、今思えば比企谷くんも絶対迷子になってたよね。

「はちまんはどこに住んでるの？」

「ここから結構ちかいとおもう。わたなべは？」

「ようつて呼んで！」

「…ようは？」

「私ねうちうらつてところ！」

「うちうら？聞いたことない」

「んー、あのね！海があつて！緑もいっぱいあるの！」

「へえ。じゃあこのことは真逆だな」

「そうだ！こんどあそびにきてよ！」

「んー、暇だつたらいいよ」

「約束ね！」

「…約束」

~~~~~

「つてことがあつたの」

「お兄ちゃん優しいね！」

「…俺そんなことしたかな」

「照れてる〜」

「照れてないから。頬をつつくな頬を」

「ふたりとも仲良し！私もね！とつても仲のいい男の子いるの！」

「そうなの？」

「うん！将来結婚するの！」

「…ふふつ、そつか。良かったね」

「うんっ！えへへ！」

「まな！」

そこへ親御さんらしき人が現れた。

「あ！ママ〜!!」

「心配かけて…！ありがとうございます。この子の面倒見てくださって…」

「いえいえ！楽しかったから気にしないでください！」

「お姉ちゃんお兄ちゃんまたねー！」

「ヨ〜ソロー！」

俺も手だけ振り返す。

「…あ、もう外も夕方だね」

「…どうする？」

「ご飯とかもあるし帰ろっか」

「いいのか？」

「うん。ほら帰ろっ？」

…まあなんか機嫌も直ったっぽいしいいか。

19話

「ただいま〜つて誰もいないか」

「飯どうする？」

「もう決めてあるから大丈夫！」

「何作るんだ？手伝うぞ」

「だーめ！それはできてからののお楽しみ！比企谷くんはテレビでも見てて！」

「お、おう」

今日はなんか歌番組ばかりだな。お、そういや今日いつも見てるアニメやるな。予約しておこう。

「比企谷くんできたよ〜」

「ん？おう、サンキュ……何その格好」

俺が振り向くと、そこには美味しそうなオムライスと……メイド服姿の渡辺がいた。

「えへへ……どうかな？」

「どうかなって……まあ似合ってるけど」

「私制服好きでね。色々集めてるんだ！これも私のコレクションの一つ！」

「へえ、そんな趣味あったのか。制服って高くないか？」

「んー、確かにね。だからあんまりたくさんは持つてないんだ。内浦にも制服売ってる
ところないしね」

制服か…ナースとかもあるんだろうか。

「…鼻の下伸びてるよ？」

「……………とりあえず食べようぜ」

「ま、待つてー！」

「なんだよ？」

「……………お、美味しくなーれ……………も、萌え萌えキュン！」

「……………」

「……………」

おっと、今何が起きた？衝撃的すぎて思考が追いついてないぞ。

「…な、何か言つてよ！」

「……………恥ずかしいならやらなくても良かったんじゃない？」

「……………だ、だつてネットでこういうの男の子は喜ぶつて書いてあったから…」

いや、嬉しいよ？恥ずかしがつてる姿とかかなりやばかったし。

だが俺だぞ？そんな素直に言えるわけないだろ。

「……しまった」

「どうしたの？」

「…動画撮り忘れたからもう1回やってくれ」

「ぜ、絶対もうやらない！ほら食べよ！」

「くっ……頭の中に刻み込んでおくか」

「…は、はい、あーん」

「…やらかなきゃダメ？」

「…嫌なの？」

「恥ずかしいんだよ…」

「…」

無言で見つめてくるのをやめてくれませんかね。

「…あ、あーん………美味しい」

「ほんと？じゃあどんどん食べて！」

「…ごちそうさまでした」

「あ、あとね！デザートも作ってきたんだ！」

「そうなのか？」

「待ってて！……はい！」

出てきたのはショートケーキだった。

「おお……完成度が高い」

「えへへ、何回か失敗したんだけどね。食べてみてよ！」

「おう……お前料理美味すぎだろ」

「お、美味しいってこと？」

「これならいくらでも食べられるぞ」

「じゃ、じゃあ……比企谷くん」

「ん？」

「……」

呼ばれて振り向くと、渡辺は口にイチゴを加えて目をつぶって俺の方に顔を突き出している。

「……」

え、なにこれ。そのイチゴを食べろということですか？

ちよつと今日こいつ積極的すぎない？他の男ならイチコロですよこれ。

「……………っ」

「っ……………プハッ……お、美味しい?」

「……………甘い」

結局俺も耐えられませんでした。頭真っ白でこれがイチゴの味なのか、キスの味なのかは分からなかった。

「……………うう! さすがに今のは恥ずかしすぎる!」

「それはこつちのセリフだ……………今すぐ布団に潜りたい」

「わ、私お風呂沸かしてくる!!」

「逃げたな……」

……………残り食うか。

「比企谷くん、お風呂ありがとう」

「おう」

さすがにお風呂は別々に入った。一瞬、俺が入ってる時に入ってくるかもというアホな期待をしたがやはりそんなことはなかった。

「……………寝るか?」

「へ!? ね、寝る!?!」

「……………なにかおかしなこと言ったか?」

「ね、ねねねね!？」

「…俺別にあつちの意味で言ったんじゃないぞ。普通に寝るのを提案しただけだが」

「…そ、そそそうだよね! 私もそうだと思った! うん!」

速報、やはり渡辺はむつつり。

「……今むつつりとか思ったでしょ」

「思っていない思っていない。まあ思春期だし仕方ないだろ。うん」

「し、仕方ないじゃん。男の子の家に二人っきりで泊まるの初めてだし…しかも相手は

比企谷くんだし…色々想像しちゃうよ」

「……まあ俺はヘタレだから心配するな」

「それはそれでどうかとも思うけど…」

「…もしかしてだから風呂入る時間長かったのか?」

「で、デリカシーなさすぎだよ!! バカっ!」

「いって! 蹴るなよ…」

「ふんっ」

あー、拗ねてしまわれた。

「……まあそういうのは俺達のペースで行こうぜ」

「……」

「……一緒に寝るか？ベッド一人用だから狭いと思うが」
「……寝る」

「……あの、近すぎませんか？」

渡辺の機嫌直すために提案したのは俺だけだ。

渡辺のやつ俺にピッタリ抱きついてきて理性がやばいんですが、顔も俺の胸に埋まっていて見えないし。

「……寝れないんですけど……」

「一緒に寝るって言った」

「いや、こんな抱きついて寝ることは……」

「……スウ……スウ……」

「……お、おい？」

「……スウ……」

「寝てる……」

俺「この状態で寝ろと？」

「……は……ち……まん……」

「……夢の中では俺のこと名前で呼んでるのね……」

夢の中だけにしてほしい。恥ずかしいから。

「…寝るか」

20話

結局眠れませんでした。無理に決まってるだろ。俺にそんな耐性はない。こいつはこいつで気持ちよさそうに爆睡しやがって…

「んっ……？…比企谷くん…おはよお」

「…おはよ」

「…ふわああ……」

「よく眠れたか？」

「うん……」

まだ渡辺さんは寝ぼけていらっしやるようだ。

「ほら、朝飯食べようぜ」

「はーい……」

「まさか…比企谷くんがこんなに料理上手なんて…!」

「ふっ、俺は伊達に専業主夫目指してないんでな」

「……」

「無言で冷たい目をしながら俺を見るな。なんか傷つく」

「だつて専業主夫つて……」

「……とりあえず今日どうする？夜には小町帰ってくるらしいが」

「んー、せつかくだし小町ちゃん帰ってくるまで一緒に居てもいい？」

「まあ別に構わんぞ」

「えへへ、やった。そうだ！どこか出かけようよ！」

「昨日出掛けたからいいだろ」

「そんなこと関係ないのっ！ほらほら！早く用意して！」

「しかもこんな朝っぱらから行くのかよ」

今日は家でゆつくり過ごそうと思つてたんだが……

まあいいか。こいつが楽しそうにしてるなら。

だが、俺はここで渡辺を止めるべきだった。まさかあんなことになるとは思ひもしなかつた……

「出発進行！ヨーソロー！」

「で、どこ行くんだ？」

「水族館とか！」

「あー、まあいいんじゃないか？定番っぽくて。俺まだ行ったことないしあそこ」

「でしょ！ほら！早く行こっ！」

「そんな走ると危ないぞ」

「大丈夫大丈夫っ……!?!」

この地域はお世辞にも人口が多いとは言えない。だからその分事故も少ない。きつと俺達も油断していた。

渡辺が横断歩道をはしやぎながら渡っていると、いきなり車が信号無視して突っ込んでくる。

「っ！渡辺っ!!!」

俺は全力で駆け出す。間に合え…間に合えっ!!俺はどうなってもいいから…!!

「ひ、ひきがやく……」

「渡辺っ!!!」

「くそっ…!!なんでこうなった…!」

俺の願いは届かず、渡辺は車に突き飛ばされてしまった。

今は病院。検査を受けている。

事故のあと、突き飛ばした張本人とあった時、俺はブチ切れて相手に暴力を振るいそうになった。警察の人に止められてなかったらどうなっていたことか。

「はちくん!!!」

「高海…」

「曜ちゃんは!? 曜ちゃんは無事なの!?!」

「今検査受けてるところだ」

「曜ちゃん…!ぶ、無事だよね?」

「そうであることを願うしかない…」

丁度高海が到着した時、検査が終わったのか医師が出てきた。

「先生!」

「……とりあえず命に別状はありません。骨折は少しありますが1ヶ月もあれば充分でしよう」

「よ、良かった…!!」

「ただ…少し頭の方に強い衝撃を受けているようで…後遺症かなにかが残るかも知れません」

「後遺症…?」

「目を覚ましてからでないとまだわかりませんが…とりあえず今は、彼女のそばにいて上げてください」

「……」

俺は自分が許せない。なぜあの時助けられなかった…!

ひたすらそのことだけが許せなかった。俺が代わりになつてれば…!

「は、はちくん、後遺症つて言っても大したことないよね?」

「…わからん。何も無いことを祈るだけだ。……俺ちよつと飲み物買つてくるわ」

「くそっ…」

「あ!比企谷くん!」

「…松浦」

「曜は!?無事!?!」

「とりあえず命に別状はない。今から戻るところだからついてきてくれ」
「高海、もどっ……！目覚めたのか！」

「あ！はちくん！果南ちゃんも！うん！今丁度……」

「曜……！良かった無事で！」

「曜ちゃん！！良かったよおお！」

「え……？え……？………あ、あなた達誰ですか？」

「………え？」

続く

21話

「記憶喪失…」

「はい。いつ治るかははつきり言ってもわかりません。最悪の場合戻らないという可能性もあります」

「そんな…」

「…先生、俺達に出来ることは？」

「そうですね…普段良くしていたことをしてあげるか、昔話をしてあげるのもいいかもしれません。どんなきつかけで戻るか分からないので」

「…わかりました」

「どうしようはちくん…」

「とりあえず渡辺に俺たちとの関係とか話すか。誰かも分からないのは一番怖いだろうからな」

「そうだよね…！よし！曜ちゃん！」

「わっ！…あ、さっきの」

「高海、ここ病院」

「あ、そうだった」

「あ、あの…私、記憶喪失なんですよね？」

「…ああ」

「…そう、ですか…じゃあもしかしてあなた達は私の知り合いでしたか？」

「私は高海千歌！千歌でいいよ！私達幼馴染なんだよ！あともう1人松浦果南ちゃんっていう子もいるよ！」

「そうなんだ…あなたは？」

「えつとだな…比企谷八幡。…一応お前の恋人だ」

「こ、恋人っ!?!…そ、そうだったんだ」

「曜ちゃんは何覚えてることはある？」

「…日本語とか話せるあたり、思い出的なものがなくなってる感じだな」

「はい…勉強の方は少し見たら分かるんだけど…」

「大丈夫！きつと戻るよ！曜ちゃんのペースで行こっ？」

「うん…ありがとう、千歌ちゃん」

「うんっ！」

それから2週間ほどたった。色々試してみたがいまだに記憶は戻らない。とりあえず勉強の方はできるので学校には通っている。

何かあつてはまずいので俺か千歌がそばにつくようにはしているが。

今は日直の仕事で渡辺と職員室へ向かっているとこらだ。

「……やっぱり戻らないのかな……」

「諦めたら終わりだ。不意に戻ったりするかもしれないしな」

「うん……」

「……あんまり悲しそうにするな。治るもんも治らなくなるぞ」

「そ、そうだよね！まだ希望は残ってるもん！頑張ろう！わっ!?!」

「っ！渡辺っ!?!」

渡辺は階段でつまずき、落ちそうになる。

俺は渡辺の手をつかむがそのまま落ちそうになったので俺が下になるように渡辺を抱き抱える。

「……んっ!?!」

「……っ!?!……す、すまん。大丈夫か?」

階段から落ちた拍子に俺達の唇は重なっていた。

罪悪感すごい。今の渡辺は俺なんかただの男子としか思っていないからな。

「……………あれ？比企谷くん？」

「どうした？」

「…さつき私達デートしようとして歩いてた気が…なんで学校？」

「……………も、戻ったのか？」

「何が戻ったの？」

「……………っ！」

「わっ!?ひ、比企谷くん!?きゅ、急に抱きついてどうしたの!？」

「良かった…！」

「ここ、ここ学校だよー!恥ずかしいってばー！」

「す、すまん。勢いで……………渡辺、とりあえず行くぞ」

「どこへ？」

「曜ちやーん!!!」

「わあっ!?!千歌ちゃん!」

「記憶が戻ったんだね!良かったー！」

「あはは、そうみたい」

「どうやって戻ったの？」

「階段から落ちたんだよ俺達」

「え!？」

「まあ怪我とかはなかったから安心しろ。多分その時に何かの衝撃で戻ったんだろ」

「そうそう! 気づいたら比企谷くんとキスしてて驚いたよ!」

「ぶっ!?! お、おい、それは階段から落ちた拍子であってわざとじゃ」

「わかった! そのキスだよ! 白雪姫的な!」

「んなバカなことあるか!」

「ちつつちつつ! 甘いよはちくん! 恋はいつでもハリケーンなんだよ!」

「お前恋愛経験ないくせになにいつてるんだ」

「な、ないけど! ネットで見たもん!」

「……でも、そうかも」

「渡辺はまで何言ってるんだ!」

「だって私、多分自分で思ってるより比企谷くんのこと好きだもん」

「…そうですか」

「きつと愛の力だね!」

「もうそれでいいわ…」

「はちくん紅くなってる！」

「お前はしばく」

「いたいよー！頭ぐりぐりしないでよー！」

「あー！私も混ぜてよー！」

2 2 話

はい皆さんに問題。今日はなんの日でしょう？ 答えはバレンタインデー。企業がチョコを売り出すために作った日。え？ ロマンがない？ 知るか。

さて、今までの俺ならこんな日どうでもよかった。むしろ憎たらしい日だった。

「あ、あの！ 受け取ってください！」

「さ、サンキュー」

どういうことだこれは。さつきから色んな人からチョコ貰うんだけど。後輩とかもいるし。

「わー、はちくん、いっぱい貰ってるね」

「俺はいつからこんな人気者に……」

「きつと文化祭の時だよ！ うん！ そうに違いない！」

実は俺はあの文化祭の1件から学校にいる時は眼鏡をかけている。普通に視力も良くないしな。

「そんなにもらってるなら千歌からはいらない？」

「え、なに、お前もあるの？」

「と・う・ぜ・ん！義理だよ？」

「いや、わかってるわ」

「はい！一応手作りなんだ！曜ちゃんに色々教えて貰って作ったの！」

「ありがとな。お返しはちゃんとするから」

「楽しみにしてるね！」

「…比企谷くん、たくさんチョコもらってるね」

「うおっ!?!びびった…渡辺か」

なんか渡辺から黒いオーラが…

「はちくん人気者だもんね！」

「お前は火に油を注ぐようなこと言うな！」

「いたいよ！はちくん！」

「……」

「お、おい渡辺？」

渡辺はそのまま無言で席につく。怒ってるのか？いわゆる嫉妬というやつだろうか。

そしてお昼。

「高海、ちよつと来てくれ」

「ん？どうしたの？」

「……………俺は渡辺に嫌われたのか？」

「え？何急に？」

「いや、…………渡辺からチョコがもらえないから」

「あー、そういうこと？…んー、どうだろうね？」

「…一応恋人同士だし貰えると思ってたんだが…」

「…大丈夫だよ！私戻るね！」

「何が大丈夫なんだ…」

「…比企谷くん」

「…渡辺」

「……………」

「どうした？」

「……………こ、これ！」

「……………これ…」

「ちよ、ちよつと渡すの恥ずかしくてタイミング分からなくて…お、遅くなっちゃったけど…」

「俺てつきりもらえないかと…」

「そ、そんなわけないじゃん！いやあ、照れくさくてさ……受け取ってくれる？」
「ああ。………ありがとな。曜」

「う、うん。うまく作れたか分からないけど………!?ひ、比企谷くん今名前で……！」
「さ、教室戻るか」

「ね、ねえ比企谷くん！今名前で」

「いやー、次の授業楽しみだなあ」

「そんなこといつも言わないでしょ!?もう一回！もう一回呼んで！」

「そういえば宿題やったか？まあお前なら大丈夫か」

「ねえってばー！」

チヨコは美味しくいただきました。

23話

「比企谷くん！」

「なんだ、急に電話してきて」

とある日曜日、突然渡辺から朝電話がかかってきた。

「今日って暇？」

「今日か？……暇じゃないな」

「暇なんだね。今日スケートしに行こうよ！」

「…話聞いてた？暇じゃないんだよ」

「そういう時は暇じゃないって小町ちゃん言ってたよ？」

「……なんでスケートなんだ？」

「いやあ、実は千歌ちゃんと行く予定だったんだけど急用で行けなくなっちゃったみたいで。だから比企谷くんと行くこうかなって！」

「俺下手くそだぞ？」

「大丈夫！私が教えてあげるから！ね？行く？」

「……わかったよ」

「やったあ！」

「お待たせー！」

「おう」

「ごめんね、ちよつと遅れちゃった」

「気にすんな。ほら行こうぜ」

「うんっ！」ギユッ

「…なぜ手を握る」

「♪」

「無視ですか…」

もう慣れた。うん。最初は恥ずかしかったけど今はもう慣れたよ。

渡辺が積極的すぎて。

「よし！じゃあさっそく滑ろう！」

「まず俺は立つのもきついんだが」

「大丈夫大丈夫！ほら！私の手掴んで！ゆっくりやろう？」

「おう…」ギユッ

「…比企谷くんから握ってくれたの初めてだね」

「…そういうこと言わないでくれる？なんか恥ずかしいから」

「あはは！顔真っ赤！よし！じゃあ行くよ？」

「おう」

俺は渡辺の手に引かれてゆっくり滑る。なかなかバランスをとるのが難しいな。スケートなんて小さい頃にやったくらいだし。

「渡辺は得意なのか？スケート」

「うーん。普通かな？別に飛んで回転とか出来るわけじゃないし」

「いやもうそれができたら選手だぞ」

「あはは、確かに。比企谷くんもだいたい慣れてきたんじゃない？一人で滑ってみる？」

「やってみるか」

俺はなんとかバランスをとりながら滑る。

「うまいうまい！その調子だよ！」

「おうっ……おわっ!？」

「えっ？きやあ！」

途中までは上手くいったがバランスを崩してしまい、渡辺を巻き込んで倒れてしまった。

「いって…す、すまん、大丈夫…か」

俺は言葉を失ってしまった。何故なら、倒れ拍子に俺の手は渡辺の胸を鷲掴みにしてしまっていたから。

「つーほ、ほんとにすまん！わざとじゃ…」

これはまずい。ビンタ絶対食らう。いや、ビンタで済めばいいけど。

吹き飛ばされたりとかしないかな。

渡辺のやつ顔真つ赤にして俯いてるんだけど。

「…と、とりあえず手どけてよお」

「あ、ああ！……ほんとに悪かった」

「わ、わざとじゃないし…だ、大丈夫。…比企谷くんなら嫌じゃない、し」

「お、おう…そうか」

…なんだよ!?俺なら嫌じゃないって?なんだこれは。

逆にキレて吹っ飛ばされた方が当然感あつてその方が良いんだけど逆に。

こういう反応されると困る。

「…ひ、一つだけいうこと聞いてくれたら許してあげる」

「え、いや、さつき大丈夫って…」

「…」

「…はい。なんでもう言うこと聞かせていただきます」

「じゃ、じゃあ……これから名前で呼んで？」

「……いまさらだし別に苗字で良くない？」

「だ、だめっ！名前で呼んでほしいもん……」

「………曜」

「っ！うんっ！……じゃあ……八幡くん？」

「……もう1回言ってくれ」

「……は、八幡くん」

「もう1回」

「も、もう言わないっ！ほら早く滑ろ！」

「くっ……まあいいか、さっき録音したし」

「えっ!?今聞き捨てならないことが聞こえた!?録音したの!?消してよ〜!」

「嫌だ」

「八幡くんのバカ！」

「バカっていう方が馬鹿なんだぞ」

「バカバカバカ！」

「お前たまに高海みたいになる時あるよな……」

「そ、そう?えへへ!」

「なぜ喜ぶ」

「よし！じゃあ今から競走しよ！勝った方が負けた方にデザート奢ってもらえる！
よーいどんっ！」

「お前それ勝てる自信があるから言ってるだろっ！」

「それー!!」

結果、俺は曜にデザートを奢られました。

24話

「お兄ちゃん、なんか届いてるよ?」

「ん?…なんだこれ?…えー、なにに? 幼児化する薬…?なんだこれ。スプレーが入ってる…」

いやいや、俺こんなの頼んだ覚えないぞ。

怪しすぎだろ。

「何頼んだのお兄ちゃん?…なーにこれ?お兄ちゃんロリコン?」

「待て、あらぬ誤解をするな。俺こんなの頼んでないから。そもそもこんなの頼むやついないだろ。怖いんだけど」

「えー、でもなんか気になるね。幼児化かー…なら試してみようよ!」

「試す?」

「そう! そうだね…! かーくんです試そう!」

かまくら…かわいそうに。お前は今から実験台となってしまうのか…

「ほら〜かーくん。怖くないよ〜…それっ」

小町は優しくかまくらを呼び寄せると、スプレーをかける。

すると…

「う、嘘…」

「かまくらが…小さくなった」

なんと、スプレーをかけたらかまくらが昔の俺にも懐いていたちっちゃい猫に戻っていた。

「す、すごいよお兄ちゃんこれ！効き目ってどれ位？」

「えー…2時間だよ」

「ほうほう…お兄ちゃん、曜さんのちっちゃい頃とか見てみたくない？」

………曜の小さい頃か。…見たい。きつと天使だな。

「ということだ！曜さん呼びました！」

「ヨーソロー！」

「はやすぎだろ」

「そこはご都合主義ってやつ！さあ曜さん！」

「な、なにかな？」

「失礼しますっ！」

「え？わっ!？」

「お前いきなりすぎだろ………おお」

スプレーをかけられた曜は案の定、幼児化した。

「わーっ!!可愛いく!!!」

「お姉ちゃん達だあれ?」

「そっか、小さい頃だから分からないのか。えっとね私は小町っていうの!」

「こまち?」

「そう!こまちおねえちゃん!」

「こまちおねえちゃん?…こまちおねえちゃん!」

「うはーっ!テンション上がってきたア!」

悲報、小町が壊れた。

「それでね、そこの目の腐った人は」

「おい」

「はちまん!」

「え?」

「はちまん!また会えた!」

「なんでお兄ちゃんのこと知ってるんだろう?」

「……そうか、前曜が言ってた。昔俺とあったことあるらしいんだよ。多分今の曜はそれ以降の曜なんだろう」

「そうだったの!?!なるほどねえ…曜ちゃん、お兄ちゃんのこと好き?」
「うんっ!」

「だつてお兄ちゃん」

「…あつそ」

「うわー、幼児相手に赤面するなんて、ロリコンだね」

「…おうち帰る」

「家はここだよー。じゃあ曜ちゃん!お姉ちゃんたちと遊ぼうか!」

「あそぶっ!」

「その前にそのダボダボの服なんとかしよつか」

「ちよ、ちよつとタンマ…」

「はちまん!はやくー!」

なんだこの超人は。曜のやつ疲れることを知らんのか。小さいってこともあつてめつちやはしやぐし…体力が持たないこれは。

「いやー、癒されますなあ」

「小町も少しは相手してくれよ…」

「えー?だつて曜ちゃんお兄ちゃんにすぐく懐いてるもん。あ、それにそろそろ2時間

経つよ」

「そうか…名残惜しい気もする」

「まあねくでも写真もいっぱい撮ったし！」

「良くやった小町。…おーい、曜」

「どうしたの？」

「えつとだな…そろそろお別れだ」

「お別れ？」

「また会えるけどな。今はとりあえずお別れだ」

「いやっ！」

「どうするんだよこれ…」

「まあこんなりそうな予感はしたけどねー」

「曜、また絶対会える。な？」

「…ほんと？」

「ああ。ほんとだ」

「…じゃあ…はちまんは曜のことすき？」

「…ああ、好きだぞ」

「えへへく！曜も好きっ！はちまんホッペ貸して！」

「ん？」

「っ……えへへ！好きなひとどうしはチューするってママが言ってるから！」

「…お、おう」

「お兄ちゃんきもい、きもいよ」

「……じゃあまた遊ぼうな」

「うんっ！」

曜の体は自然と光だし、光は徐々に元の姿に戻っていく。

「……………あれ？私……………っ?!?!? な、なんで私裸なのお!?!」

「あ……」

「は、はちまん見ないでっ！」

「ぐふっ」

「あちゃー、服のこと忘れてた」

25話

さて、明日は何の日？ホワイトデー。

バレンタインデーのお返しはしなくてはな。

さて…

「小町さん、どうすればいいんでしょうか」

「まあお兄ちゃんのことだからこうなるとは思ったよ。うん」

「仕方ないだろ。こういうの初めてなんだから」

「まあごみいちちゃんじゃ仕方ないか」

「…で、どうすればいいと思う？」

「そうだね…ズバリ！お兄ちゃんが心を込めて選んだものならなんでもいいとおもいます！」

「いや、俺センスないぞ？」

「そんなの関係ないよ。お兄ちゃんが一生懸命選んでくれたものなら。気持ちだよ気持ち！」

「そういうもんか？…まあわかった」

「頑張れー！」

そして、ホワイトデー当日。

とりあえず後輩達にはクツキーをあげた。

まあ無難だろ。高海にはまあ普段世話になって…ないかもしれないがまあ付き合ひもあるしな。

「高海」

「ん？なあにはちくん？」

「これホワイトデーだから」

「わー！もらっていいの？」

「ああ」

「開けてもいい？」

「気に入らなかつたら捨ててもいいからな」

「あはは、そんなことしないよー。…わあ！可愛いハンカチだー！」

「日常使えるものがないかと思っただけ」

「ありがと！大切にしますね！」

「ああ」

「曜ちゃんにもあるんだよね？」

「…まあ一応、な」

「曜ちゃん今職員室にいますから行ってあげて！」

「わかった。サンキュな」

「失礼しました」

「曜」

「あ！八幡くん！どうしたのっ？」

「あー…バレンタインの時のお返しをな」

「そっか、今日ホワイトデーだもんね」

「ああ。それでな…この後デートしないか？」

「わあ…！高そうなお店だね…」

「まあ金のことには気にするな。とりあえず座ろうぜ」

お金は小町が何故か親父から貰ってきたらしい。一体どんな手を使ったのか。
「う、うん」

「決まりましたらまたお呼びください」

「はい」

「す、すごいね。ドレスコードまでもらっちゃった。場違い感すごいよ」

「まあこういう経験もそうないしこういう時くらいな。……にあつてるぞ」

「そ、そう？ 八幡くんも……か。かつこいいよ」

「さんきゅ。……とりあえず決めるか」

「そ、そうだね」

「美味しい〜！」

「ん……そうか？」

「ええ？ 美味しいじゃん！」

「俺にはこういう高い食べ物はこちらから……量も少ないし」

「それ言ったらお終いだよ……」

「まあでも、美味い？ か？」

「まあでも普段こんな料理食べないから八幡くんがそういう反応しちゃうのもわかる気がするな」

「だろ？」

「あー美味しかった！」

「満足したなら何よりだ。そこの公園寄ってかないか？」

「うん」

俺達は少し休憩するために近くの公園に寄り、ベンチに座った。

「星綺麗だね」

「ほんとだな」

「今日はありがとね」

「お返して何すればいいのかわからなかったんだが…こんなのもいいのか？」

「八幡くんがしてくれたことなら何でも嬉しいよ！」

「それ小町にも言われたな」

「でしょ？小町ちゃんも分かってる！」

「…あー、もう一つ、実はあるんだ」

「そうなの？もうあれだけでも充分だったのに」

「…こっち向け」

「うん？…っ！」

俺は一瞬だけ、曜と唇を重ねた。

「……俺からしたことなかったからな」

「……ず、ずるいよ不意打ちなんて」

「それでもしないと恥ずかしくてできないからな」

「……えへへ」

「……なにニヤけてんだよ」

「ん？嬉しいのっ！」

「……そうですか」

「そうなんですっ！」

「……まあとにかく……曜、こんな俺だがこれからもよろしくしてくれると……ありがたい」

「……うんっ。こちらこそ、こんな私ですが、よろしくおねがいます！」

「……」

「……うっ」

「あははははー！」

「はあ……帰るか」

「うんっ！」

26話

今日から俺も高校2年生。かといって特に何かが変わるとかではないが。クラスも同じだし。生徒数少ないからな。

「スクールアイドル部でーす！」

校門にたどり着くと、なにやら聞き覚えのある声が…

「…なにやってんの」

「あ、はちくん！」

「スクールアイドル…部？おい高海、これ字間違えてるぞ」

「え？あ、ほんとだ！」

「曜まで何やってんだ？」

「千歌ちゃんかね、スクールアイドルをやりたいて言ったから、勧誘のお手伝い！」

「お前はやらんのか？」

「無理無理！水泳部の方もあるし」

「まあ確かにな」

曜のアイドル姿とかちよつと見てみたい。

「で、集まったのか？」

「それが全く……」

「もうー！なんで誰も興味持ってくれないのー!？」

「勧誘の仕方が悪いんじゃないか？」

「えー……？……あ！み、見てあの子たち！」

「ん？新入生か？」

高海が指さした先には美少女が二人いた。

大人しそうな二人組だ。

「あなた達！」

「ずらっ!？」

「びぎい!!？」

「千歌ちゃん速攻だね」

「おい、いきなり行ったらびつくりするだろ」

「あいたつ!?!あははーごめんごめん。つてそれより！あなた達、スクールアイドルに興

味無い!？」

「スクール……アイドル？」

いきなりそんなこと言われても動揺するだけだろ……

それより…

「な、なあ曜、俺なんか後ろのあいつにめっちゃ怖がられてる気がするんだけど…」

「まあ八幡くん初対面だと怖がられても仕方ないかもねー」

「彼氏にいうセリフじゃないと思う…」

「どうどう？ スクールアイドル！」

「ま、マルは図書委員の仕事があるから…」

「ら、ライブとかあるんですか！」

「うん！ まだ曲とかも決まってるだけだねー。あはは」

「わあ…！」

「スクールアイドル興味あるの!？」

「す、好きなんです」

「わあ！ あなたどう!？ 可愛いし絶対人気出るよ！」

興奮した高海は手を握って必死に勧誘する。しかし…

「び…」

「び？」

「びぎやああああ!!!？」

「うわあ!？」

鼓膜破れるかと思った。もしかしてこの子、極度の人見知りとかそんな感じか？もう一人の友達に分かつていたようで耳塞いでた。

「どいてどいてー!!!」

「あ？ぐふっ!?!」

いきなり上から声がしたかと思えば、突如木の上から何かが降ってきて俺に直撃した。

「いた…くない？ん？うわ！ふ、踏み潰しちゃった」

「大丈夫!?八幡くん!」

「いって…」

「ご、ごめんなさい!」

「き、気にするな…」

というかこの子も可愛いな。どうなってんのこの学校。

「いって!…なにすんだ曜」

「別にー?」

「…はっ!…ふっふっふっ」

なんだ…後ろから嫌なオーラが…

「ここは…地上?ということとはあなた達は下劣で下等な人間ということですか?」

「『……』」

…うわあ、これ厨二病だわ。

番外編　HAPPY PARTY TRAIN

俺達、a q o u r s は人気も徐々に上がってきて、現在、ツアーをやっている。まあそんな大層なものではないが、いろんな場所に行つて、a q o u r s という存在を、スクールアイドルの素晴らしさを、沼津という場所を広めるために頑張っている。

そして今日は最後の埼玉公演だ。

「八幡くん！着替え終わったよ！」

今はみんなの衣装確認だ。

「おう。デュオトリオのやつか？」

「そうそう！善子ちゃん！せーの！」

「じもあいつー！」

「かわいいかわいい」

「感情全くこもってないよ…どう？ユニコーンブリザード！」

デュオトリオの名前厨二病感すごいのは俺だけか…？

もはやイナズ○イレブ○の技名にしか聞こえない。

「よくできてるんじゃないか？似合ってるぞ」

「だって！善子ちゃん！」

「ふっ、当然よ！」

「八幡くん！」

「ん？梨子達もできたのか？」

「「ハリケーンプロツサム！」」

「…」

「は、八幡くん、無言の反応はさすがに恥ずかしいよ…」

「あ、ああ。似合ってるぞ。それは何をモチーフにしたんだ？」

「玉子？」

「梨子ちゃんは…桜でんぶ？」

「鞠莉ちゃんは…芳香剤？」

「お前…」

「梨子ったらひどいわ！芳香剤なんて！」

「ご、ごめんね！ほ、他に思いつかなくて…」

思わず笑いそうになってしまった。

「八幡さん！」

「ん？ダイヤとルビイもできたか」

「どうですか？インフェルノフェニックスの衣装は！」

うん、もう名前については何も言わないよ。うん。

「情熱的な感じで曲にもあつていいと思うぞ。ルビイも似合ってるからな」

「あ、ありがとう…八幡さん」

「おう」

「はちくんはちくん！」

「ん？千歌に果南か」

「私達、トワイライトタイガー！」

「似合ってるぞ」

「どのへんが!?どのへんが!？」

「そのかぼちやとか」

「みかんだよっ!!!」

「お、おお、すまん」

怖い。千歌のみかん愛がすごい。

「今日デュオトリオは初お披露目だな。お客さんも喜んでくれるといいな」

「大成功で終わらせるわ！」

「最後はね！はちくんにも言っていない発表もあるから！」

「そうなのか？まあなら楽しみにしとく」

「うん！それじゃみんな！a q o u r s！」

「待て、最初はH P Tの衣装だろ？」

「そうだった！また着替えて集合！」

「よし！じゃあ改めて！みんな！今日は思いっきり楽しもう！a q o u r s！！」

「「サンシャイーン！！」」

こうして、a q o u r sラストの埼玉公演が始まった。

あいつらも、お客さんも楽しんでいるようで何よりだ。

ちなみに俺も普通に席に座って応援している。

「えー、ここで、お知らせがあります！私達a q o u r sは……3 r dライブを開催します！！！」

「…は？まじ？？」

ほんとに知らなかった。お客さんも大盛り上がりだ。

一体いつの間に決まったんだ…

「これからも！応援よろしくおねがいます！！」

「お疲れさん」

「どうだった!？」

「ああ。最高だったぞ」

「八幡くん、最後の泣いてたもんね」

「おい梨子、何故それを知っている。席教えてないぞ」

「あ！それ私も見つけた」

「果南ちゃんも？千歌も見つけた！」

「というか、リトルデーモンであるあなたのこと見つけられないわけないじゃない！」

「なんかムカつく」

「痛い痛いわよ！なにするのよ八幡！」

「というか3rdライブなんて初知りだぞ」

「だって教えてなかったもんね！」

「でも驚いたでしょ？」

「驚き桃の木山椒の木」

「……」

「…調子に乗りました」

「こんなはちくんは置いて！みんなで千歌の家で打ち上げやろうよ！」

「いいね！」

「私色々持ってたわ！」

「あまり騒がないようにするのですわよ？」

「ほら！八幡くんも行く？」

「曜ちゃんもはやくー！」

「はーい！ほら早く！」

「…ああ」

終わり

27話

その後、厨二病の女子と勧誘した方の女子が昔の知り合いらしく、どこかへ行つてしまった。

「…なにしていますの？あなた達」

「え？…あ！もしかしてあなたも新生生!?!スクールアイドル!?!やってみませんか!?!」

…新生生…?おい待て、ネクタイの色…あれは

「ち、千歌ちゃん!?!この人3年生だよ!?!しかも生徒会長!?!」

「…え!!!」

「ふわああ…ねむ」

高海と曜は生徒会長の元へ行つた。俺?あんな面倒くさそうなのついて行くわけないだろ。

「はちくーん!!」

「…なんだよ」

「あはは、千歌ちゃん、生徒会長に論破されちゃつて」

あの人なんかキツそうだもんな。色々。

「とりあえず部員集めないことにはどうにもならんだろ」

「うーん…」

「みんな席につけー。今日は転校生を紹介する。入って」

「はい。……桜内梨子と言います。東京の音ノ木坂というところから来ました。よろしくお願いします」

「……あー!!!」

「え?…あ」

「き……き……奇跡だよ!!!桜内さん!スクールアイドルやりませんか!」

「……ごめんなさい」

「そんなあー!!」

「……あれ?比企谷くん?」

「あ?」

「え?八幡知り合いなの?」

「…いや、知らんぞ」

どっかで見た気はするが…

「やっぱり比企谷くん!あの時はほんとにありがとう!」

「…どの時？」

「東京で首飾りのペンダント拾ってもらって…」

「…あー、あつたなそんなこと。俺名前乗ったつけ？」

「えつとね…小町ちゃんとは連絡とってて…」

「…またあいつか」

いつ連絡先なんて交換したんだ。家帰ったら問い詰めよう。

「…とりあえず桜内、お前は比企谷の後ろな」

「あ、はい。よろしくね。比企谷くん」

「ああ」

「桜内さん、だよね？私、渡辺曜！ヨソソロー！」

「よ、ヨソソロー？」

「こいつの口癖みたいなものだ。気にすんな」

そのうちじもあい発言に変わりそう。おっとメタ発言。

「でも偶然だね。比企谷くんとまた会えるなんて」

「まあな。というかよく俺のこと覚えてたな」

「だって恩人だもん。結局お返しできてないし」

「あの特別にいらないうって言ったと思うんだが」

「それじゃ私の気が収まらないの。あ！ならこうしようよ！私比企谷くんの好きなものとか分らないし、日曜に比企谷くんとショッピングに行つて、プレゼントをかうのは？それがいいよ！ね？」

「いやそれつてつまり……」

「え？……あ……で、デート、かな？ふふつ」

「よ、曜ちゃん!?曜ちゃんしつかりして!?曜ちゃん！」

まずい、なんかややこしい事になりそう。絶対。

28話

「お待たせ！まった？」

「いや、大して待ってない」

恋人同士が待ち合わせの時に言うであろう定番のセリフ。

それを俺は今恋人ではない相手に言っている。

こんなことがあつていいのだろうか。これモテ期来てるんじゃない？

「じゃあ行こっか」

「おう」

先日の桜内の提案通り、その辺のショッピングモールに来た。

ちなみに小町に問いただしたところ、舌を出して「てへぺろっ！」と言つて全力で二

階へ逃げやがった。

「今日は私の奢りだから！なんでも食べたいものとかあつたら言つてね！」

と、言われてはいるがお礼とはいえ男が女に奢ってもらうつてのものな…

「やっぱり奢ってもらうのは悪いから遠慮しとく」

「でもそれじゃ…」

「…あれだ、俺みたいな奴は美少女とデートできるだけで御褒美だからな。今こうして歩いているのがお礼でいい」

「…：び、美少女？私？」

「ん？ああ。なにかおかしなこと言ったか？」

「わ、私なんて全然美少女なんかじゃないよ！地味だし…」

「…お前が地味だったら全世界の女子が地味ってことになるぞ」

「私なんかより可愛い子はたくさんいるよ。ほら、高海さんとか…」

「いや、あいつらも確かに可愛いけどよ…お前も大して変わらんぞ」

「…ひ、比企谷くんは私のこと可愛いって、思う？」

「だからさつきからそう言ってるだろ。恥ずかしいから何度も言わせるな」

「ご、ごめん。…そっか。可愛い…可愛い…」

「…桜内？」

「よしっ！じゃあ今日はいっぱい楽しもうね！私まだここ来たばかりだからよく分からないから案内よろしくね！」

「いや、俺も大差ないぞ…」

「こうして俺と桜内のデートが始まった。」

その頃

「なんかいい雰囲気だね……」

「八幡……浮気……」

「よ、曜ちゃん落ち着いて！黒いオーラが出てるよ！」

「桜内さん確かに可愛いし八幡もしかして好きになっちゃったのかな……」

「んー、いや、それはないと思う。普段の見たたらはちくん、曜ちゃんにベタ惚れだよ？
曜ちゃんにだけやけに優しいし。千歌には頭ぐりぐりとかしてくるのに！ああ！なんかムカついてきたー！」

「ち、千歌ちゃんも落ち着いて！あ！八幡達移動するよ！」

「よし！行こう曜ちゃん！……あ！この犬可愛い！」

「え？あ、千歌ちゃん！」

「で、どこ行くんだ？」

「んー、普段は服見たりしてるけど……比企谷くんつまらないよね？」

「……なら、俺は書店に行ってるからお前は服見てこいよ」

「……それじゃ意味無いでしょ！」

「な、なんかすみません…」

めっちゃキレてる…

「じゃあ先服見るか。その後書店ついてきてくれ」

「わかった。そうしよつか。あ、丁度そこに服屋さんあるよ。入ってみよつか」

「おう」

俺たちは目の前にあつたいかにも今どきの女子が行きそうな店に足を踏み入れる。

「わあこれ可愛い！比企谷くんどう思う？」

「いいと思うぞ」

「そーういや、今日発売の本買うか。まだ読み終わってないけど。」

「あ、これとか！」

「いいと思うぞ」

「ついでに新しい本とかも開拓しておくか。」

「これとこれどつちがいいかな？」

「いいと思うぞ」

「前やたらエロい表紙のやつがあつたんだよな…いや、買わないよ？気になつてるけど。見つかつたら小町に軽蔑されそう。まあ外見だけで判断するのは良くないけどな。」

「…比企谷くん！」

「いいと思…なに、どした」

「さつきから「いいと思うぞ」しか言っていないよ！聞いてないでしょ！今も言おうとしてたしー！」

「あー…すみません」

「もうっ…試着するからどっちがいいか選んで？」

「…俺が？」

「そう」

「いやでも…」

「い・い・わ・よ・ね？」

「…はい」

女子って怖い。

「曜ちゃん、なんか桜内さん怖いね…」

「どうせ八幡がまた変な事言ったんだよ。八幡案外デリカシーないからね」

「そうだ！千歌達も何か服買っついていこうよ！」

「さんせいっ！」

「お待たせ。どうかな？」

「…まあお前らしくていいんじゃないか？」

「そうかな？じゃあ次の着るから待ってて」

……：「そういうや曜のやつ今日のこと何も言ってこなかったな。」

あいつ案外嫉妬深いところあるし何か言われるかと思ったが…

「じゃーん！どう？曜ちゃん！」

「おお！かつこいいよ！じゃあ私も！」

「曜ちゃんエロい！エロいよ！どんだけ肌見せるの！」

「すぐ夏来るし暑くなったらこういうのもアリかなって！」

「はちくんに襲われちゃうよ！」

「そ、それはそれで…えへへ」

「よ、曜ちゃん？曜ちゃん！」

「比企谷くん、着替え終わったよ。さつきとどっちがいいかな？」

「…俺はさつきのかな。まあお前の好きな方でいいと思うぞ」

「じゃあさつきのにするね。買ってくるから外で待ってて！」

「ほんとに俺のセンスでいいのか…？」

服屋を後にした俺達は書店にやってきた。

さて、ここからが問題だ。ラノベコーナーに行けばほぼ確実に桜内に勘違いされて変

態扱いされる。

内容は別になんてことないのに、イラストだけやたらエロいのかあるからな。

「あー、桜内。お前はここの辺のコーナーでも見ててくれ」

「え？私もついてくよ。比企谷くんの読む本とかも気になるし」

「いや、だがな…」

「推理小説とか？比企谷くんなんか似合いそうだよな。それとも古典系とか？」

「…まあわかった。ひくなよ？」

「うん？」

「これがラノベかー。たくさんあるね」

「まあお堅い小説を読みやすくした感じだな」

「イラストも…こ、これ…！」

「あー、刺激の強いやつとかあるから」

「あ、あんな恥ずかしい格好で…ひ、比企谷くんもああいうイラストがいいの？」

「いや、たまにはああいうのも…っついていや、別に俺は内容派だから。うん」

「…ま、まあ比企谷くんも男の子だもんね」

「…あ、あの時の…」

「ん？…お前は確か…」

突如話しかけられ、後ろを振り向くと、たくさん大事に本を抱え込んでいる美少女がいた。ってこいつ前高海が勧誘してた子だな。

「こ、こんにちは…」

「お、おう」

「…」

「…」

「比企谷くん知り合い？」

「ん？知り合いというか…こいつも高海に勧誘された一人だ」

「なるほど…」

「く、国木田花丸です」

「そういう名乗ってなかったな。比企谷八幡だ」

「桜内梨子です。よろしくね？」

「は、はい。…おふたりはデ、デート中ずらか？」

「いや、まあ傍から見ればそうだが…彼女ではないぞ。あの時のグレーの髪の毛のやつが彼女だし」

「ひ、比企谷くん彼女いたんだ…」

「まあな。一応」

「…浮気ずらか?」

「ちげえ!…話せば少し長くなるが、簡潔に言えば俺が前桜内を助けてそのお礼で来るだけだ」

「よ、よく分からないが、浮気はダメずらよ?」

「しないしない。そんな甲斐性ない。…ずら?」

「…あ!またいつの間にか言っちゃったずら…あ!また!」

「…比企谷くん、なんかこの子抱きしめたくなってきた」

「お前の中で何があった。落ち着け」

「あの後国木田とは適当に話して別れた。あいつかなりの文学少女だな。スクールアイドルのことは…まあおいおい話すか。」

「…で、そろそろ出てこい。さっきからずっとバレてるぞ」

「比企谷くん?」

「…」

「みかんやるぞ」

「ほんとつ!」

「あ!千歌ちゃん!」

「た、高海さん!? 渡辺さんも…」

「曜が何も言わなかったから怪しいと思ったんだ。これが目的か」

「いや、あはは。なんでバレたの？」

「いや、お前ら毎回途中から自分たちのショッピングに変わってるじゃねえか。普通に服見てたりしてたし」

「てへっ!」

「ストーカーには罰だな!」

「いたいたい! はちくん痛いよ! ぐりぐりしないでえ!」

「…桜内さん」

「どうしたの?」

「…もしかして八幡のこと好き?」

「…分からない。気になってる、かな? でも渡辺さん彼女だもんね」

「…これからはライバルだね!」

「え?」

「八幡は今恋人だけど、桜内さんみたいなお可愛い子がいたら私のことなんかどうでも良くなっちゃうかもしれないし」

「そ、そんなこと」

「浦の星には可愛い子がたくさんいるから、私も恋人だからって余裕って訳じゃないんだよ！八幡は結構影で人気もあるし。だから梨子ちゃんにも負けない！」

「…うん。なら私も負けないよ！曜ちゃん！」

「あ！なんで2人とも名前呼びしてるのー!!?千歌も！」

「おい、罰は終わってないぞ」

「鬼だ！鬼がいるよー！」

「千歌ちゃん元気だね」

「それが千歌ちゃんの取り柄だからね！」

「…?どうしたんだ?2人とも」

「ううん！ただ今梨子ちゃんに宣戦布告しただけ！」

「そうそう。気にしないで」

「…なに、戦争でもするの？」

続く

番外編 一日遅れのハッピーハロウィン

「トリックオアトリート!!」

「見てみて曜ちゃん! しいたけのコスプレ!」

「おお! 写真撮らせて!」

「ちよつと待て…」

「どんどんとつちやつてよー!」

「わあ! ルビィちゃんお姫様ずら!」

「えへへ… 普段和風ばかりだから洋風もいかなって…」

「ふふふ… 堕天使の格好をなんの迷いもなく着れる… 最高!!」

「おい…」

「梨子も綺麗なドレスね!」

「鞠莉ちゃんは… 魔女? 可愛いですね」

「ありがとう!」

「ダイヤ、これ持っててくれる?」

「分かりましたわ」

「あれ？八幡どうしたの？」

「……………なぜ俺の家に a q o u r s 全員集合してるんですかね」

「え？今更何言ってるの？」

「その頭大丈夫？みたいな顔やめろ」

「昨日家行つていいか聞いたよ？」

「ああ。たしかにいいと言った。ハロウィンなのも知ってたから仮装とかしてくるのかなとか色々妄想もした」

「…その発言いる？」

確かに要らないな。いや、だって曜特にコスプレとか好きだしちよつと露出あるやつとか着てくるかなとか期待しちゃうでしょうよ。

「だが……………こんなに来るとは聞いていない！」

「もう八幡もそんなケケケチしたこと言わないでエンジョイしましょ！ハーレムよハーレム！」

「俺は曜がいればいい」

「は、八幡いきなりそれはズルいよ…」

「かなーん、なんかピンク色の空気に毒されそうだわ」

「鞠莉、あの二人はいつもあんな感じなんだからそろそろ慣れたら？」

「八幡！一緒に詠唱するわよ！」

「おい善子服を引つ張るなテンション高いなお前」

「今日くらいヨハネって呼びなさいよ！この格好をして街を出歩いてもなんにも言われないのよ！むしろこれが普通！なんて最高な日！ハロウィン！」

「そうですねー」

「なんでそんな雑なのよ!？」

「お菓子まだー!？」

「千歌ちゃん、もうちよつと我慢しよ？今果南ちゃんが作ってくれてるから」

「うー！お菓子くれなきやイタズラしちやうぞー！」

「ちよ、ちよつとあはは！千歌ちゃんくすぐらないでよー！」

「八幡さんは仮装はしないのですか？」

「俺はこれで仮装してるからな」

「…ゾンビ？」

「いや、そう言われるとは思ったけども。口に出されると傷つく。俺の豆腐メンタルが」

「も、申し訳ありません」

「いや冗談だけだよ」

「さあみんな！お菓子焼けたよ！」

「わあ!!!」

果南の作ったお菓子はどれも美味そうだ。

「いっぱい食べるぞー!」

「太るぞで」

「今日くらい気にしない気にしない!」

俺達は仮装を楽しみつつ、お菓子を食べた。

俺の家がこんな賑やかなのは久しぶりだな。

前までは小町とだったからな。ちなみに小町は友達の家に行った。

「ばいばいー!」

「ふう…ん? 曜は帰らないのか?」

「ん?…八幡と二人の時間も欲しかったから」

「…あつそ。コーヒー飲むか?」

「あ、じゃあ飲もうかな」

「そういや、その仮装は猫か?」

「猫じゃないよ! 化け猫!」

化け猫…とはかけ離れた大変可愛らしい仮装だが…

「八幡！」

「ん？」

「トリックオアトリート！」

「いや、さつきたくさん食ったろ…」

「イタズラしちゃうよ？」

「もう家に菓子は無い…っ!？」

「っ…ぷはっ」

「…なんだよ急に」

「あはは、八幡いつまで経ってもキスの時顔真っ赤だよね」

「慣れないんだよ。…で、今の何？」

「え？イタズラっ！」

「…ふっ、そうか」

今日は今までで一番濃いハロウィンだったな。

29 話

「梨子ちゃん大変だよ！一大事だよ！」

「どうしたの？」

「曜ちゃんとはちくんが……喧嘩してるの！」

「……えええつ!!？」

私の親友である渡辺曜ちゃん。曜ちゃんには恋人がいます。名前は比企谷八幡くん。

2人はいつも仲良しで喧嘩してる所なんて見たことない。

そんなふたりが喧嘩。これは一大事だよ！

「一体何が原因なの？」

「だから曜ちゃんに聞きに行こうと思って」

「きつとよほど重大な内容ね……」

「うん……！」

「喧嘩してる理由？」

「そう。何が原因なの？」

「聞いてよ！八幡の家にこの前言った時の話なんだけど……」

「え、回想入る？」

「ヨースロー！」

く

「どうつ？メイド服！」

「眼福」

「これ前新しく買ったんだあ！」

「似合ってるぞ」

「ほんと？よかったあ。あ、そういえばね……は、八幡に喜んでもらおうと思って買ったのがあるんだけど……ちよつとまってる？」

「おう？」

私は部屋を出て先日買った服に着替え始める。

ちよつときついなあ……で、でもこの方が逆に喜んでくれたりするのかな？恥ずかしいけど……

「お、お待ちせ……」

「……な、ナースか？それ」

「う、うん」

「……エロい」

「っ!?!ちよ、ちよつとサイズ選び失敗しちゃって…」

「でもそれがまたいい」

「そ、そう?」

「…曜、ちよつとこつち来い」

「う、うん?…っ!?!んっ…!」

「…ぷはっ…すまん、曜見てたらしたくなつた」

「きゅ、急に來たらびっくりするじゃん!」

「嫌だつたか?」

「…わ、わかつてるくせに」

「ねえ、いつ喧嘩するの?ねえ?」

「り、梨子ちゃん落ち着いて!きつとこれも必要なお話なんだよ!私もなんか砂糖吐き

たいけど!」

「お兄ちゃん!曜さん!お菓子持ってきたよ!」

「あ!きのこの山だ!」

「俺たけのこ派だからたけのこ貰うぞ」

「えー?きのこの方が美味しいよ!」

「たけのこのの方がチョコ多いしこっちの方がいい」

「きのこはその分美味しいチョコだもん!」

「ほう?たけのこ軍に喧嘩を売る気か?売られたけんかは買うぞ?」

「八幡こそきのこ軍を敵に回すなんていい度胸だね!この曜ちゃんがメツタメタにヨロソローしてあげる!」

「ね、ねえ、まさか喧嘩の原因って…」

「きこの派かたけのこ派に決まってるじゃん!千歌ちゃんはきこの派だよね!」

「ねえ…これ最初の回想いらぬわよね!!」

「うわっ!梨子ちゃんがキレた!」

「なんなのよ!最初ただイチャイチャしてただけじゃない!?」

「り、梨子ちゃん落ち着いて!」

「ねえ!梨子ちゃんはどうしちゃった!?」

「どうでもいいわよそんなのー!!」

結果、たけのこ軍ときのこ軍は和解したみたい。

「あ！八幡おはよう！」

「おい、あんま腕にひつつくな」

「えー？2人の時は八幡も甘えてくるのに！」

「そ、それは……俺の二つ目の人格であって俺じゃない」

「はいはい。顔真っ赤だよー？」

「ぐっ……」

「り、梨子ちゃん!?顔真っ白だよ!?梨子ちゃん!戻ってきてー!」

30話

今日は珍しく一人で帰宅中、どうも比企谷八幡です。

ポツチを自称している俺が「珍しく一人」なんていう日が来るとはな…まあこれも高海や曜の影響だな…

「暇だし本屋で立ち読みでもするか…」

久しぶりに文学系でもいつてみるか。最近ラノベばっかだったしな。

俺はオールジャンル読むから。

「知らん間に色々増えたな…」

「んしょ…んっ…」

俺が本を探していると、目の前に浦の星の生徒と思われる女子が高いところに入る本を取ろうとしていた。

「…ほら、これか？」

「あ…あ、ありがとうございます」

「…ずらっ？」

「っ！あ、ありがとうございます！そ、それでは！ずらっ!？」

彼女は急に慌てて走り出そうとしたのでつまづいて転けてしまった。

「大丈夫か？」

「うう…」

「…足痛いのか？ 見せてみる」

「は、はい…」

「…これ捻ってるな…立てるか？」

「これくらい…ずらっ!？」

「おっと。無理っぽいな…一人で来たのか？」

「は、はい」

さすがに俺がおんぶしていくのもアレだしな…絶対通報される。

「かといってどうしたもんか…」

「オラの家はすぐ近くだから頑張って帰る…ずらっ」

「おい無理するな。悪化するぞ」

「で、でもここにいるわけにもいかないし」

「…俺から一つ提案がある。嫌なら断ってくれて構わん」

「…重くないですか？」

「いや、別に」

「…」

「…」

結局俺がおんぶすることになりました。

女子の太ももって柔らかい（白目）。

「…いまいやらしい事考えたすら」

「…なんで女子ってそういうの鋭いんだろうな」

「…先輩、ですよね？」

「ん？そういう名前言っていないな。2年の比企谷八幡だ」

「おらは1年の国木田花丸です」

「…それ方言か？」

「え？…あ！」

「オラとかずらとか言ってたから」

「な、治そうとしてるんですけど…」

「まあ方言女子とか俺は好きだぞ」

「す、好き!？」

「いや、個性的でいいってことだ。俺なんか悪い方に個性の塊だけだな」

「確かに比企谷先輩は目とかアレすらね」

「案外きもいとかよりアレって言われた方が傷つく時もあるんだぞ」

時に優しさは人を傷つけるよね。

「ご、ごめんなさいすら!」

「まあ別にいいけどよ…」

「そういえば比企谷先輩は本読むんですか?」

「色々読むぞ。基本休みの日も外でないと家で本読んでる時も多いしな」

「周りにはあまり本好きな子がいなくて…」

「まあ今どきの子は読むやつ少ないだろうな。なんの作品が好きなんだ?」

「オラはやっぱり…!」

帰り道はひたすら本の話をした。

国木田のやつヒートアップしたら止まらなくなるタイプだな。

「あ、ここです」

「ん?…寺なのか?」

「あれ?花丸ちゃん?」

「あ、ルビイちゃん」

「お、男の…人…!!」

「ひ、比企谷先輩!ちよつとルビイちゃんから離れた方がいいかも…」

「え、俺何もしてないのに犯罪者扱い?ひどくない?」

「び…びぎやあああああ!!?」

新たに現れた女の子は俺を見て悲鳴をあげて気絶してしまった。

一難去ってまた一難。

31話

「うゆ……？」

「あ、ルビイちゃん起きたずら」

「わ、私……」

「何があつたか覚えてる？」

「確か……お、男の人が花丸ちゃんを……」

「それでルビイちゃん気絶しちゃったずら」

「あら、ルビイ起きたのね」

「お姉ちゃん」

「あ、比企谷先輩、誤解はとけたずらか？」

「ホント疲れた……」

「ルビイ、この方は怪しい方ではありませんでした。中身は」

「腐ってる目はデフォなんだ、すまん」

「あ、えつと……」

「男が苦手らしいな。別に無理に話さなくていいぞ」

「ご、ごめんなさい…」

「改めて自己紹介致しますわ。私は黒澤ダイヤ、この子は妹のルビイです」

「比企谷八幡だ」

「この度はルビイが迷惑をかけてすみませんでした」

「いや、こんな見た目不審者の俺が友達おんぶしてたら気絶してもしょうがない。むしろ男が苦手なら」

「まあ確かにそうですわね」

「否定してくださいよそこは」

「比企谷先輩は見た目こんなだけ優しい人すら。多分」

「なに？俺をいじめたいの君たち」

黒澤姉は性格きつそうだ。さつき誤解とくときとかずっと竹刀突きつけられてたからな。

「…：そういうや黒澤姉はどこかで見ただことあるような」

「私は生徒会長ですから。そのせいかもしれません」

「なるほど」

「というか、私前比企谷さんにお会いしてますわよ」

「え？いつ？」

「あのスクールアイドル部に勧誘しようとしていた方がいた時です」

「…あー、そういやそうだったな。国木田とかもあの時いたな」

「そういえばそうだったはずらね」

「スクールアイドルやるのか？」

「ま、マルは図書委員があるから…」

「そもそもまだ部活は設立されていませんけどね」

「認めてないんですか？」

「認めるわけありませんわ」

「まあ色々事情があるのだろう…」

「じゃあ俺はこれで」

「あ、比企谷先輩！」

「なんだ？」

「連絡先教えてほしいズラ！」

「え？なんで？」

「本の話ができる人は少ないから！」

「あー、まあ別にいいぞ」

「なら私もお願いしますわ。浦の星でおかしなことをしないように監視しなければいけませんから」

「え？俺の誤解とけてないの？」

「ふふつ、嘘ですわ。これも何かの縁ですし」

「じゃあ登録しといてください」

「マルたちがやるはずらね…終わったずら。比企谷先輩、今日はほんとうにありがとうございしました」

「気にすんな。それじゃあ」

「ほら、ルビイも」

「あ、えつと…ま、また」

「…ああ、またな」

怖がられるのはまあ慣れているがいつかは話せるといいな。

次の日、携帯に国木田からメールが来ていて、さらにそれを曜に見られて誤解を解くのが大変だった。

「なんか八幡の周りに急激に女子が増えてる気がする」

「気のせいだ」

「…ニネンブウリデスカ」

32話

「2年の比企谷八幡くん、連絡事項があるので理事長室へ来てください」

「は、八幡なにしたの!?理事長室って…」

「あれ?でも理事長って今いないんじゃないかなかったっけ?」

「…まあとりあえずいつてくるわ。よく分からんが」

俺は理由もわからないまま理事長室へやってきた。

「…すみません、比企谷八幡です」

「…入ってください」

「失礼しま」

「はちまーんーんーっ!」

「うおっ!?は!?な、なんだ!?!」

「久しぶりね!」

「……………もしかして、鞠莉姉…か?」

「Excellent!会いたかったわ!」

この人は小原鞠莉。俺が昔海外に旅行に行った時に仲良くなった。というか仲良くさせられた。まあその話は追々。

「まじで久しぶりだな…でもなんでここに？」

「それは私がこの学院の理事長だからよ！」

「ほうほう…意味がわからん」

「それは私から説明いたしますわ」

「あ、いたんですか」

「最初からいましたわっ!!」

「す、すみません」

相変わらず怖いなあこの人。あ、俺のせいかな

「元々この学院の理事長は鞠莉さんのお父様なのですが事情により鞠莉さんが理事長を務めることになりましたの」

「でも鞠莉姉って年俺と大して離れてなかった気が…」

「私は今はダイヤと同じ高校3年ね」

「…理事長できるのか？それ」

「できるからここにいますのでえす！」

「というか私は鞠莉さんと比企谷さんが知り合いということに驚きですわ」

「昔色々ありまして」

「私の初恋の相手よ！」

「えっ!？」

「すぐそういう嘘つかないで下さい」

「この人昔もからかう癖あったからな。俺も色々連れ回された。

「ほんとよ？」

「…騙されませんよ？」

「じゃあ証拠に…キスしよっか」

「まだ諦めない気か…:…っ!？」

嘘だと思つて油断していると、鞠莉姉はほんとに頬にキスしてきた。

「顔真つ赤よ?八幡っ!」

「な、なにしてんの!？」

「あら、外国では普通よ?」

「日本は違うんだよ!」

「は、破廉恥ですわ!」

やばい、これは波乱の予感しかしない。

「…で、なんの用で俺を呼んだんですか?」

「別に敬語じゃなくてもいいわよ？昔からの仲でしょ？」

「いきなりキスしてくるような人と仲良くなった覚えはありません」

「その割には今の八幡にやけてるわよ？」

「は？え？まじ？」

「…ぷっ！嘘よ嘘！イツツジョーク！」

「…帰る」

「あー！待って待って！ちゃんと用はあるから！」

「…なんですか」

「…高海千歌ちゃん？だったかしら？彼女がスクールアイドル部を作ろうとしてるらしいわね」

「ああ。らしいな」

「でもダイヤが認めない」

「ああ」

「でも私は賛成なのよ？ということ、条件を出すことにしたの」

「条件？」

「ライブで体育館を満員にすること。そしたら部の設立を認める。ダイヤもそれで納得したわ」

「それを伝えるってことか？」

「まあそれもあるんだけど、八幡にはそのお手伝いをして欲しいの」

「は？なんで？」

「しないと退学よ？」

「え、なにそれ怖すぎ」

「…」

「…え？まじで？」

「さあ？それは自分で考える事ね！」

「…はあ、わかったわかった。よく分からんがやりますよ」

曜もやることになったらしいな。

「あら、案外早く決まったわね。やっぱりガールフレンドのため？」

「なんで知ってんだおい」

「理事長はどこからでも情報が入ってくるのでーす」

「こわ。理事長こわ」

「それじゃあ八幡、よろしくね。応援してるから！」

「はいはい」

「ちやお〜！」

「…」

鞠莉姉が理事長室をでる瞬間、一瞬だけ悪い顔をしている気がした。

「気のせい…か？」

「ふふ、面白いことになりそうっ！」

33話

「と、いうわけで俺はお前らのサポートすることになったから。なんか手伝って欲しいことがあったら言ってくれ」

「つまりマネージャーってこと？」

「そうだな」

「おお！なんか部活っぽい！」

「承認されてないけどな」

「でもなんで理事長が？」

「さあな。あいつ昔も色々企んでたし今回もなんか企んでるんじゃないか」

「…理事長と知り合いなの？」

「知り合いつていうか、ちよつと昔な」

「…女の子？」

「ん？ああ」

「…ふーん」

「どうした？」

「べつつにー？八幡にそんな仲のいい女の子がいたなんて知らなかったから」

「別にそんな仲のいいわけでもないぞ？知り合いみたいな感じだ。…もしかして嫉妬か？」

「なっ!？」

「わあ、曜ちゃん顔真っ赤」

「し、し嫉妬なわけないじゃん！バカ！アホ！八幡!」

俺はなんて可愛い彼女を持ってしまったんだろう。

「はちくん、曜ちゃん可愛いね」

「ああ。最高の彼女だ」

「だから違うってばー!」

顔真っ赤にしてそんなこと言っても、説得力ないぞ。

「はちまーん!いるー?」

「あれ?はちくん呼ばれてるよ?」

「あ?…げっ、鞠莉ねえ」

「もしかして…」

「あの人が理事長」

「そして八幡の元カノよっ!」

「おい、捏造するな」

「ま、ジョークはこのくらいにして」

「なんですか。用は」

「敬語じゃなくてもいいって言ってるのに。用っていうのはね。お昼ご飯のお誘いをしに来たのー!」

「だが断る」

「そのの2人も一緒でもいいわよ?」

「めんどく」

「ならご一緒してもいいですか?聞きたいこととかもあるので!」

「ええ!後輩とランチも良いわ!」

なんか曜から黒いオーラが出ている気が…

「あー!千歌も千歌も!」

「それで、鞠莉さん」

「なあに?」

「八幡とはいつ知り合ったんですか?」

「ああ。あれは確か小学生だったかしら。旅行に来てた八幡と偶然出会ってね。その時私友達があまりいなくてね。ひとりで退屈してた時に八幡を見つけたのよ!」

「つまり俺はおもちゃに選ばれたわけだ」

「運が良かったわね！」

「ちよつと何言ってるか分からない」

「最初は目とか怖そうに見えたけど、暇だったし声掛けたの。そしたら八幡ね……ぷつ」

「ど、どうしたんですか？」

「え、えつとね……声掛けた時、八幡、「ひゃ、ひゃい!?なんでひょうか!?!」って言ったの

よーアハハ！思い出したら面白くなってきちゃった！」

「よくそんなこと覚えてるな」

「だって好きな人のことだもの」

「……好きな人？」

「……………」

おいこの野郎。とんでもない爆弾落としやがったな。

「蜜柑美味しいー！」

高海はもうちよい空気を読め。

34話

あの後なんとか話を強制的に終わらせ、修羅場をくぐり抜けた。

そして学校も終わり、今日はどうやら歌詞作りをするそうなので俺も同行することになった。

ちなみに場所は高海の家。

家に来てきたのはいいのだが…

「…おい桜内、いつまで俺の背中に隠れてるんだ」

「だ、だって…！あ、あれなんとかしてよ！」

高海と曜は家へ入っていつてしまった。一方俺達は、桜内が原因で家に入れずにいる。

どうやら桜内は犬が苦手なようだ。

「寝てるっほいし大丈夫だ。行くぞ」

「ほ、ほんとに？ほんとのほんととよね？」

「ほんとほんと」

「ワンっ！」

期待も虚しく、桜内が目の前を通る瞬間、犬が吠えてしまった。

「ひいひいひい！」

「え、おい首引つ張るな苦し…！」

「大丈夫？八幡」

「死ぬかと思った…」

桜内に首を引きずり回されて一瞬天国が見えた気がする。

「ご、ごめんなさい…あはは」

「じゃあさっそく歌詞考えよう！」

「俺はダメージを受けたから寝」

「ないよね？」

「…はい」

くそ、そのまま終わる頃まで寝てようかと思ったのに。

曜さん、そんな怖い目で見ないで。

「どんな感じがいいんだろう？」

「まずは方向性は決めないとな。ロック系とか和風とか、恋愛ソングとか」

「んー、恋愛かあ…曜ちゃん！」

「わ、私？」

「だって曜ちゃんが一番恋愛に近いじゃん！」

「んー…まあそうだね」

おい、こつちを見るな。一緒に考えなきやいけなくなるだろ。

それで絶対恥ずかしいこと言わされて恥かくだけだ。目に見えてる。

「あれだ。お前らのデビュー曲なんだしどつちかつて言ったら今の気持ちを表現した方がいいんじゃないか？」

「というと？」

「スクールアイドルへの気持ちとかだよ」

「おー！なるほど！さすがはちくん！」

「もつと褒めろ」

「スゴイスゴイ」

なんか高海に棒読みで言われると腹立つな。

「ということで、俺はスクールアイドルへの気持ちとかは分からんから参考にならんな。

よし帰」

「つちやだめだよ？」

「痛い痛い腕痛いから曜さん」

歌詞も無事完成し、俺と曜は高海家を後にした。

「八幡かえろうとしすぎ」

そう、俺はあのあと5回ほど逃亡を試みたが無駄だった。

「お前な、女子3人と男子ひとりだぞ？精神が持たんわ」

「みんなが一生懸命考えてる時に1人で興奮してたんだー」

「待つて違うから。俺を変態扱いしないで」

「…上手くいくかな？ライブ」

「…できることをするしかない。たとえどんな結果になってもだ。後悔はない方がいい」

「…うん、そうだよね。よーし！頑張るぞー！ヨーソロー！」

「その調子だ」

「ほら八幡も！」

「は？」

「ほら早く！」

「…ヨーソロー」

「…ふっ、あはは！」
もうやだ。この子。」

35話

ついにライブの日がやってきた。結果を言えば成功だろう。色々トラブルはあったがなんとか成功できた。

さらにそれから数日後、国木田と黒澤、そして津「ヨ・ハ・ネ！」
…ヨハネが加入した。

「おい人の心を読むな」

「くつくつく…」

ちなみに今日は六人での初の練習日だ。

「比企谷先輩、改めてよろしくお願ひしますぞら！」

「お、お願ひします…！」

「まあ俺はたいしたこと普段してないから。頑張れよ」

「はいぞら！」

「みんなー！」

「遅いぞ高海、何やってたんだよ？」

「今日は練習はしません！」

「じゃあ帰っても」

「いいわけないでしょ？」

「痛い痛いわかったから関節決めないで」

曜のやついつの間後に後ろにいたんだ…

俺達は部室に連れていかれた。

部室に入ると、部屋の中が飾り付けられてたり机にはたくさんのお菓子が置いてあつた。

「今日は1年生の歓迎会をしまーす！」

「ヨーソロー！」

「なるほど。まあいいんじゃないか」

「お菓子がいっぱいずら…！」

「おい国木田、ヨダレ垂れてるから」

「じゅら」

「それじゃあ1年生の皆さん！改めて！A q o u r s へようこそ！一緒に頑張ろうね

！」

「はいずら！」

「は、はいっ！」

「ま、せいぜい足引つ張らない事ね！」

「お前はいちいち上から言うな」

「いたっ!? 痛いわね八幡! 何するのよ!」

「手が滑った」

「そ、そう…! あー! ワタシモテガスベッター!」

「いつて! 棒読みじゃねえか! 足踏みやがって…」

「ふんだっ!」

「それとね、みんな呼び方なんだけど、名前で呼んでほしいの! 先輩呼びもなしで!」

「その方が仲良くなれるだろうって千歌ちゃんが言ったの」

「じゃ、じゃあ…千歌ちゃん!」

「うんっ! さ! ルビィちゃんも!」

「…よ、曜ちゃん」

「ヨースロー!」

「はい! はちくんも!」

「…おい待てうっかかり言いそうになったじゃねえか」

「ちえ」

「俺は関係なくね?」

「はちくんも立派なA q o u r sの一員なんだから当たり前だよ！さ！梨子ちゃんのこと名前と呼んでみて！」

「……梨子」

「はいっ！あなた！」

「……あなた？」

「な、なんでもないよ！なんでもないから！あはは……」

そしてそのあと、歓迎会は大盛り上がり。ゲームも色々したりして楽しい一日となった。

「今日は楽しかったね！」

「ああ。曜もテンション高かったな」

「当たり前だよ！……でも」

「でも？」

「名前呼びはちよつと複雑かな。あ、花丸ちゃん達から呼ばれることは嬉しいよ？でも、八幡が他の子名前呼びしてるのを見ると……その……」

「……別に名前呼びになったからって何も変わらないぞ。……お、お前を好きなのは同じだ」

「…ほんとに？」

「俺そんなに軽そうに見える？」

「…じゃ、じゃあ…き、キス」

「おい待てなんでそうなる」

「嫌なんだ…」

「わ、わかつたから泣こうとするな。…ほら、顔こっち向ける」

「んっ…えへへ！」

「誰かに見られてたら恥ずか死ぬわ」

「大丈夫だつて！」

「うー、八幡さんと曜ちゃん仲良さそうに…あ！き、キスしてる！」

「ねえねえ梨子ちゃん、なんでこんなストーリーカーみたいなことしてるの？私達」

番外編 ただただ、甘い1日

「えへへ〜！はちまーん！」

さて、今日は曜がうちに来ている。いわゆるお家デートと言うやつだ。

それはまだいい。

問題は曜が家に来てからだ。

机の上に置いてあつたキャンディを食べてから曜が酔っ払ってしまった。

なんだこのベタな展開は。

それから曜がめちやくちや甘えてくる。いや可愛いけども。

俺の精神が持つかが問題。

「はちまんは私のことすき？」

「…当たり前だろ」

「そつかそつかあ！えへへ！」

恥ずか死ぬ。まじで。

「はちまん！」

「な、なんだ？」

「キスして！」

「…」

「は・や・く！」

「…わかつたよ」

「んっ…：えへへ！甘いね！」

もうこの子さつきからニコニコしすぎ。ニコニコしすぎて「にっこにっこ」言わせねえよ。「ぬあんですよ！」

おっと、変な声が入ってしまった。

「…はちまんとかうしているの好きだなあ」

「そうか？」

「まあはちまんがそばに居てくれるだけでも幸せだけどね！」

なにこの子。結婚したい。

「ならいつかプロポーズしてね？」

心を読むな。

「…なんか暑いね」

「まあ俺は恥ずかしくて暑いわ」

「んしょっ…」

「お、おいなに脱ぎ始めてんだ!？」

「ええ? だつてあついでもん」

「だからつて脱ごうとするな! 俺いるんだぞ?」

「はちまんなら気にしないよー?」

「俺が気にするんだよ…つて徐々に脱ぐな!」

「もう、わかつたよお」

「ふう…」

「…はちまんつてさ」

「ああ」

「キスとかはしてくれるけど…その先はしようとしなよね」

「ぶっ!…何言い出すんだ急に」

「女の子だつて…もつと一緒にになりたいって思つたりするんだよ?」

「…俺たちまだ高校生だろ」

「まあはちまんはヘタレだしね」

「ぐっ…いや、俺だつてそういう気持ちがないわけではないよ? うん」

「…変態」

「お前が言わせたんだろ…」

「…いつかは…ね？」

「…ま、まあいつか…な」

俺たちはなんて会話をしてるんだ。小町に聞かれてたから恥ずかしすぎて家出するぞ。

「じゃあ今はキスで我慢する！んっ…えへへ！」

「…お前もう酔っぱらってないだろ」

「酔っ払ってるよお」

「酔っ払ってるやつは自分で酔っ払ってるなんて言わねえよ」

「だって酔っ払ってることにもしないと恥ずかしくて甘えられないもん…」

「…まあたまには甘えることも必要だぞ。スクールアイドルのこととかだって例え楽しくたって大変なことだってあるからな。俺にくらい甘えろ」

「…うん。そうする。…抱きしめて？」

「いきなりかよ…ほら」

「えへへ、あったかい。…ずっと一緒に居てね？」

「…ああ」

番外編 愛してる

これはとある休日のちよつとした小話。
まあ俺にとつてはそこそこ印象的だったが。

この日は曜がうちに遊びに来ていた。

ちなみに両親と小町は買い物に行っている。

「相変わらず本たくさんあるねー」

「結構俺のうち来るけど楽しいか？いつも適当に話したりして終わってるだけだし」

「んー？楽しいよ？八幡といるだけで」

「…そ、そうか」

「あ、照れた〜」

曜はからかうように頬をツンツンつついてくる。

「あー！そうだ！ゲームしようよ！」

「ゲーム？」

「そう！愛してるゲーム！」

「…嫌だ」

「えー？」

もう名前聞いた瞬間俺が恥かくのが目に見えている。

というか普通に恥ずかしいから。

「じゃあ勝った方が負けた方になにかいうことを聞かせられる！ってのはどう？」

「その勝負乗った」

「急にやる気になったね…？」

あれだろ？つまり曜にあんなことやこんな事ができる訳ですよ。

これは八幡頑張っちゃう。

「じゃあまずは私から！……愛してるよ！」

「…もう一回」

「愛してるー！」

「もう一回」

これは案外耐えられそうだ。

まあゲームだし曜もふざけてるっぼいし。

と、思ったのも束の間、曜は突然俯き……顔を上げ、頬を赤く染め、

上目遣いで…

「八幡……あ、愛してる」

「ぐっはあ!!」

一発KOノックアウト。

今のはやばい。なんか心にくるものがあった。

「やったあ……あはは、でもやっぱり最後のはちよつと恥ずかしいや……えへへ」

いや、もう最後のほんとやばい。

愛してるゲームいいね。曜の気持ちを再確認できました。

「じゃあ次八幡ね!このまま私の勝ちだよ!」

「そう簡単に負けんぞ……曜、愛してる」

「もう一回!」

「愛してる」

「もう一回っ」

あかん、このままではダメなやつだ。曜のやつめっちゃニコニコして余裕そうだな。
ん。

「…曜、ちよつとそこの壁に立ってくれ」

「え?うん……これでいい?」

曜が壁際に立ったと同時に、俺は壁に思い切り手をつけ、もう片方の手で曜のあごを

上げ、顔をあと数センチでキスしそうなところまで近づけて…

「…曜…愛してる」

「…:…きゆう…」

「…曜?おーい曜さーん」

目の前で手を振ってもなんの反応もなし。

「…ちよつとやりすぎたか?」

結局曜は気絶していた。

仕方なく俺のベッドに運んで今は起きるのを待っている。

「んう…:…はち…:…まん?」

「起きたか」

「あれ…:…私…:…」

「まああれは引き分けってことで」

「…:…八幡あれはずるい」

「なんでだよ」

「…:…あれは私の負けだね。八幡の勝ちでいいよ」

「いやでも俺も照れちまったし」

「そこは照れの差で私の負けだよ。気絶しちゃったし。八幡は何して欲しい？」
「んー……」

なんか腑に落ちないが……まあ貰えるものは貰っておく主義だし……

「……じゃあ……今度デートしてくれ」

曜は予想もしていないことを言われたからか、目を大きく見開いている。

「……うんっ！」

そのあと俺たちはデートの計画で話を盛り上げた。

36話

「大変だよー!!!」

「朝っぱらからうるさいな。どうした高海」

「浦の星が無くなっちゃう!!!」

話を聞くと、どうやら生徒の減少で浦の星が統廃合になるのだとか。

「でもまるでμ・sみたい！私達も廃校を救おう！あとはちくん！高海じゃなくて千歌
!!」

「はいはい」

俺は適当に千歌をあしらう。

「でも千歌ちゃん、どうするの？」

「……あはは、どうしよう」

まあ……いつのころのことだからこんな事だろうとは思いましたよ。

「曜ちゃん！なにか案を！」

人頼みかよ。

「んー、生徒を増やすんでしょ？ならこの学校のことをたくさん知ってもらう必要があるってことだよね？」

「たくさんの人に……そうだ！p vだよp v！」

「p v？」

「そう！沼津の良いところをp vでたくさんを知ってもらおうの！」

千歌にはいい案だな。あのアホな千歌にしては。

「…はちくん、なんか失礼な事考えてない？」

「か、考えてないじよ」

なんだ、心を読まれた!?おかげで嘔んでしまった。

恥ずかしい。

「おお！グッドアイディアだよ！千歌ちゃん！」

「だよねだよね！よーし！早速やってみよう！」

と、いうことでさっそく行動に移したA q o u r s

「見てください！この綺麗な海！みかんもたくさん！あとは…特にありません！」

「お前はあほか」

「あいたつ!?いたいよはちくん！」

「なんだ特に何もありませんって。良いところ伝える気あるのか」

「それならはちくんやってよ!」

「嫌だ。めんどくさい。やる気ない」

「断りのオンパレードだ!」

曜さんや、逆に俺がPVに出てたら人気下がると思います。

なんか自分で言ってる悲しい。

「よし!次はルビィちゃん達だ!」

「びぎい!」

そのあと1年生の方も上手いかずpv撮影は難航していた。

善子に限ってはもうアレだ。うん。言わなくてもわかるよね?

なんとか無理やり完成させたものを鞠莉姉、もとい理事長にみせにいくとめっちゃバ

カにされて酷評された。

ついでに何故か俺の目まで酷評された。訳分からん。

「…八幡、Aqoursでの活動は楽しい?」

部屋を出ようとする、そんなことを聞いてくる鞠莉姉。

「……まあつまらなくはないぞ」

「…ふふつ、そう。相変わらず捻でれね!」

「なんだその言葉」

「私が考えたの！八幡にびったりでしょ？」

「ぜひとも使わないでいただきたい」

そして鞠莉ねえは真剣な表情に変わったかと思いきやとびきりの笑顔でこう言う。

「……頼りにしてるわよっ、八幡！」

「……裏切らないようにするわ」

37話

驚き桃の木山椒の木。

先日作ったpv（鞠莉姉に見せたあとに作り直したやつ）がなんと人気となり、a q
Oursのスクールアイドルランキングが99位までの急上昇を遂げていた。

そして俺たちは現在理事長室にいる。

「東京？」

「そうですすっ！東京で開かれるTokyo school IDOL WORLDに
招待されました！」

「嘘…!!!」

東京でのライブが決定した俺たち。

高海家で待ち合わせをしている。

「お兄ちゃん、忘れ物ない？」

「おう。まあ俺ついて行く意味がよく分からんがな」

また雑用かなにかだろうけど。

「あはは、そうだった。お土産よろしくね！」

「ああ」

さて、向かいますか。

「あ！八幡！」

扉を開けると、家の前で曜が敬礼しながら立っていた。

「ん？曜。千歌の家集合だろ？」

「んー、そうなんだけど…八幡と一緒にきたかったからじゃダメ？」

…おいおい、可愛い事言ってくれるなうちの彼女は。

「…じゃあ行くか」

「ヨースロー！」

東京か…行ったのは小さい頃くらいだな…

芸能人とかに会えるものなのだろうか。考えが安直か。

「いやー、ほんとに驚きだよね！私たちが東京のライブに招待されるなんて！」

「それだけ実力があるってことだろ？誇っていいんじゃないか？」

「そうなのかな？」

「ポジティブに行こうぜ」

「ネガティブ思考の八幡にそんなこと言われるとは思わなかった…」

俺超ポジティブだから。

掃除の時間、俺だけ一人でやってた時とか、みんな俺とやるのが恥ずかしいんだなと思ってたから。え？サボられただけ？うるせえ。

「あー！梨子ちゃんー！」

千歌の家に到着すると、梨子が既にいた。

「あ、曜ちゃんに八幡くん。おはよう」

「ヨーソーロー！」

「うっす。他はまだか？」

「千歌ちゃんはまだもうすぐ来るみたいだけど…」

「おはよー！」

噂をすればなんとやら。家から出てきた千歌。

「おう…っておい」

おいおいおいマジか。なんだその格好は。

「東京ってこういうのがオシャレなんだよね!？」

こいつ東京をなんだと思ってるんだ。なに？魔界の巣窟かなにか？

どうやったたらそんな仰々しい格好になるんだ。というかそんな服よく持ってたな。

「おい千歌、着替えろ。さすがに俺でも擁護できん格好だ」

「ええっ!？」

というか家族の人に何も言われなかったのか。

…いや、わざと言わなかったな。家の中からくすくす笑ってるし。

「お待たせしました!」

後ろから聞き覚えのある声が。1年生組の到着か。

「おう……………まじか」

「ど、どうですか?変じゃありませんか?」

「こ、これで東京の険しい谷も大丈夫ずらか?」

なに、田舎の人達は東京にどんな想像抱いてるの?

ルビイはなんか千歌とおんなじような格好。でも可愛い。

ガンバルルビイしたい。

一方花丸はまるで探検家かなにか。お前は何をしに行くんだ東京に。

「なあ、俺不安になってきた」

「あ、あはは…」

「私も…」

曜は苦笑い。梨子も同じ気持ちのようだ。
ちなみに言わずもがな善子は案の定の格好でした。言わせるな。

38話

行き先不安の中、とりあえず出発した俺たち。

今は電車の中だ。

「あー！またジョーカー！」

「おい千歌、お前言ったら意味無いだろ」

ポーカーフェイスという言葉を知らないのだろうかこの子は。

「あ！私あがり！」

そんなことを思っていると曜が上がったようだ。

「えー!?曜ちゃん早すぎだよお！」

「あとは俺と千歌とルビイか。よし行くぞ千歌。…これか？」

「あ、あー！それはジョーカーだよ！」

「じゃあこつち…」

「あー！それそれ！それ違うから引いた方がいい！うん！絶対」

「じゃあ最初の方で」

「うわああ！なんでえ!？」

隠す気ゼロだろ。バレバレ。

「じゃあルビイ引いていいぞ」

「は、はい……えいつ……あ！揃った！」

「ルビイちゃんやつたぞらね！」

「うゆー！」

あー可愛い。癒される。妹にしたい。

まあ妹は小町がいるから充分だけど。

「…八幡、目が変態だよ」

曜さんや、目が変態ってなんだ。ジト目でこつち見るな。

なんかそそられるから。

「くそー！はちくんには負けないからね！」

「俺もお前にだけは負ける気はしないがな」

俺のポーカーフェイス、見せてやろう。

「はちくんなんて嫌いだー！」

結果俺の勝ち。

「あはは、千歌ちゃん残念だったね」

「なんでピンポイントでジョーカー引かないの!？」

「お前が下手くそなんだよ。ほら罰ゲームやれよ」

「ううっ………わ、我が名はリトルデーモンちかつち……」

「ちよつと!!なんでこれが罰ゲームなのよ!」

怒るなヨハネ（笑）。痛い痛い腹を抓るな。

「ほら、みんな、もうすぐ着くわよ?」

「人がいっぱい!」

「未来ずらあー!!」

個人個人いろんな反応をしている。

花丸に関しては……うん。ノーコメントで。

おいヨハネ、公衆の前前でやるな。変な目で見られてるから。

「……梨子はさすがに冷静だな」

「私はここに住んでたから……八幡くんも冷静だね?みんながあんな感じだから八幡くんもどうなるかなって期待したんだけど……」

なんだ、俺が未来ずらあ!とか言うと思ったのか?

「まあ東京は小さい頃とかに来たことあるしな……」

「八幡ー!荷物持ってー」

「曜、それくらい自分で持て。俺のどこに持つ場所が残ってるんだ」
「首？」

お前は俺を殺す気か。

「よし！ライブ前だしやっぱりあそこに行こう！」

「あそこ？」

「そう！μ'sが練習していた場所！」

やって来ました神田明神。

ここがμ'sが練習していた場所の一つか…

「お祈りしてこうよー！」

千歌がそういうので上へ上がっていくと…二人の美少女がいた。

あの二人って確か…

「……Saint snow」

39話

s a i n t s n o w : 確か前に動画で見た気がする。

姉妹ユニットだったかな。

「…あ、こんにちは」

「こ、こんにちは！」

「あなたたちは…もしかしてa q o u r sの皆さんですか？」

「知ってるんですか!？」

「ええ。今度のライブにも参加されますよね？お互い頑張りましょう」

お姉さんだろうか。冷静で礼儀正しい人だ。

その時、もう1人の方がものすごいテクニカルな技を繰り出す。

なにあれ？バク転？宙返り？側転？

「すっごーい…」

「ふんっ」

うわ、すごいドヤ顔…

「…あなたが比企谷八幡さんですね？」

「え？あ、ああそうだが…」

「噂通り特徴的な目をさけていますね」

「何この子、眩しに来たの？とかじつと見つめられると恥ずかしいんだが…」

「…私は好きですよあなたの目」

「お、おう…ありがとう？」

「……行きましょうか、理亜」

「はい、お姉様。…ぷっ」

え、あれ、なんか今笑われた。この目を見て。なんだ？喧嘩売ってんのか？あ？買う

ぞ？

「は、八幡落ち着いて」

まあおねえ様に免じて許してやろう。うん。

そして、ライブ当日がやってきた。

ライブは予想以上の成功と言えた。みんな緊張はしていたがミスもなく、踊りきつたのだ。

そう、全力を出し切った。

「……0人？」

しかし結果は投票数0人。誰もいれてはいなかった。

スクールアイドルは甘くなかったのだ。

「……0」

各々信じられない表情をする。俺もそのひとりだ。

こいつらの頑張りを知っているつもりだ。近くで見えていたから。

なので尚更この結果は辛い。

「……みんな、とりあえず帰ろう」

電車の中、俺たちはほぼ一言も話さなかった。

ルビィや花丸たちは悔しさから涙を流し、曜や梨子はしたを俯いて暗い顔をしている。
千歌も上の空だ。

俺はこんな時かける言葉がわからない。もっと人と関わっていたらなにか違っていったかもしれない。

「……」

「ライブは…遊びじゃない！」

帰り際、s a i n t s n o wの妹が言っていた一言。s a i n t s n o wも圧巻の演技だったが、入賞すらしていなかった。

「…そう甘くはない…か」

そして沼津に到着すると、生徒会長が待っていた。

実は生徒会長は東京のライブへの参加を反対していた。

「…そう、でしたか」

結果を伝え、頷く。表情にはまるで予想していたかのような顔だ。

「……こうなることは予想していたのです」

「だから止めたんですか」

「……ええ。知っていますか？ラブライブの出場者数は7236。第1回大会の約10倍ですわ。aquorsはその中のひとつでしかない。私たちが歌えなかったのも、あなた達が入賞できなかったのも、仕方ないことでしたわ」

仕方ない……それで片付けていいほど、今のこいつらの気持ちは簡単じゃない。きっとそれはこの人も分かっているのだろう。

それでもそう言うしかないのかもしれない。

「……」

「……」

曜と家へ帰る。珍しく曜も何も話さない。

「……千歌ちゃんね」

「……ああ」

「普段、感情を表に出すタイプだから……知ってる？まだ千歌ちゃん弱音はいてないの」

「…そうだな」

きつとあいつだつて悔しいに決まってる。けど涙ひとつ、弱音ひとつはいてない。

「…でもお前もだろ」

「…え？」

「…お前も泣いてもいいんだぞ」

「…は…ちまん」

「…俺しかいないしな」

「…じゃあ…ちよつとだけ背中貸して…？」

「…落ち着いたか？」

「…うんっ！ありがと！行こっか！千歌ちゃんのところへ！」

結果は0。でもそれはスタートでもある。それ以下はない。

俺たちはまた新たな一歩を踏み出せばいい。

40話

「曜ちゃん頑張れー!」

今日は曜の水泳の大会の応援に千歌と共に来ている。

観客も中々の数だ。

「ほらはちくんも応援して!」

「……頑張れ」

「声が小さいよ!?!もつと大きな声で」

「始まる前に言つたしいいだろ」

普段声出さないから妙に恥ずかしいし。

それよりも俺はあることを考えていた。それは、曜と大会が始まる前に話していたこと……

「八幡!もし大会で優勝したらご褒美欲しい!」

「ご褒美?高いものとかは無理だぞ」

「物じゃなくていいよ。んー……今は思いつかないや！八幡が考えておいて！」

「……まあ分かった。考えとく」

「うんっ！それじゃあ行つてくるね！」

「おう……無理しない程度に頑張れ」

「ヨーソーロー！」

「と言つても特に思いつかないんだけどな……」

「はちくん始まったよ！」

曜の本来得意なのは飛び込みだが、今回は泳ぎの大会だ。

それにしても曜は速い。どんどんライバルを追い抜いていく。

「あ！曜ちゃん1位だ！やったあ！」

「八幡く！千歌ちゃんー！」

曜がこちらに向かつて手を振る。俺達もそれに呼応するように手を振り返す。

「やったねはちくん！」

「おう」

「いやあ、すごかったよ曜ちゃん！」

「えへへ、ありがとう！」

曜と千歌が楽しく話しているのを後ろからついていく。

「それじゃあまたね！曜ちゃん、はちくん！」

「またね！」

「おう」

先に千歌と別れ、再び俺と曜は歩き出す。

「ご褒美、考えてくれた？」

「考えたけど思いつかなかった。なにかして欲しいこととかないのか？」

「して欲しいことか……そうだ！」

「ちゃんと捕まれよ？」

「うんっ！」

「……あんまり抱きつかれても恥ずかしいんだが」

「落ちないためだよ！仕方ない仕方ない！」

曜の思いついたご褒美、それは俺と二人乗りをすることだった。

「この前小町ちゃんと二人乗りしてるの見て羨ましいなあと思って！」

「こんなの別に！ご褒美じゃなくてもやるぞ？」

「いいの！なんか特別感あるし！」

「曜がいいならいいが……じゃあ走るぞ」

「うん！」

バランスを崩さないようにゆっくりと走り出す。

「風気持ちはいいね！」

「そうだな」

「もうちよつとはやくして！」

「帰宅部にそんなこと要求するなよ……」

そう言いつつも力いっぱい漕ぐ。多少はスピードも上がっているだろう。

「八幡く！」

「なんだー？」

「好きく!!」

「……なんだつてー？」

「大好きく!!」

「聞こえないーい」

聞こえてるが恥ずかしくて思わず聞こえないふりをする。

大きな声で言うんじゃありません。

「八幡はく？」

「……好きだぞ」

「聞こえなーい！」

「……好きだ！」

「えへへ〜！」

俺の返答に満足したのかさらに抱きつく力が強くなる。

俺達も随分立派なバカツプルになったな。

でもそんな生活も悪くない。

41話

「みんな！ニュースニュース！」

「どうしたの？千歌ちゃん」

静かな部室内に、千歌の大きな声が響き渡る。

「実はね！沼津で今度ある祭りで私たちにライブをして欲しいって！」

「ほんとっ!？」

「うんっ！」

「出演するってことか？」

「もちろん！私たちはまだ走り始めたばかりだもん！」

「……そうか。まあ無理すんなよ」

「へへ、ありがとはちくん」

「……別に」

あれ、なんか恥ずかしい。

「……いてえな、曜」

「誰これ構わず鼻の下伸ばしてる八幡が悪いでしょっ」

「曜ちゃん嫉妬してる〜！」

「し、してない！」

曜つて頑なに嫉妬してることを認めようとしないうな。

まあ毎回頬染めて怒って可愛いからいいけどよ。

「とにかく、ライブに向けて頑張ろう！」

と、意気込んだは言いものの、なにか問題が発生したようだ。

「で、曜、今この状況の説明を頼む」

部室に行くと、a q o u r s メンバーの他に松浦、生徒会長、鞠莉姉もいた。

「実は果南ちゃん達もスクールアイドルに勧誘してるんだけど頑なに断られていてね」

「別に無理にやらせる必要は無いんじゃないか？」

「本当に嫌なら、ね」

「鞠莉姉？」

「ルビイちゃん達を目撃情報では、神社で踊っていたそうです」

「ほう」

「曜！いちいち言わなくていいから！」

「また赤くなってるー！」

「なってるない！とにかく、私はやらないから！」

「鞠莉さんも、千歌ちゃんもなにか理由があるんじゃないかって」

理由ねえ……

というかヨハネのやつはいつまであのポーズとつているのだろうか。

静止したま動かないし。出番がないからそうしてるのか。

「…八幡、あんた今失礼なこと考えなかった？」

「素が出てるぞヨハネ」

「はっ！……ふふふ」

いや、そんな謎の笑みを浮かべられても。

「……ダイヤさん、何か知ってるんじゃないやありませんか？」

松浦が話さない以上、残りの頼りは生徒会長だけ。

そしてこの顔。梨子の質問からかなり動揺を見せている。黒だな。黒澤だけに。

「八幡つまらないよそれ」

「曜さん、心を読まないで」

「……ちっ！」

直後、生徒会長は素早く部室を出て逃げ出す。しかしそれも虚しく……

「ヨハネちゃん！」

「ぴぎやあああ！」

ヨハネの手によつてあつけなく捕まった。

というか叫び声……姉妹だなやはり。

場所は変わつて生徒会長の家。事情を聞くと、鞠莉姉のことを想つての行動だったよ
うだ。

鞠莉姉も話を聞いて迷わず家を飛び出していった。

「まあこれはあの二人に任せるしかないな。それで、生徒会長はどうするんすか？」

「わ、わたくしですか？」

「やりたいんでしょ？ スクールアイドル」

「ダイヤさん！ a q o u r s にはダイヤさんも必要なんです！」

「……わたくしは」

「……ルビイ、あとは任せた」

「八幡さん……お姉ちゃん！」

「ルビイ……」

「私、お姉ちゃんとやりたい！一緒に踊って、歌ってみたい！」

「……わ、わたくしが入ったら練習は厳しくしますわよ？」

おっとそれは勘弁。スクールアイドルでもないのに付き合わされるこちらの身にもなって欲しい。

「八幡水ささないで」

「悲報、彼女が辛辣」

「お姉ちゃん……ようこそ！ a q o u r s へ！」

こうして、松浦、生徒会長、鞠莉姉を加え a q o u r s はさらなる進化を遂げた。

そしてライブ当日。

「はっちまーん！どう？似合ってる？」

「似合ってる似合ってる」

「あ、比企谷くん」

「…なんすか？」

「a q u o u r s のみんなのこと、名前で呼んでるんだよね？なら私達も名前で呼んでね？八幡」

「…まあ分かった。果南」

「あれ、前はあるなに恥ずかしがってたのに」

「慣れた」

「八幡！私も！」

「鞠莉姉はそのままでも」

「No！お姉ちゃんはまだ卒業デース！」

「…鞠莉」

「はっちまーん！」

「だあ！抱きつくな！」

「…八幡にはお仕置きが必要だね」

「曜ちゃん怖いよ…」

千歌、そう思うなら止めてくれ。

「ねえ知ってる？ 私たち3人の時も a q o u r s って名前だったんだよ？」

「そうなの？」

「誰が考えたんだ？」

「ふふっ、秘密。まあでも、今この状況は誰かさんにまんまとはめられたから、かもね」
「鞠莉か？」

「少なくとも、私じゃないわね」

「わ、わたくしでもありませんわよ」

3年生組を見れば1発だった。1人だけ口元にあるホクロを触りながら動揺を見せている彼女。

「……可愛いところあるんですね、生徒会長」

「なっ!? は、八幡さんわたくしではないと」

「ほらもう始まるよ！」

この9人の a q o u r s なら、きつとどここまでも行ける気がする。

「八幡！」

「曜？」

「a q o u r s は9人だけじゃないよ！ね！千歌ちゃん！」

「うんっ！はちくんも、フアンの人みんなが a q o u r s の一員！」

「…ふっ、そうだな」

なんだよ。こいつら立派にスクールアイドルやってるじゃねえか。

「1!」

「2!」

「3!」

「4!」

「5!」

「6!」

「7!」

「8!」

「9!」

「…:10」

「a q o u r s ! サ ン シ ャ イ ン !!」

4 2 話

さて、俺比企谷八幡は現在どこにいるでしょうか。

「北海道はでつかいどう……なんて」

正解は北海道。

まあ何故ここにいいのかと聞かれると回答に困るが、*s a i n t* *s n o w*のお家に

何故か招待されました。

ほんとどうということ。

こんなこと言ったらあらぬ誤解を受けそうなので曜達には言っていない。幸い休日だからな。

「地図ではこの辺りのはずだが……」

そもそも何故呼ばれたのだろうか。

というか何故俺の連絡先を知っている。昨日いきなりメール来たから驚いたわ。

「……ここか。すみませーん」

「はーい……あ！比企谷さん！」

「……どうも」

出迎えてくれたのは姉の方。鹿角聖良さんだったかな。

「わざわざ来てくださってありがとうございます。遠慮せずに上がってください」

「……お邪魔します」

家にあけてもらおうと廊下を歩いているだけなのにわずかに女の子の甘い香りがする。

「姉様、誰か来てるの？……えっ!？」

「理亞、ちょうど良かった。あなたも挨拶しなさい」

「確か a q o u r s の！なんでここに!？」

「私と呼んだの」

「姉様が!？大丈夫!？具合でも悪いの!？」

おいなんだこいつは……俺がここに来るのそんなにおかしいか。

おかしいな。うん。

「改めまして、s a i n t s n o w こと、鹿角聖良です」

「……鹿角理亞」

「比企谷八幡です……それで何故俺がここに?」

「……理由は2つあります。1つは……比企谷さんは、どうして a q o u r s のマネー

ジャーを?」

「……まあ一番は彼女が所属してますからね。応援したいと思うものなんじゃないですか。あとは……あいつらなら……俺が言う言葉じゃないですけど、輝ける、そんな気がしたんで」

「……そうですか。信頼されてるんですね」

「まあ馬鹿なヤツとかすぐに暴走する上級生とか天使のような義妹もいますけど、いい奴らだと思いますよ」

「ちよつと今のはよく分かりませんでしたけど……」

「それで、あと一つは？」

「……今から言うことは、冗談ではありませんからね？本気です」

「はあ」

「比企谷さんに彼女がいることは重々承知です。さらに言えば私なんかほとんど関連性がないから可能性も薄いつてことも。それでも言葉にしておきたいんです」

「な、なんですか」

「……比企谷八幡さん、あなたのことが好きです」

「………ほう？俺の聞き間違いかな。」

「完全に一目惚れでした。吸い込まれるようなその目！すべてを見透かしているかのような……とても魅力的でした」

おお、俺の目がべた褒めされているぞ。どうなってるんだ。

「恋人になってほしいとは言いません。いきなりこんなことを言われてお困りだと思います。でも伝えておきたかったんです」

「ね、ねね姉様……」

ほら、妹さんもかなり動揺してるじゃないですか。

「おおお落ち着け鹿角妹」

「あ、ああんたが落ち着きなさいよ！あと理亞！」

俺もかなり動揺していたようだ。

「すみません、わざわざ来ていただいてこんなことを……」

「……いえ、本気で言っているのは顔を見れば分かるんで……まあ好意を素直に向けられて嫌な気はしないので安心してください」

「ほ、ほんとうですか？」

「ええ。でも、俺なんかよりもっといい人がいますよ。一目惚れなんですよね？きつと俺のこと知ったら嫌いになりますよ」

まあ俺の周りは何故か俺のこと逆に信頼してそうだけど。

「……随分と評価が低いんですね」

「まあろくな人生送ってきてないので」

今がまさにピークかもしれない。

「……分かりました。では八幡さん、今からデートしましょう！」
「……は？」

この時俺は彼女の言葉が理解出来なかった。

43話

「すみません、理亜まで結局……」

鹿角姉による爆弾発言から1時間後、本当に俺はデートに連れ出された。

「いや俺はいいですけど……」

「ふんっ、姉様に変なことしないか見張る必要がある」

「しねえよ。俺彼女いるって言つたら」

「八幡は浮気しそうな顔してる」

「おまつ……はあ、別に本当に何もする気ないから見張つてもいいけどよ」

「こら理亜！八幡さんに失礼な事言わないの！」

「……あ、あの」

「はい？」

「いや、なんで呼び方変わってるのかなあ……と」

「……ダメでしたか？」

「そ、そういうわけでは……」

最初は比企谷さんだったのに名前呼びに変えるとか俺からしたら地味に痛いぞ。

妹の方はまあそんな気がしたからなんとも思わなかったが。

「八幡さんも私のことは聖良と呼んでもらって構いませんから。あと敬語もなしです」

「いやそれは」

「……」

「……わかりまし……わかった」

「はい！それでは行きましょう！」

どうして俺は女子にこんなに弱いのだろうか。

「八幡さんは北海道は来たことありますか？」

「あー初めてだな。言ってみたいとは思ったことあるが遠いしな」

「なら案内のしがいがありますね。今日は函館の魅力をたくさん教えてあげます」

「お、おう」

なんか目が燃えていらっしやる。妹の方は「姉様……かつこいいい！」とか言ってるし。

重度のシスコンである模様。

「……理亜って言ってるでしょ」

「地の文読むな」

「とにかく！鹿角妹とか妹の方はとかやめて！ちゃんと理亜って呼んで！」

「わかったわかった。そう怒るなよ理亜」

「つ……あ、頭撫でないでよ！」

「はいはい」

「っっ！」

「これはなにかに目覚めそうだ。理亜の恥ずかしそうな顔が俺の中の悪戯心をくすぐる。」

「八幡さん、私も撫でてください」

「……無理です」

「嫌とは言わないんですね。ではお願いします」

「いやだから」

「お・ね・が・い・し・ま・す」

「……はあ、これでいいか」

「はいっ」

俺は昼間から道の真ん中で何やってんだ。周りからチラチラ見られるし。

「八幡さん、これからずっとこのまままでお願いします」

「いやさすがに無理」

「美味しかったな」

「お口にあつて良かったです。あそこは私たち行きつけの海鮮丼屋さんですよ」

「鮭も蟹も美味かった。さすが北海道だな」

「八幡さんは今日はいつ帰られるんですか？」

「んー……あと23時間つてところだな」

「そうですか……」

いやそんな名残惜しそうな顔しないでもらえますかね。帰れなくなっちゃうから帰るけど。

「じゃあ最後に行きたい場所があるんです」

「いいぞ」

聖良についていった俺達がついたのは高台。綺麗な夕焼けが目の前に広がっていた。

「へえ……こりやすこい」

「夜は星空が綺麗なんですよ。昔遊んでた時に偶然見つけたんです。ここは私と理亜しか知らない場所」

「いいのか？そんな大事な場所俺なんか」

「あなただからこそです。私達だけの秘密ですよ？」

「お、おう」

「今日はありがとな」

「いえ、また機会があれば遊びに来てください」

「理亜もありがとな」

「別に……頭撫でるな！」

「そう言っても逃げないあたり嫌じゃないんだろ？ソースは小町」

「うう……っ！」

「じゃ、行くわ」

「はい。あ、八幡さん」

「ん？なん……だ」

聖良に呼ばれ振り向くと……頬に柔らかい感触が伝わる。

「ね、ねね姉様!?!」

「唇は私も恥ずかしいので……曜さんにも悪いですし。今日来てくださったお礼です」

「は、はは八幡！」

「お、おおお落ち着け！俺は悪くない！」

「あんたが落ち着きなさいよ！」

「ほらほら、飛行機が行ってしまいますよ？」

「誰のせいだ誰の……また会おうな」

「はい」

「……またね」

こうして俺の短い北海道旅行は終わりを告げた。

……お土産忘れた。

番外編 プロポーズ

「ねえ八幡」

「ん？」

「明日どうする？」

「明日？……なんかあったか？」

「……」

「怖い怖い、無言で睨みつけるな……毎年やる必要あるか？」

「あるよ！」

「ほら、逆にありがたみが無くならないか？」

「無くならない！」

明日は曜との交際記念日だ。毎年どこかに出かけたりしている。

あれだよな、クリスマスだからリア充共がいちやいちやしててうざい。

(……やっぱり毎年同じことばかりだと八幡も慣れてきちゃってるのかな。一緒に出かけは嬉しいけど……)

「ま、とりあえず店探しとくわ」

「う、うん」

「……ちよつと俺出かけてくる」

「どこ行くの？」

「あー……ちよつとな」

「ちよつとつて？」

「お、お花を摘みに？」

「それ男の人が言うセリフじゃないし」

「と、とにかく行つてくる。少ししたら帰つてくる」

「あつ、ちよ」

ふう……さすがに行き場所は言えんな。言つたら台無しだ。

「……すみません、この前頼んだ……」

「おい起きろ」

「んー……」

「寝ぼけて抱きつくな」

「八幡抱き心地いいもん……」

「お前の抱き枕になった覚えはない」

「いたっ！……もうっ……おはよう」

「おはようさん。……曜、今日なんの日だ？」

「昨日言ったじゃん……8周年でしょ？あとクリスマス……」

曜はまだ眠たそうに目を擦りながら答える。

「違うな」

「……え？何かほかにあったっけ？何かの発売日とか？」

「……0周年」

「え？」

俺はポケットから昨日受け取ってきた指輪を取り出す。

「……頼りないし目も腐ってるし甲斐性もないが……俺でもいいか？」

「……へ？へ？」

曜はまだ理解が追いつかない様子だ。結構恥ずかしいから早くしてくれませんかね
心臓ばくばく。

「……っ、つまり？」

「……結婚してくれ」

「……」

「お、おい曜?」

「ばかーっ!!」

「うおっ!? な、なんだよ?」

「い、いきなりだよ! いきなりすぎだよ! ムードもへつたくれもないよ! 起きていきなりなんて!」

「いやむしろムードいい時なんて緊張しすぎてプロポーズできん。……返事聞いてもいいか?」

「……わ、私でいいの?」

「いや今更だろ」

「だ、だって! 可愛げないし嫉妬ばかりするし、あとあと……」

「俺はお前しかいない」

「うう……も、もうほんとに離れなくなるよ私。ずっと一緒なんだよ?」

「離す気ないから安心しろ」

「……ふ、不束者ですがよろしくお願いします」

「おう」

「……ね、ぎゅーっしていい?」

「いやもうしてるじゃねえか」

「うん……八幡」

「なんだよ」

「……好き」

「おう」

「大好き」

「おう」

「愛してる」

「お、おう」

「……八幡も言っつてよ」

「恥ずかしいわ」

「夜は言ってくれるのに……」

「生々しいなおい」

「……よしっ！私用意するね！今日はどこ行こっか!？」

「急にテンション高くなつたな……まあ適当に回ろうぜ」

「そうだね。のんびりの方が私たちがらしいかも」

「……あ、あと曜、正月実家集まりいくか？」

「行く！小町ちゃんにも会いたいし！」

「わかった伝えとく。あと俺も愛してるぞ」

「……あれ？八幡今なんて言った？ねえ！」

「さあな」

「ねえってばー！」

44話

現在俺はまさに閻魔大王に天国へ行くか地獄へ行くかを決められる寸前かのような状況に陥っていた。

まあ八割地獄行き確定だけだな。閻魔様激おこぷんぷん丸だし。

「それで八幡、内緒で聖良さんたちのところに会いに行つたってほんと?」

「しょ、招待されてな」

「ふーん……それで、楽しかった?」

「まあ北海道そう行かないし楽しかった」

「そういうことを聞いてるんじゃないんだよ?分かるよね?」

「は、はひつ……いい、いや、あいつらとはほんと何にもないぞ。うん」

いやまあ告白されたり帰り際にキスされたり色々ありましたけどね。

言ったら殺される。

「八幡って嘘つく時アホ毛が左右に動くんだよ」

「え、俺のアホ毛にそんな機能あったの?一生嘘つけねえじゃん」

「やっぱり嘘なんだ」

「…………い、いやまあ色々あったようなないような」

「海のと真ん中に投げ捨てるよ?」

「怖いやめてお願いします殺さないで」

正直に言わないとマジで殺されかねないので全てを話した。

「…………そ、それで、告白されてどうしたの?」

「いやどうしたのって…………別に付き合ってたって言われたわけじゃないしな。向こうも俺達が付合合ってるの知ってるし。ただ気持ちも伝えたかったそうさ」

「それで八幡はニヤニヤ鼻の下伸ばして北海道を聖良さん達と楽しんだと」

「いや、ニヤニヤ鼻の下伸ばしてないから。…………まあとにかくお前か怒るようなことは何も」

「そっか…………じゃあこの写真は?」

「写真…………っ?!」

曜が見せてきた写真。それは俺の頬に聖良がキスしているあのシーンだった。あのシスコン妹いつの間に撮りやがった。

「…………八幡の浮気者」

「うぐつ、いや、これは俺が頼んだんじゃないし…………」

「言い訳は聞きたくないよ！一緒に過ごして好きになったんでしょ！聖良さん、私なんかより大人っぽくて美人だし、歌も踊りもうまいし……」

出ました曜のネガティブタイム。怒ってるのかと思えば結局最後は私なんか……つてなるんだよな。

「……確かにあの人は美人だしいい人だった」

「やっぱり……！」

「でも、俺はお前の方が何倍も可愛い。料理だって俺好みの味にしよう頑張ってくれろし、俺のささいな我儘も聞いてくれる。お前ほど俺に尽くしてくれる人なんてそういない。むしろお前しかいないまである。……まあ、だからあんま自分を過小評価するな。俺はお前が好きなんだ」

「う、うん……な、なんか恥ずかしい」

「いや、言ってる俺が一番恥ずかしいから」

「……でも、最後のは八幡には言われたくないなあ。過小評価してるの八幡でしょ？」
「そんなことは無い。俺は自分のことを正當に評価してるぞ」

「……八幡は普段はひねくれてるけど、時々デレてくれるの可愛いし、さらつと歩幅合わせてくれたり荷物持ってくれたりあざといって思うくらい優しい時あるし、めんどくさいとか言いながらも私の話にも付き合ってくれる。八幡ほど私に尽くしてくれる

人いないよ」

「……んだよいきなり。彼氏ならそんなもんだろ」

「さっきのお返しっ。八幡顔真っ赤！」

「うるせ。慣れてないんだよ褒められるのは」

「じゃあこれからはたくさん褒めてあげるね！」

「やめろ俺のSAN値が削られていく」

「八幡はすごい！優しい！かっこいい！」

「抱きつくなばかっ」

「……部屋でいちやいちやするなああああ!!!」

今日もa q o u r sは平和です。

45話

「さて、みなさん。これから夏休みですが、夏休みと言えは？」

気温も段々と上がってきて、出来ることなら家でダラダラしていたいのだが、生徒会長……ダイヤから集合の命令を受けたため現在は学校に來ている。

まあ最初に行く気無かったが曜が家まで来てしまったのだ。逃げ場はなかったらしい。

「では、八幡さん！」

「睡眠」

「それはいつものことじゃ……」

なんだと曜。これでも授業は受けてるからな真面目に。数学以外。

「ぶつぶー！ですわ！ルビィ！」

「……あ！ラブライブ！」

「そう！さすがルビィ！よくできまいたねー！」

「うわっ……」

「そー！今ドン引きしましたわね!」

いやだつて、もう生徒会長感ゼロだもん。

「こほん。とにかく、夏休みはラブライブがあります。それに向けて、a q o u r s は合宿を行いますわ!」

ダイヤはそう言うのと計画書のようなものをホワイトボードに張り出した。……なんだこの鬼畜なメニューは。

「あー俺夏休みは用事が」

「私もその日は千歌ちゃん和海の家手伝うことになつてるから……」

「曜さん達はともかく、八幡さんは嘘でしょう」

あれ、なんでバレたの? エスパー? 「でしたら、a q o u r s でお店のお手伝いをしましょう! 終わったあとでも練習はできますわ!」

「あの、俺は行かなくていいですかね?」

「ぶち殺しますわよ?」

「すみません行きますはい」

こっわ! なんだよぶち殺しますつて。生徒会長だろ仮にも。そんな物騒な言葉は使っちゃいけません!

結局反抗も虚しく、俺も強制参加が決定したのだった。

「海だあ！」

「いや、お前すぐそこの旅館の娘だろ」

「えへへ、なんか叫びたくて！」

それにしても、先程から花丸が暗い。

「あー、どうした？」

「……待ち合わせの朝5時に行ったのに誰も来なかったすら」

「……」

いや、さすがに朝5時に来るやつ居ないでしょ。というか提案したダイヤも来ないの

かよ。花丸が可哀想すぎる。

「……よく頑張ったな」

「ずらあ……」

なんとなく花丸に同情したので頭を撫でてやる。

花丸は顔がだらけて幸せそうな顔をしている。

「はっちまーん！」

「……鞠莉うるさいぞ」

「そ、れ、よ、りー！どうかしら?」

何が、とは聞くのも野暮だな。鞠莉は紫のビキニを着ている。……正直目のやり場に困る。でも何故だろう、目が吸い寄せられる！これが万乳引力の法則か！

「……八幡?」

刹那、後ろから鬼の声がする。後ろを振り向いてはダメだ。振り向いたら終わる。

「そ、それにしても曜のやつ遅いな」

「聞こえてるよね? どうして無視するの? それにこっち向いてよ」

怖い。寒気が止まらない。なんか鞠莉も怯えてるし。俺の彼女にはどうやら霸王色の覇気が宿っているようです。

「少しお話しようか」

「はこ」

ここの後のことは……想像に任せる。

46話

曜の地獄の説教も終わり、さっそく海の家の手伝いを開始する。皆それぞれ自分の担当につき、働く。俺？俺はほら……

「八幡さん、何帰ろうとしてますの」

「いやほら、俺することなくね？」

「八幡さんには曜さんと同じく料理担当ですわ」

「俺料理は得意じゃ」

「曜さんから妹さんと交互でご飯を作っていると聞きましたが」

あいつのお墨付きかよ……これは逃げ場がない。

「わかったよ……」

「わかればよろしいですわ。さっさと終わらせて練習ですわ！」

「見てはちまん！マリー特製シャイ煮よ！」

「いやなんだこのおぞましい料理は……何入ってんだよ」

「色々よ色々♪ちなみにお値段は10万円!」

「たけえよ。どこの高級料理だ。誰が買うんだよ」

「いいからほらひと口食べてみて?」

「……ん、う、美味しい」

「でしょ!」

「この見た目でこの味が出せるとはある意味天才だな」

「それほどでもあるわね〜!」

認めちゃうのかよ。まあとりあえず値段は考えるところとして味が問題なければ売れるかも。曜は普通に美味そうな焼きそばを作っている。

さて……

「おいヨハネ、お前何作ってる」

「だから善子!……ってあつてた!……ふふふ、刮目しなさい!墮天使の涙!」

「……鞠莉、こいつをここから出せ」

「なんでよく!食べてみなさいよ!食べてみないとわからないでしょ!」

ふむ、一理ある。実際鞠莉のは美味しかったわけだし。

「じゃあひと口………つつつつつつつつつ!?!」

声にならないほどの味が舌に襲いかかる。!!?!」

甘さ、苦さ、辛さ、色々なものが凝縮されて恐ろしい味だ。

色々ないろを混ぜて黒を作ったあの感じ。とりあえず死にそう。

「は、はちまん!? 曜〜! ヘルプミー!」

「どうしたの鞠莉ちゃん? 八幡!? 大丈夫!」

「ふふふつ、どうやらこの墮天使の涙の魅力に取り憑かれてしまったようね」

「鞠莉ちゃん、八幡を運んで! 善子ちゃんちよつと」

「え? よ、曜? か、顔が怖いわよ? ちよ、ちよつと誰かあ!」

なんか周りがうるさいが……あ、ダメだ意識が。

「つ……………は」

目を覚ますと辺りは真つ暗。部屋にいるのは分かったがなにやら腕に柔らかい感触が。

「いやなんでこいつら引っ付いてんの」

曜と鞠莉が両腕に抱きついていて、とりあえずゆっくりと離れる。

「かなり気を失ってたな……」

目も完全に覚めて今から寝る気にはなれないな。外でも出るか。

「寒っ……ん？」

海岸へ向かうと人影が2つ。

「何してんだ？」

「あつ、はちくん起きたんだ」

「大丈夫？色々あったみたいだけど」

「まあ俺はほぼ気を失ってただけだから……お前らこんな遅くに何かあったのか？」

「えっとね」

千歌から話の事情を聞く。

ラブライブの予選と梨子のピアノコンクールの時期が重なっておりどちらを選ぶべきかという話らしい。梨子はピアノコンクールに出るつもりは無かったらしいが……

「私はね、出て欲しいんだ。梨子ちゃんにとってピアノはとっても大切なものだと思うから」

「……」

梨子のピアノに対する想い。それは俺も少しくらいならわかる。

時々音楽室で弾いてるところも見たし。なによりピアノを弾いてる時の梨子は楽しそうだった。

「私ね思うんだ。また前向きに取り組めたらきつとそれは素晴らしい事なんだって」

「千歌ちゃん……」

「だから出て欲しい。ピアノコンクールに」

「……ほんとに、変な人っ」

「わわっ、梨子ちゃん」

「……出るよ、コンクール」

「っ！うん！私、待ってるから！」

今の梨子の目には確かな決意が宿っていた。どうやら決心したようだ。

……俺今回ほぼ何もしてなくね？

映画特別編 誰なんだ!?

「はちくん緊急事態だよ！」

「どした」

「よ、よよよ曜ちゃんが知らない人と歩いてる！」

「……友達じゃないのか？」

「男の子なんだよ！」

「な……なんだと」

というわけで千歌に言われた場所にやって参りました。目の前には曜と見知らぬ男が1人。

……っていうかなんでほかのメンバーも集まってんのこれ。

「ね？」

「いや、あれだろ、親戚だろ」

「いとこ、とか？」

「いとこって結婚できるって聞いたわよ？」

「……」

「よ、よしこちゃん！はちくん気絶してるよ！」

「わ、私のせい!？」

「でも誰なんだろう？」

「弟ずらか？」

「うーん、弟いるなんて聞いたことないけど」

「これはあとをつける必要があるな」

「あ、はちくん復活した」

曜に限ってそんなこと……

「八幡くん、汗すごいわよ？」

「ハハハ何言ってるんだ梨子。気の所為だ」

「目もすごく泳いでるわよ」

「天に帰れヨハネ」

「なんか私だけ扱い雑じゃない!？」

結局正体もわからないので引き続き尾行を開始する。

「2人とも楽しそうだね」

「ねえ八幡くん、これを機に私の方へ乗り換えるって言うのは」

「梨子ちゃん静かに」

「はい」

「やばっ！曜が振り向くわ！」

「みんな隠れて！ほらはちくんも！」

「お、おい」

……一言言っただけ。何だこの隠れ方は。ルビィや花丸はその辺の物陰に隠れてるだけだが、俺の体勢がとりあえずきつい。ヨハネが上に乗ってるせいで余計に。

「おいヨハネ重い」

「なっ！お、重くないわよ！ばか！」

「いつて！抓るな！ばれる！」

「2人とも静かに！」

「……??」

「はあ……結局誰かわからなかったね」

「こうなったら直接聞いてみるすらか？」

「それでもしよからぬ答えが返ってきたらどうするのよ」

「……俺には小町がいるし」

「はちくんダメだよ！現実から目を背けちゃ！大丈夫曜ちゃんがそんなことするわけないよー！」

「そ、そうだよな」

「信じよう！」

「おう」

「新年会？」

「そう！お母さん達がね、八幡も連れてきたらつて」

あの日から数日、結局分からずじまいのまま年末が迫っていた。

そんなある日、曜から電話が掛かってきた。なんの用かと思えば突然そんなことを言われた。

曜の家族や親戚が集まる中俺一人って……

「いや部外者の俺が言っても仕方ないだろ」

「えー?……でも八幡は恋人だし部外者じゃないでしょ?」

「……結婚してるわけでもないしやっぱり」

「じゃあ……する?」

「な、何言ってるんだまだ俺たち高校生だぞ」

「高校生じゃなかったらいいの?」

「……その、なんだ、まあ……あれだよ」

「ごまかした」

「とにかく俺はいい」

「……私は八幡と新しい年を迎えたいな」

「……はあ、ほんとにいいのか?」

「!来てくれるの?」

「まあ……いいぞ」

「やった!ありがと!みんなにも伝えておくね!」

曜は喜んでるようだが、俺は不安でしかない。前のあの日のこともあるし。

そんな不安も無くなる訳もなく、当日を迎えた。

「あけましておめでよーそろー!」

「よーそろー!!」

え、なに、ヨーソローって渡辺家では公認の挨拶なの？

「君が八幡くんだね？」

「は、はいどうも……って」

「ん？」

渡辺家が盛り上がる中俺は隅の方で大人しくしていると、誰かに話しかけられた。そんなことより驚きなのはその話しかけてきた人物。

先日曜と一緒に歩いていた男だ。

「ぼくは渡辺月。よろしくね」

「お、おう……よろしく」

「……どうしたの？僕の顔じつと見て」

「いや……曜とはどういう」

「いとこ同士なんだ。学校も一緒になるかと思ってたんだけど千歌ちゃんっていうお友達達のところに行っちゃって」

「そ、そうか」

「あれ、月ちゃんもう話してたの?」

「あ、曜ちゃん。曜ちゃんの初めての恋人だしどんな人かと思って」

「八幡はひねくれてるけど優しいんだよ!」

「……あはは! そうなんだ!」

「……余計なこと言うなよ」

「だって本当のことだもん! 私はそんな八幡が大好きだからね!」

「アツアツだねえ」

「月ちゃんは彼氏とかいないの?」

「ぼく? いないいない。生徒会長の仕事もあるしね」

「……ちよつと待て、彼氏?」

「うん?」

「……ということはいつは所謂同性愛者なのか。それなら変な心配はいらないが……」

「……一応言っておくけど一人称ぼくだけど女だからね?」

「……まじで?」

「まじで」

「……はああああああ」

あのバカ千歌の勘違いだったのか。なんか疲れた。

「どうしたの？」

「あー、いや、まあなんでもない」

「……何か隠してるでしょ」

「もう解決した」

「なら言つて」

「……」

「ぷっ！あはは！そういうこと！」

「もう……私が八幡以外の男の人と歩くわけないじゃん」

「いや、千歌のやつがそう言うから」

「まあ良かったじゃん、何も無くて」

「それはまあ……」

「愛されてるね、曜は」

「そ、そうかな？えへへ」

「八幡くん、曜のこと泣かせちゃダメだよ？」

「……それは無理だな」

「なんで？」

「嬉しい時に泣くかもしれないだろ」

「……ふふっ、そうだね。悲しませちやダメだよ！」

「それなら約束する」

「もう、月ちゃん親みたい」

「生徒会長だからある意味親みたいじゃない？」

「学校違うじゃん！」

「まあまあ細かいことは気にしない！それより2人とも、ご馳走無くなっちゃおうよ！」

「そうだった！ほら八幡食べよ！」

「おう」

「あ、言い忘れてた」

「なんだ？」

「耳貸してっ」

「……なんだよ」

「……私も愛してるよ」

「っ！ごほっ！」

「さー！いっぱい食べるぞー！」

「つたく……曜といると心臓に悪いな。」

「まあでも……こういう賑やかなのもいいかもな。」

47話

「行っちゃったね、梨子ちゃん」

「まあ大丈夫だろ、あいつなら」

「千歌ちゃん！八幡！早く戻ろー！」

「あ、うんー！はちくん行こー！」

梨子を駅で見送った俺達。きつと梨子なら心配いらないだろう。

問題と言えどどちらかと言うところこちらにあるのだ。

「それじゃあ最初から……」

さつそく学校へ戻って練習を始めようとしたわけだが、今回の曲では梨子と千歌がセクターを務める予定だった。しかし梨子はピアノコンクールのためいない。つまり梨子のポジションが空いてしまっているのだ。

「ど、どうしよう?」

「まあ普通に考えたら千歌と相性のいいやつが梨子の代わりに踊るしかないな」

「相性……」

その一言で視線はある人物に集中する。

「……ん？え、わ、私!？」

そう、曜だ。曜なら千歌とも幼馴染で昔から仲良しですつと一緒に居るし適任と言える。

「曜ちゃん!」

「で、でも」

「曜、多分これはお前が1番適任だ。お前で無理だったら他のやつでも無理だと思う」

時間も限られている。たくさん練習すれば他のメンバーでも出来るかもしれないが大会は刻一刻と迫っているのだ。

「……できるかな、私に」

「……お前なら大丈夫だ、自信持て」

「あ……」

そう言つて俺は曜の頭を撫でてやる。おいそこ、ニヤニヤすんな。

「……うん!私頑張るよ!」

「ありがとう!曜ちゃん!」

「決まりだね。曜には負担をかけちゃうけど、みんなでカバーしよ」

果南の掛け声と共にみんなのやる気もよりいっそう上がった。

これなら何とかかなりそう……だと思っていたのだが。

「ワン、ツー、スリー、フォー」

「わっ」

「えっ」

千歌と曜のタイミングがなかなか合わない。

もうかれこれ10回は練習した。

「まだだ……」

「とりあえず、今日のところは終わりにしましょう。時間も遅くなってきました。まだ時間はありますわ」

2人のタイミングが合わない理由。それを解決しない限り先には進めないだろう。俺の感が正しければ……原因は曜にある。

「美味しいずらー!」

「ずら丸、あんた太るわよ」

学校を出てコンビニで寄り道をしていた俺達。

そこでも千歌と曜は練習していた。

「……千歌ちゃん、梨子ちゃんと練習してた時みたいに踊ってみて?」

「え？う、うん」

「それじゃあ行くよ。ワン、ツー、スリー、フォー」

「あ！合った！」

「天界の合致！」

「さすが曜ちゃん！」

「これなら問題ないでしょ？」

「うんっ！」

一見、成功したようにも見えた踊り。確かに成功はしているのだろう。

「すまん、俺と曜は先に帰る。行くぞ」

「え、は、八幡!？」

「……どうしたんだろう？はちくん」

曜の手を引いて俺は展望台にやって来た。別に場所は関係ないが。ただ話したかったのだ。ここをハッキリさせないと本番で多分失敗する。

「どうしたの？こんな所に来て」

「……俺はずっと違和感を感じていた」

「え？」

「時々曜が暗い顔してるときがあつて、最初は気の所為かと思った。でも違った。確信

に変わったのは前の海の家るときだ」

「ちよ、ちよつと待って八幡なんの話？」

「……はつきり言うぞ、今のままじゃ多分本番で失敗する」

「え？でもさつき成功したじゃん！」

「見た目はな。でも根本の部分じゃ全く成功してない」

「え……」

「曜、お前千歌と梨子が仲が良くなつていくことに嫉妬してるだろ」

「っ！な、何言つて」

「お前が暗い顔をしてる時、その目線の先にはいつも楽しそうに話す千歌と梨子の顔が

あった」

「……」

「千歌ちゃんは今より梨子ちゃんといた方が楽しいんじゃないか、って感じか？」

「……あはは、よく見てるね」

「彼女だしな」

「……うん、八幡の言う通りだよ。……初めて千歌ちゃんにスクールアイドルを誘われた時は嬉しかった。千歌ちゃんと一緒に何か出来るんだって思つて。でも、それから梨子ちゃんやみんなが入つて……別に私である必要はないんじゃないかって。梨子ちゃ

んと話してる方が楽しそうだし……」

「……はあ、今のお前は千歌よりバカだな」

「ええっ!？」

「あのおな、お前何年あいつの幼馴染やってんだ？」

「は、はひいふあん？いひやいよ！」

「千歌のことを一番知ってるのはお前だろ。千歌がどういうやつなのか思い出せ」

「千歌ちゃんを……」

「お前、人に合わせるタイプだもんな。さっきの時と千歌に合わせてた」

「……うん」

「そんなんじや誰も感動しないぞ。お前ももつと我儘言っがいいんだ。素直になってい

いんだよ」

「……八幡には言われたくないけど」

「……ま、まあとりあえず本心をあいつにぶつけてみる。曜が素直になれさえすれば

きつと簡単なことなんだよこれは」

「……簡単なこと」

「俺に言えるのはこれくらいだ。あとは自分で考えろ」

「ね、もしかして他のみんなにもバレてる？」

「千歌や1年は知らんが……3年生あたりなら気づいてるんじゃないか？」

「あはは……恥ずかしいなあ」

「ほら帰るぞ。そろそろここも閉まるし」

「あ、うん。……八幡！」

「あん？」

「ありがとう」

「……おう」

そしてライブ当日。

「おはヨーソロー！」

「曜ちゃん！頑張ろうね！」

「うんっ！」

曜の顔は以前と比べてまるで別人のような顔をしていた。どうやら解決したようだ。

「……もしもし」

「八幡くん？どうしたの？」

「もうそつちもコンクール始まるか？」

「うん、そつちも？」

「ああ。……ありがとな」

「ううん、でも突然曜ちゃんに電話してあげてくれ、なんて言うから驚いたわ」

「お前と話すのが一番かと思つてな」

「……嫉妬しちゃうわ」

「は？」

「八幡くんからこんなに想ってもらえる曜ちゃんが羨ましい」

「……別に、マネージャーだしこんなもんだろ」

「照れてるの？」

「切るぞ」

「あー！待って待って！……頑張ろうね」

「……俺は踊らないけどな」

「もう、すぐそういうこと言うんだから」

「八幡？誰と話してるの？」

「っ！よ、曜か」

「曜ちゃん？」

「梨子ちゃん？」

「えっ！梨子ちゃん!？」

曜を初めにそれを聞いたメンバーが全員俺の元へ寄ってきた。

きつい。電話ひとつに群がりすぎだ。

「みんな、頑張ってね」

「うんっ！梨子ちゃんも！」

「それじゃあ八幡くんから一言！」

「おい」

今すぐ電話を切ってやろうか。

時すでに遅し、メンバーは全員こちらの言葉を待っていた。

戻ってきたらあいつには仕返ししてやる。

「……あー、まあ、あれだ」

「もう八幡、もつとはつきり！」

「う、うるせえな慣れてないんだよ……楽しんでこい」

「うんっ！」

「そうだね」

「もちろんですわ」

「ヨハネの魅力を思い知らせてあげるわ！」

「が、頑張ルビィ！」

「練習の成果を見せるぞら！」

「ベリーでキュートなライブにするわ！」

「そうね、私も楽しんで弾くわ」

「ヨーソロー！」

離れていても心は1つ。なんてものは嘘っぱちだ。

クラスが変わればそれまで話していた友達とも絶縁みたいな感じになったりするし
進学なんてすれば音信不通なんてこともよくある。

だが俺は今だけは、柄にもなくその言葉を信じていた。